赤ちゃんからおとなまで

聖書教育

2022年 4 5 6 月号

総主題 時代を生きる教会

テーマ 聖なる風に押し出されて

マルコ・使徒・コロサイ

なまえ：

目次

聖書教育 2022年4・5・6月号

テーマ 聖なる風に押し出されて

教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の全領域において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。
日本バプテスト連盟 1971年制定、1999年改訂
聖書教育ホームページ　https://www.bapren.com/

1　目次
2　プログラム表
3　準備のための聖書日課　森 淳一

特集・連載

4～　特集　ペンテコステメッセージ　奥村敏夫
6～　特集　憲法改正を考える　林 健一
8～　連載　命どぅ宝の日をおぼえて　壱岐基子
10～　連載　今、信仰を告白するということ　伊藤世里江
12　執筆者紹介
13　概論　この時代に「コロサイの信徒への手紙」を読む　中條譲治

今号の展開例　第1課～第13課

14～　聖書の学び・成人科　中條譲治
16～　みんなで聴く聖書のおはなし　溝上哲朗
17～　青少年科　本山大輔
18～　幼小科　松坂有佳子

92～　暗唱聖句手話　塩山幸子
94～　暗唱聖句カード　新共同訳・口語訳
99　『聖書教育』奉仕者紹介…ワークシート編
100　次号予告

2022年度 聖書教育 2020～2022年度プログラム 総主題 時代を生きる教会

課	月　日			週題	聖書箇所
1	4月3日		マルコ・使徒・コロサイ	ユダヤ人の王	マルコ15:6～20(参照15:1～5、21～32)
2	4月10日	受難週		あらわになった神	マルコ15:21～41
3	4月17日	イースター		約束のことば	マルコ16:1～8
4	4月24日			アテネでのパウロ	使徒17:16～34
5	5月1日			恐れるな、語り続けよ	使徒18:1～11
6	5月8日			それでもエルサレムへ	使徒20:17～38
7	5月15日			神の前で、人々の間で	使徒22:30～23:11
8	5月22日			鎖につながれながら	使徒26:19～32
9	5月29日			ともに元気に	使徒27:13～38
10	6月5日	ペンテコステ		聖霊は語り続ける	使徒28:17～31
11	6月12日			今や、明らかにされた!	コロサイ1:24～2:5
12	6月19日	沖縄命どぅ宝の日		新しい人を着て	コロサイ3:5～17
13	6月26日	神学校週間		祈りの輪の中で	コロサイ4:2～6
14	7月3日		エフェソ・マタイ・ダニエル	ほめたたえられますように	エフェソ1:3～14
15	7月10日			かなめ石はキリスト	エフェソ2:14～22
16	7月17日			でっかい愛がうれしくて	エフェソ3:14～21
17	7月24日			心の底から新たにされて	エフェソ4:17～24
18	7月31日			愛されている子ども	エフェソ5:1～20
19	8月7日			神の武具を身に着けなさい	エフェソ6:10～20
20	8月14日	平和		平和を実現する人々	マタイ5:9
21	8月21日			それでも神さまに	ダニエル1:1～21
22	8月28日			ダニエルは思慮と知恵とをもって	ダニエル2:1～24(参照2:25～45)
23	9月4日	教会学校月間		燃え盛る炉の中で	ダニエル3:13～30
24	9月11日			獅子の洞窟の中で	ダニエル6:10～29
25	9月18日			ダニエルの祈り	ダニエル9:1～19
26	9月25日			その時まで、その時には	ダニエル12:1～13
27	10月2日		エズラ・ネヘミヤ・ルカ	バビロンからの帰還	エズラ1:1～11
28	10月9日			神殿建設のはじまり	エズラ3:1～13
29	10月16日			神殿の完成	エズラ6:13～22
30	10月23日			礼拝を整える人たち	エズラ8:15～23(参照8:24～30)
31	10月30日			エルサレムへの想い	ネヘミヤ2:1～10
32	11月6日			良い企てへの備え	ネヘミヤ2:11～20
33	11月13日			主を喜び祝う日	ネヘミヤ7:72～8:12
34	11月20日			みんなで賛美	ネヘミヤ12:27～43(参照12:44～47)
35	11月27日	世界祈祷週間		立ち上がるイエスさま	ルカ4:16～21
36	12月4日			ヨハネ誕生の約束	ルカ1:5～25
37	12月11日			イエス誕生の約束	ルカ1:26～38
38	12月18日			マリアとエリサベト	ルカ1:39～56
39	12月25日	クリスマス		イエスの誕生	ルカ2:1～20
40	1月1日		ルカ	十二歳のイエス	ルカ2:41～52
41	1月8日			荒れ野の試み	ルカ4:1～13
42	1月15日			罪を赦す人	ルカ5:17～26
43	1月22日			安息日の主	ルカ6:1～11
44	1月29日	協力伝道週間		ヨハネとイエス	ルカ7:18～35
45	2月5日	信教の自由		イエスの涙、イエスの怒り	ルカ19:41～48
46	2月12日			ともし火をともして	ルカ8:16～18
47	2月19日			富を積む場所	ルカ12:13～21
48	2月26日			見つけだすまで	ルカ15:1～10
49	3月5日			うるさくてかなわないから	ルカ18:1～8
50	3月12日			主がお入り用なのです	ルカ19：28～40
51	3月19日			ぶどう園と農夫	ルカ20：9～19
52	3月26日			最後の晩餐	ルカ22：14～23

2022年1月現在

森 淳一　高崎キリスト教会 牧師

2022年4月

準備のための聖書日課

1 日㊎ マルコ11:1〜11　熱狂的歓迎
2 日㊏ ルカ23:13〜25　熱狂的憎悪
3 日㊐ マルコ15:6〜20　ユダヤ人の王
4 日㊊ 詩編2:1〜6　主が即位させる王
5 日㊋ テモテ6:11〜16　王の王、主の主
6 日㊌ フィリピ2:6〜11　十字架の死に至るまで従順に
7 日㊍ マルコ8:31〜38　自分の十字架を背負って
8 日㊎ 詩編22:1〜19　なぜわたしをお見捨てになるのか
9 日㊏ マルコ1:1　神の子イエス
10日㊐ マルコ15:21〜41　あらわになった神
11日㊊ マルコ15:42〜47　イエスの葬り
12日㊋ 使徒言行録2:22〜36　十字架のイエスを神は主とされた
13日㊌ ペトロ一3:18　死に渡された救い主
14日㊍ ガラテヤ3:1〜14　十字架のキリストを示されて
15日㊎ コリント一1:18〜21　十字架の言葉は神の力
16日㊏ コリント一1:22〜25　十字架につけられたキリストを宣べ伝える
17日㊐ マルコ16:1〜8　約束のことば
18日㊊ コリント一15:3〜8　最も大切なこと
19日㊋ ローマ1:1〜6　異邦人のための使徒
20日㊌ 使徒言行録17:1〜9　テサロニケでのパウロ
21日㊍ 使徒言行録17:10〜15　ベレアでのパウロ
22日㊎ ヨハネ4:22〜23　まことの礼拝
23日㊏ コリント一15:12〜19　キリストが復活しなかったのなら
24日㊐ 使徒言行録17:16〜34　アテネでのパウロ
25日㊊ コリント一2:1〜5　恐れと不安の中で
26日㊋ ローマ16:3〜4　協力者と共に
27日㊌ コリント一4:10〜13　キリストを証しするために
28日㊍ コリント一4:14〜17　キリストに結ばれた生き方を思い起こす
29日㊎ 使徒言行録13:44〜47　異邦人の光
30日㊏ マタイ10:26〜31　だから、恐れるな

2022年5月

準備のための聖書日課

1 日㊐ 使徒言行録18:1〜11　恐れるな、語り続けよ
2 日㊊ コリント一16:15〜18　コリントでパウロを支えた人たち
3 日㊋ 使徒言行録19:1〜10　エフェソでのパウロ
4 日㊌ エフェソ2:1〜10　行いではなく恵みによって
5 日㊍ エフェソ2:14〜22　キリストにおいて一つ
6 日㊎ ローマ15:22〜29　エルサレムへ行く目的
7 日㊏ 使徒言行録21:1〜16　主の御心を求めて
8 日㊐ 使徒言行録20:17〜38　それでもエルサレムへ
9 日㊊ 使徒言行録21:17〜26　エルサレムでのパウロ
10日㊋ 使徒言行録21:27〜36　パウロ逮捕される
11日㊌ エゼキエル13:8〜12　偽りの預言者
12日㊍ フィリピ3:5〜6　律法に関してはファリサイ派の一員
13日㊎ 使徒言行録1:8　イエスの証人とされて
14日㊏ 使徒言行録22:22〜29　パウロと千人隊長
15日㊐ 使徒言行録22:30〜23:11　神の前で、人々の間で
16日㊊ 使徒言行録24:27〜25:12　皇帝への上訴
17日㊋ 使徒言行録25:13〜22　パウロの主張
18日㊌ 使徒言行録26:1〜11　アグリッパ王の前での弁明
19日㊍ 使徒言行録26:12〜18　あなたを証人にするために
20日㊎ ルカ21:12〜13　証しする機会
21日㊏ テモテ二2:8〜10　神の言葉はつながれない
22日㊐ 使徒言行録26:19〜32　鎖につながれながら
23日㊊ 使徒言行録27:1〜8　ローマへ向かって
24日㊋ 使徒言行録27:9〜12　パウロの忠告
25日㊌ ローマ5:1〜5　苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を
26日㊍ ルカ21:7〜19　髪の毛一本も
27日㊎ ルカ9:10〜17　賛美と祈りを唱えて
28日㊏ ルカ22:14〜23　共に生かされている恵みを覚える
29日㊐ 使徒言行録27:13〜38　ともに元気に
30日㊊ 使徒言行録27:39〜44　全員無事に
31日㊋ 使徒言行録28:11〜16　ローマ到着

2022年6月

準備のための聖書日課

1 日㊌ ルカ18:31〜34　主イエスの姿に重ねて
2 日㊍ イザヤ6:8〜10　預言者イザヤを通して
3 日㊎ コリント一9:1〜12　キリストの福音を妨げず
4 日㊏ コリント一12:1〜3　聖霊によらなければ
5 日㊐ 使徒言行録28:17〜31　聖霊は語り続ける
6 日㊊ コロサイ1:9〜20　御子は教会の頭
7 日㊋ コロサイ1:21〜23　福音に仕える者として
8 日㊌ フィリピ1:12〜14　福音の前進
9 日㊍ コリント一12:26〜27　同じキリストの体の一人一人
10日㊎ フィリピ1:27〜30　キリストのために苦しむことも
11日㊏ ローマ11:25〜36　すべての人を憐れむため
12日㊐ コロサイ1:24〜2:5　今や、明らかにされた!
13日㊊ コロサイ2:6〜19　キリストに結ばれて歩む
14日㊋ エフェソ2:14〜22　一人の新しい人へ
15日㊌ ガラテヤ3:26〜29　キリストを着た者は
16日㊍ ガラテヤ5:16〜26　肉の業と霊の結ぶ実
17日㊎ コリント一13:8〜13　最も大いなるものは愛
18日㊏ コロサイ3:1〜4　地上のものではなく上にあるものを求めて
19日㊐ コロサイ3:5〜17　新しい人を着て
20日㊊ コリント二1:8〜11　祈りの援助
21日㊋ ローマ15:30〜33　わたしと一緒に祈ってください
22日㊌ コリント二2:12〜13　主によって門が開かれる
23日㊍ コヘレトの言葉3:1〜11　何事にも時があり
24日㊎ マタイ5:13〜14　地の塩、世の光
25日㊏ マタイ10:16〜23　蛇のように賢く、鳩のように素直に
26日㊐ コロサイ4:2〜6　祈りの輪の中で
27日㊊ コリント二2:1〜4　手紙を用いてつながる
28日㊋ 詩編104:1〜4　わたしの魂よ　主をたたえよ
29日㊌ 詩編5:12〜13　主の祝福に守られて
30日㊍ ヨハネ15:11〜17　わたしがあなたがたを選んだ

（聖書は、日本聖書協会新共同訳を使用）

開かれた教会になること

使徒言行録1章6〜8節

釧路キリスト教会　牧師
奥村 敏夫

聖霊の働きを聖書から

人は「本当にいい!」と思ったら、それを他人に伝えたくなるものです。釧路キリスト教会に着任後間もなくから、毎週の聖書研究会で『使徒言行録』を精読してきました。約6年間毎週、およそ300回にわたって連続講解しました。それは約束の聖霊が弟子たちに注がれた後にどんな事が起こったかをしっかり学ぼうとしたからです。70〜80代の方々が毎回一生懸命ノートを取っておられるので、語る方も力が入りました。私たちへの聖霊の働きは、聖書を通して、静かに深く作用してきたように感じられます。歴史の中に示されているリアリティーを解凍し、今日の福音理解に迫りたいとの願いからです。尊敬するM．L．キング牧師が厳しい迫害の中にあっても福音信仰に立って公民権運動に身を投じたのも、W．ケアリー氏がかつてアジア伝道に生涯をささげたのも、共通の動機によるものだと思います。あのルカもまた、この使徒言行録や福音書でリアリティーを伝えて、自らも一伝道者としての生涯を送った一人でした。

開かれた教会とは

私たちの教会では「内的集中と外的奉仕」の合言葉の下、み言葉への沈潜（ちんせん）と祈りの中で“開かれた教会”を目指そうという方針が示されました。この方針の下に、ウイークデイミニストリーや連続福祉講演会を開催、チラシ配りなどにも力を入れてきました。ある時は夏の暑い最中、教会案内を配るために関東から80代の協力牧師夫妻が来られ、約40日間ほぼ毎日ボランティアでチラシ配りの奉仕をしてくださいました。その存在が教会の方々の視点

を変えてくださったように思います。

私は40年ほど前、来日経験があり教会の成長を経験されたテキサス州タイラー教会牧師のポール・パウエル師のもとをお尋ねし、教会の成長の秘訣を2週間ほどかけて学んだことがあります。保守的なテキサスにあって果敢に闘っておられた先生です。驚きの連続でした。当時オイルショックがメキシコ湾岸を襲い、市中に大量の失業者があふれていました。教会はいち早く体育館を2棟作り、20人あまりいた牧師やスタッフの約半数と信徒たちをそこに投入して救援活動に打ち込んでおられました。その結果、その町の人口の約3分の1の方々が教会に信頼を寄せ、結果として急成長していることがわかりました。

「伝道」の捉え直し

釧路キリスト教会の取り組みについて証しさせてください。取り組みというよりは“実験”のようなものかも知れません。ここ釧路は、多くの地方都市がそうであるように、若者の流出と産業の衰退、人口減が進み、毎年三千人規模で人口減少が続いています。かつて市とその周辺にあった約30の様々な教派の教会は半減し、長い無牧師の期間に耐えて来られました。詳しくお伝えする紙面がありませんが、現在釧路キリスト教会での合言葉は“4つの礼拝”です。聖霊の導きとしか思えませんが色々なきっかけから、市内にある私たちの教会から約1時間の「厚岸（あっけし）地区礼拝」（牧場）、約2時間半の「弟子屈（てしかが）地区礼拝」（公共施設の借室）、そして市周辺に技能実習生としてフィリピンから働きに来られている方々の為の「英語礼拝」が加わることになりました。厚岸・弟子屈共に、かつては2～3あった教会が消滅した“無教会地域”です。また道東には直接英語で礼拝できる所がなく、行き場を失っておられる外国人の為に、非力を承知で教会は決断して、送り迎えと共に、夕食の提供と衣類を始め日用品の分かち合いを毎回することになりました。70歳を超える牧師にとって、日本語の説教に比べて約3倍の準備時間が必要です。でも常に20～30人の出席があり、教会員の方々も様々な形で奉仕に加わっておられます。

コロナの影響や主要産業の撤退・倒産等で苦しんでおられる方が多いことが判ったことをきっかけに、昨年10月から毎月一回、食料無料配布プロジェクト「わかちあい釧路」を立ち上げ、教会を会場に、近隣のボランティアの方々と共に取り組んでいます。民間ベースでは初めてのようで、フードバンクや企業だけではなく、広範な市民の方々が毎日のように物資を持ち寄ってくださいます。食材や衣料を分かち合うことを通して、新聞などにも取り上げられ、結果として教会がプラットホームの役割を果たすことになり、礼拝などに出席される方々が増えて、バプテスマを受ける方々も続いています。

一人ひとりの上に

主イエスが公生涯を始められるときに、彼の上に「聖霊がハトのように降った」とあります。一方“ペンテコステ”では「一人ひとりの上に」降ったことが記録されています。これは重要です。主イエスの“遺言”であり“約束”でもあるこの言葉「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力（デュナミス）を受ける」（使徒1：8）とあり、その言葉の通りに弟子たちは一人ひとりが伝道者として証しし、国境を超え、やがて異民族にも福音の門戸を開いていくことになります。聖霊は違いを受け入れ、それを喜ぶ群に造り変えてくださるのです。

憲法改正について考える
誰のための憲法・9条ですか

日本国憲法
第9条【戦争の放棄，戦力及び交戦権の否認】
⑴日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
⑵前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

9条における平和への願い

1947年5月3日に日本国憲法が施行されて75年になります。『こども六法』（著者・山崎聡一郎、株式会社弘文堂）では「憲法はすべての法律の生みの親　国のしくみと理想が書いてあるよ！」と憲法が他の法律とは違う位置にあることを言っています。日本国憲法の三大原理である国民主権、平和主義、基本的人権の尊重は、小・中・高の社会科の関連科目の授業で勉強する内容です。しかし私たちは憲法をどれだけ知っているでしょうか。

日本国憲法第9条は「戦争の放棄」「戦力の不保持」「交戦権の否認」を規定し、先の三大原理の一つ「平和主義」を示しています。9条において「国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」。何を永久に放棄するのか、「戦争と武力の行使」です。国際間の紛争を解決するための手段として日本は戦争と武力を行使しないこと、しかも永久に放棄することを世界に向かって宣言したのです。それゆえ日本国憲法は世界でもほかに例をみない画期的な憲法といえるでしょう。世界からその姿勢は高く評価されてきました。しかし日本が他国から侵略を受けた場合、国家そのものを失うという大きな代償を払うことになるかもしれません。それでも先人たちは平和を願い求め9条を憲法に入れたのです。「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイ5:9）イエスさまの言葉が心に響きます。

9条は時代に合わない?

2012年12月の安倍政権発足後から憲法改正についての議論が国会でなされてきました。「今の情勢に合わせた憲法改正が必要だ」、その声はコロナ後さらに国民の間でも高まっているように感じます。特に「9条を改正する必要がある、武力を行使できなければ、他国からの侵略があったとき日本は何もできないではないか」という声です。「時代に合う憲法」「時代に合った教会」という言葉に私は違和感を持つのです。時代に合わせて自分たちのためだけに変えていく、そこに私の隣人はいるでしょうか？ 2021年3月に、沖縄・東京を会場に第7回9条世界宗教者会議『憲法9条とアジアの平和～沖縄からの祈り～』

日本バプテスト太田キリスト教会
牧師　林 健一

がオンラインで行われました。沖縄からの祈り、沖縄戦を体験された方の証言を心かきむしられる思いで聴きました。「平和憲法９条と沖縄」で基調講演をされた小林武さん（沖縄大学）は基地がある沖縄は憲法前文にある「平和のうちに生存する権利」が奪われてきた歴史であり、今なお「平和憲法９条」が実行されていない、それは日本全体の課題であるとの訴えに、９条の実現を求めている人たちの声に気づかされました。この時、教会はイエスさまから問いかけられているのではないでしょうか。あなたは誰に思いをよせるのか？と。

９条が実現していくために

沖縄の友人と基地問題について話をしていた時のこと、友人に「そちらで基地を引き受けてくれるか」と尋ねられ、私は返答に窮しました。友人は「沖縄の米軍基地を本土に引き取ろう」という運動が全国で展開されていることを教えてくれました。米軍基地の７割が沖縄にあります。私がいる群馬はゼロ、「基地を引き受けてくれるか」との問いに答えようとしない、「シランフーナー（知らんふり）の暴力」を私は友人にしていたのです。私たちは、平和憲法９条は知っています。ですが日本のすべての人たちに９条が実現されていないことを知っているでしょうか。一人のクリスチャンによって「憲法９条にノーベル平和賞」というアイデアが発案され2014年・15年と、二年連続してノーベル平和賞の候補になっています。私はこの運動を知った時、驚き同時に、正直冷めた思いで見ていました。しかし今は恥ずかしく思います。平和を願う人たちに９条を知ってほしいと、９条を広げていくための地道な働きに敬意を表したいと思います。

最後に

作家井上ひさしさんが日本国憲法について書いた文章の一節です。『「きみたちは長くは生きられまい」と悲しそうにしていた先生が、こんどはとても朗らかな口調で「これから先の生きていく目安が、すべてこの百と三つの条文に書いてあります」…「きみたちは三〇、四〇まで生きていいのです』（『こどもにつたえる日本国憲法』文・井上ひさし　絵・いわさきちひろ　講談社）。戦前、大人が子どもたちに長くは生きられまいと言わざるを得ない国とはどんな国なのでしょう。いま大人である私は若者たちに何を語るのか。「きみたちは、生きていいのだ」と９条を彼らと分かち合っていきたい、共に歩む者でありたいのです。

連載

命（ぬち）どぅ宝の日をおぼえて

平和をつくり出すものは幸いである

示された道

2001年日本バプテスト連盟が沖縄に拠点開拓伝道所を開設した際、私の所属する前橋教会が宮崎教会と共に母教会として手を挙げました。それが私と沖縄との出会いです。私にとっては那覇新都心伝道所（現教会）開設がなぜ行われたのかも知らないままのスタートでした。その頃の私は執事に選出され沖縄伝道担当になりました。全く乗り気ではなかったのですが、なぜか断ることはしませんでした。その時の思いは「うまくいかなくてもいいや。責任はイエスさまにとってもらおう」でした。ただ、「日曜日に何か予定が入ったときに、一度だけは教会の礼拝がある、と断ってみよう」と決意していました。不思議なことにそれからずっと主の日の礼拝を妨げるものはありませんでした。どんな予定が飛び込んできても、たった一度「礼拝がある」と言うと他の誰かが代わってくれたり予定が変更になったりしました。

イエスさまは沖縄と出会うことを私に望まれました。沖縄に行けるとリゾート気分の私に、厳しい現実を突きつけるイエスさま。事実を正面から見つめ、現場に立つことの大切さを教えられました。沖縄関連の本を読みドキュメンタリー映画を見ることで学ぶことも多くありました。しかし、それよりも、たった一度辺野古の海に船で出て、またキャンプシュワブのゲート前に座って、教えられることのほうが強烈でした。

空から落ちてくるもの

私は今『沖縄から宣教を考える会』の事務局をしています。その活動の目的は、『今なお米軍基地の存在が沖縄の住民に重くのしかかっている現実を踏まえ、日本とアジアや世界の教会の福音宣教のあり方を問い直し、それを推進していくこと』（規約より）です。会の活動を多くの方と共有するため会報誌『レキオから』を発行したり学習講演会を企画したりしています。

その活動のひとつとして今年の3月『何でお空から落ちてくるの』と題する神谷武宏牧師（普天間（ふてんま）バプテスト教会牧師）の講演会を実施しました。内容は2017年12月、普天間教会附属緑が丘保育園の園舎の屋根に米軍ヘリの部品が落下した事故についてでした。屋根に落ちてきた金属の筒。米軍はそれが軍用ヘリの部品だと認めましたが、ヘリから落としたとは認めませんでした。それだけでなく、抗議した神谷牧師や保育園に対し非難が寄せられたりしたというのです。

これまでも沖縄では米軍がらみのたくさんの事件事故が起こっています。過去には戦闘機が落ちてきて小学校が炎上し多くの犠牲者が出たこともありました。戦車が落ちてきて女性が圧死したこと。そして緑が丘保育園の園舎の屋根にヘリの部品が落ちました。その半月後には小学校の校庭にヘリの窓枠が落ちました。

本土に住む私たちにとって空から落ちてくるのは

日本バプテスト前橋教会員　**壱岐 基子**

雨か雪です。それなのにどうして沖縄では、空から何が落ちてくるかわからないと不安を抱えながら生活しなければならないのでしょうか。

武力で平和はつくれない

本土に復帰した後も沖縄にはアメリカ軍基地が残され、更に自衛隊基地も造られました。憲法で保障されている基本的人権が沖縄では守られないことがよくあります。政府は東京や大阪など本土では行わない弾圧を沖縄では平気で行います。辺野古でゲート前に座り込んだ時、座り込みの人数の２倍以上もいる機動隊員に強制排除されながら身をもって感じました。政府の言うことを聞かない人びとは国民として尊重しない、そのような圧力を感じました。

太平洋戦争中沖縄は、島全体が破壊し尽くされるという被害を受け、県民の４人に１人が亡くなった被害者の島でした。しかし敗戦後、ベトナム戦争の頃からずっと、世界各地で戦争をするアメリカ軍は沖縄の基地から出撃し、戦地で爆撃を繰り返して帰還します。沖縄は「加害の島」になりました。基地を提供している私たちも当然加害者です。

キャンプシュワブのゲート前に座り込んでいるおじいやおばあの願いは戦争のない平和な美しい沖縄を子や孫に残したい、ただそれだけです。普天間基地周辺に住む宜野湾市（ぎのわんし）の方たちは基地を無くして欲しいと言います。別の場所に持って行くのなら、その地域の人が今度は被害を受けることになる。だから、「移転」ではなく「撤去」を主張されるのです。今傷んでいる自分たちのことだけでなく、これから傷みを負うかもしれない誰かのことを思いやる優しさを持っておられます。平和をつくり出す人を見た思いでした。

この20年間、たくさんのめぐみをいただきながら声を挙げることも、祈りを捧げることですら不十分な自分を目の当たりにしました。悔いるばかりで悔い改めることの少ない歩みでした。しかしそれすら主はご存じで共に傷んでくださっています。このような歩みの遅いものを『平和をつくり出すものとなるように』と導いてくださる主に感謝しています。

主よ、これからも沖縄の現実を学び平和をつくり出すものとして歩ませてください。どうかこのことを多くの友と分かち合うことができますように。
アーメン

『聖書教育』季刊と統一教案の時代から今を見つめて

1993年度大幅改訂の『聖書教育』が目指したこと

わたしは、1987年2月～2003年3月まで、連盟の宣教部の教会教育担当主事として、『聖書教育』の編集に携わってきました。当時、どうしたら、それぞれの教会の現状に合わせた教会学校の働きを生き生きしたものにするテキストが提供できるだろうかと検討を重ねました。

⑴科別から統一教案へ

当時は、年齢層によって、扱う聖書の箇所が違う科別教案でした。それは年齢層に合わせるという意味では、理想的でもあるのですが、小規模の日本の教会の場合、十分使いこなせていませんでした。土曜日の夜に『聖書教育』を開き、教案誌に書いてあることを受け売りで生徒に伝えるという現状がありました。

教会全体で同じ聖書の箇所から学び、家庭でもそれが話題になるようにしていきたい。そして、同じ聖書の箇所を学ぶことで、事前にリーダー会や祈祷会でその箇所の共同の聖書の学びをあらかじめ行いたい。そのような意図から統一教案を選択しました。

⑵教師からリーダー、生徒からメンバーへ 共同学習の場としての教会学校

対象とする読者を、それまでの教師のための教案誌から、メンバーもすべて手にする「共同学習」のためのテキストと方向転換しました。教える教師、教えられる生徒という一方通行の学習形態から、グループでの分かち合いを大切にし、気づきあいが起こる「共同学習」を目指しました。それまでは、教師だけが教案誌を手にし、手の内を明かさずに、教師が生徒に伝えるというイメージがあったかと思います。教師という呼び方をやめてリーダーにしたのも、「共同学習」や「相互牧会」が起こることを目指したからです。

⑶月刊から季刊へ

3か月ごとの流れを見通していくことを大切にするため、月刊から季刊としました。誌面サイズをA5からB5サイズに大きくし、レイアウトも一新し、視覚的にも見やすいこと、ワークシート、暗唱聖句カードを入れることなど、現場の使いやすさを考えました。

⑷共同牧会の場としてのクラス

共同学習というときに、単に聖書を勉強するのではなく、クラスの中で、お互いを覚えあう共同牧会が起こること。クラスに新来者

シンガポール国際日本語教会
牧師　伊藤世里江

の人を迎えて、新しい人と共に聖書を学ぶことが、喜びとなるように、クラスが伝道・牧会の場となることを目指しました。新しい方が、より新鮮な聖書の読み方ができ、鋭い質問も起こるなど新しい方々に教えられることが多いからです。それぞれのクラスが小さな教会になる、教会学校と礼拝が、教会の両輪になるということも進めてきました。

信徒の教会を大切にするバプテストにとって、教会学校こそが、バプテストの神髄（しんずい）になる。信徒一人ひとりが生き生きと聖書の言葉と向き合い、クラスのメンバー一人ひとりを思い、声をかけあっていく。そのような場に教会学校の各クラスがなることを目指しました。

⑸聖書から生活へ

聖書の箇所は、9年間で、旧新約聖書の主な書を学ぶというカリキュラムを考えました。これを2回、18年間、「聖書から生活へ」というカリキュラムを試行しました。福音書やパウロ書簡はよく学ぶが、あまりそれまで読んでこなかった、旧約聖書の預言書や、歴史書、新約聖書の黙示録にも挑戦しました。大切にしてきたのは、執筆者会でした。まず、執筆者会で、共同学習が起こり、新しい発見や気づきが与えられることを願いました。

⑹教会の現場を考えての変更

目指したことは、「聖書は面白い！」、「聖書がわたしたちの生活につながるのだ」、お互いの分かち合いを通して、聖書からの発見が起こることでした。『聖書教育』を当時、新しくするにあたり、ずっと考えていたことは、「教会の現場」ということでした。30人くらいの規模の教会が多い中で、どのような資料を提供することが、教会の現場の助けになるだろうか、という視点です。

変わらないものと、変えていくもの

社会の状況や、教会の現場が変わる中で、当然、『聖書教育』の内容は変わってきます。今の時代、今の教会に、何が必要なのか。そのことを精査しながら、次の時代に向けての聖書を読む視点の提供が与えられていきます。

連盟の機構改革の中で、来年度から『聖書教育』が月刊になり、ページ数も大幅に減少すると聞いています。なくてならないものは何なのか、考える良い機会です。削り取っていく先に必要なものは何なのか。ダイナミックに、聖書の言葉をわたしたちの生活に照らして、お互いに聞きあっていく。それを教会学校と呼ぼうと呼ぶまいと、バプテストの教会形成に小グループでの共同学習は欠かせない。そのことさえ、抑えられていれば、紙面がどのように変わろうとあまり大きな問題ではありません。

バプテストの教会の教会形成の原点を大切にしつつ、新しい時代に向かってほしいと願っています。

執筆者紹介

概論・聖書の学び・成人科

中條 譲治（ちゅうじょう じょうじ）

長住バプテスト教会　牧師

1993年から季刊として再出発した『聖書教育』も、来年度から新しい形になります。編集委員を長くさせていただきましたが、この節目の時に執筆者として関わらせていただき感謝です。歴代の編集人、伊藤世里江さん、濱野道雄さん、高市和久さん、榎本譲さん、長尾なつみさんたちとの協働作業を思い出します。現在、編集を担っておられる富田直美さん、磯野泰子さんに感謝しつつ、今後も『聖書教育』がみ言葉をもって諸教会を励ます冊子であることを願っています。

青少年科

本山 大輔（もとやま だいすけ）

豊前キリスト教会　牧師

2020年に西南学院高等部聖書科の非常勤講師に任用され、2年間、新型コロナの中を生きる青少年期の人たちと日々出会い、共に学び合ってきました。そして、時に教え子の言葉により、自分の聖書の読み方が問われる経験もしました。教え子に教えられる。うれしい体験です。教会は青少年に「教える」ばかりでなく、青少年から「学ぶ」ことも覚える必要があると思います。そのような青少年科が諸教会で持たれることを心から望みます。

表紙

三浦 あや（みうら）

藤沢バプテスト教会

教会員

表紙タイトル「祈りの輪の中で」

コロサイの信徒への手紙４章２～６節「感謝を込めてひたすら祈りなさい」というみ言葉から、沖縄の命（ぬち）どう宝の日を覚えて描きました。お祈りしている女性は沖縄うちなーからじという髪型です。沖縄の人たちの祈りに寄りそうイエスさまの姿を描きました。沖縄の美しい自然をモチーフにして、紅型（びんがた）のような和柄風に仕上げました。

みんなで聴く聖書のおはなし

溝上 哲朗（みぞかみ てつろう）

久留米荒木キリスト教会　牧師

教会の扉は誰でも入りやすいように一日中開けっ放しです。先日は近くの施設に入所してるというおばあちゃんが、散歩の途中にぶらっと入って来られました。ウェルカム。「こんな突然に、いいの？」と戸惑う同伴の若いヘルパーさんに「教会は突然、ぶらっと行くとこなのよ」と的を得た説明。「ほら、何もない質素さがいいでしょ？ ほら、適度に散らかってるのもいいでしょ？ こういう教会が好き、私はね」。恐れ入りました。いただいたワード、久留米荒木の教会紹介に添えておきます。

幼小科

松坂 有佳子（まつざか ゆかこ）

八戸バプテスト教会　牧師

『聖書教育』はチームワークです。編集を担当しておられる方から「こどもが一人も来なくても、毎週活動を準備しているリーダーがいる。葛藤を抱えながらも、たったひとりのメンバーを想いながら、祈りながら聖書に取り組んでおられる方々がいる。そんな人たちを支えたいと思っている」と言われて、胸が熱くなりました。そんなチームワークに参加させてもらい、そしてこれからもこんな祈りで支え合いながら、教会の現場に立つことができることを心から感謝します。

編集後記

今年度で、季刊誌としての『聖書教育』は終了することとなりました。連載記事では、これまでの『聖書教育』を振り返り、アンケートページに替わって、ご奉仕いただいた方々の紹介を掲載しています。また、なかなか集うことができない教会のメンバーがご自宅で「みんなで聴く聖書のおはなし」をじっくりと味わっていただければとの思いから、執筆者を増員して充実させています。パウロが離れた友に手紙を送ったように、メッセージが皆さまに聞こえてきますよう祈ります。　（N・T）

この時代に「コロサイの信徒への手紙」を読む

長住バプテスト教会
牧師　中條譲治

偽名書簡?

「コロサイの信徒への手紙」は、語彙や文体、思想内容から、パウロ本人の著作ではないと考えられます。語彙で言えば、新約聖書に1回しか出てこない言葉が37個もあるそうです。また、パウロがよく使う、「啓示」、「義」、「信じる」という言葉は、この書には、出てきません。おそらく、パウロの影響下にあった人々（パウロ学派）によって書かれたと思われます。「偽名書簡」、「第二パウロ書簡」とも呼ばれますが、パウロの信仰や神学を否定しているのではなく、それを継承しつつ新たに展開しているのです。

万物救済の祈り

コロサイ書におけるイエス・キリストは、壮大な存在です。「御子」キリストは創造の前から存在し、万物・被造物は御子によって造られ、支えられている（1：15～17）と言います。ここでは、人間としてのイエスが後退し、また汎神論（はんしんろん）になる危険もありますが、壮大な宇宙論的なキリスト論が語られています。更に、キリストの「十字架の血」（1：20）によって、天地のすべてのものが神と「和解」（1：20）されたと言います。これは、今日私たちの関心を、人間の救済だけでなく被造物全体の回復へと向けます。環境破壊の危機が進む中で、万物救済への祈りと環境改善の取り組みは、私たちの課題です。

普遍性の眼差しをもって

コロサイ書の特徴として、脱民族主義をあげることができます。この書が批判している論敵については様々な説が乱立していますが、1つに、「世を支配する霊」（2：8）という言葉などから、ギリシア思想に由来するグノーシス主義者であると推測されます。しかしまた、「割礼」（2：11）や「食べ物や飲み物」「祭りや新月や安息日」（2：16）の規定など、ユダヤ律法主義が批判されています。論敵は、ユダヤの民族的伝統や慣習に縛られていた人たちでもあったのです。パウロ自身が書いたガラテヤ書3：28では、「もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく…」と、民族を越えたキリストの福音の普遍性が語られています。コロサイ書では、このパウロの神学を展開し、徹底して「もはや、ギリシア人とユダヤ人」（3：11）とユダヤ人を後にし、更に「未開人、スキタイ人」も加え、異邦人への福音の広がりを強く語っています。脱民族の思想が反ユダヤ主義になって差別や弾圧に繋がってはなりませんが、今日私たちキリスト者は、民族や国家への偏狭を越えた普遍性の眼差しをもって、世界の出来事を見て行かねばなりません。

聖書の学び

ユダヤ人の王

聖書　マルコによる福音書15章6〜20節（参照15：1〜5、21〜32）

暗唱聖句　それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。
マルコ８：29

1課

4月3日

人間が露わになる時

イエスの処刑を最終的に決めたローマ帝国による審問の個所です。ここには、多くの人々が登場します。ユダヤ側では祭司長たちと群集、ローマ側では総督ピラトと兵士たち、複雑な関係と感情を持つ彼らが、ここでは一つとなってイエスを死へと追いやります。

祭司長たちがイエスを引き渡したのは、妬みのためでした。イエスがローマの庇護下にあったユダヤの神殿体制を批判し、それが民衆の評判を生んだことへの妬み、そして、危機感があったのでしょう。ユダヤの群集はイエスがエルサレム入城した際、熱狂的に歓迎しました（11：9 〜 10）。しかし、人の心は移ろい易いものです。彼らの期待は、イエスの逮捕を潮目に、逆に熱狂的憎悪へと変わっていきました。兵士たちは、様々な国々の傭兵であったと思われます。彼らには、ローマ帝国の力に屈した鬱積した感情がありました。その苛立ちから生じる暴力がイエスに向かいます。暴力が暴力を生む悪循環の果てにイエスがいます。

そして、この審問の責任者としてローマ総督ピラトがいます。ピラトは、ユダヤの総督であった期間（紀元 26 〜 36 年）、上手くユダヤを掌握できなかったようです。彼は、ユダヤが混乱することを恐れました。ユダヤ当局の要請と群衆の声に押し流されていくのです。

妬み、心変わり、暴力、自己保身…人間が抱えるあらゆる醜いものが、イエスの死を前にして露わになるのです。

バラバの釈放

この時、イエスと共に全く受身で審問の結果を待つ人がいました。バラバです。彼は、ローマに反抗して、暴動を起こしたようです。ゼーロータイ（熱心党）の指導者であったのかも知れません。

この個所には、祭りの際の囚人釈放という習慣が記されていますが、歴史学的に現実味が薄いようです。では、なぜマルコ福音書は、イエスの有罪判決におけるバラバの釈放を語るのでしょうか。そこには、「身代わりの受難」（E・シュヴァイツァー、『NTD』NTD 新約聖書註解刊行会）という思想が示されているのではないでしょうか。確かにマルコ福音書には、贖罪論は直接出て来ません。しかし、このバラバとイエスの立場の交替は、イエスの死が身代わりの受難であり、贖罪的救済の意味を持つことを示そうとしているのです。

更にこのバラバの釈放には、倫理的メッセージも込められています。マルコ福音書が書かれた時代的背景には、66 〜 73 年のユダヤ戦争があります。その時、ユダヤの急進的勢力（ゼーロータイ）は、武器を持って暴動を起こしました。その時、キリスト者は、この政治運動への関わり方を問われたのです。その答えが、イエスの姿にあります。武器を持ち暴力に訴えるのではなく、非暴力をもって抵抗する姿です。それはまた、驚くほどの沈黙をもってです。

ユダヤ人の王

この 15 章のローマ側の審問には、「ユダヤ人の王」という言葉が、5 回出て来ます（15：2、9、11、18、26）。14 章まで 1 回も出て来なかった言葉が、突然、頻出するのです。

「ユダヤ人の王」という言葉は、ローマにとっては帝国を脅かす政治的な意味を持っています。もちろん、ピラトも兵士も本気で、イエスを政治的解放者とは考えてはいません。全くの皮肉として嘲笑しているのです。しかし、マルコ福音書は、意識的に「ユダヤ人の王」を、この場面に入れ込んでいます。「おまえがユダヤ人の王なのか？」（15：2）、この尋問の言葉は、イエスへの信仰告白を巡る問いです。つまり、読み手が問われるのです。「あなたは、イエスを何者と思うか？」と（8：29 参照）。

審問されるイエスの姿は、イザヤ 53 章の苦難の僕を思い起こさせます。「屠り場に引かれる小羊のように…彼は口を開かなかった」（イザヤ 53：7）しかし、この方によってこそ、「わたしたちに平和が与えられ…わたしたちはいやされ」（イザヤ 53：5）ます。私たちは、この方こそ「私たちの王」と告白するのです。

準備のための聖書日課			
28日	㊊	お前がユダヤ人の王なのか	マルコ15:1～5
29日	㊋	十字架の王	マルコ15:21～32
30日	㊌	屠り場に引かれる小羊のように	イザヤ53:1～10
31日	㊍	バラバ・イエスかメシア・イエスか	マタイ27:15～26
1日	㊎	熱狂的歓迎	マルコ11:1～11
2日	㊏	熱狂的憎悪	ルカ23:13～25

成人科

● この審問の場面には、イエスを死へと追いやる多くの人々が登場します。祭司長、群集、兵士、そして、ピラト、誰に自らを重ね合わせるでしょうか？その人の何が重なるのでしょうか？ 人間の奥底にある醜さが露わにされます。しかし、彼らはそれぞれに葛藤し、もがいています。そして、結局、イエスを受けとめきれず否定したのです。そんな彼らを、イエスはなお包み、赦します。そのしるしとして、バラバがいるのです。

● イエスを、「友」あるいは「師」としてだけでなく「王」と呼ぶことには、どんな意味があるのでしょうか？ 私たちは、この訴えられ、裏切られ、殴られ、殺されていく者を、「王」と呼びます。それは、弱さや苦しみを負う、この愛こそが世界の支える究極の真理であると信じるからです。人を惑わす富や、暴力をふるう力がこの世を蹂躙し、支配するように思える中でも、それは決して最後のものではありません。最後に勝利し、支配するのはイエスの愛です。イエスを「私たちの王」と呼ぶのは、キリスト者の政治的告白でもあるのです。

ユダヤ人の王

聖書 マルコによる福音書15章6〜20節（参照15：1〜5、21〜32）

暗唱聖句 それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。
マルコ８：29

「ピラト殿！ どうか直ちに裁判を」。祭司長と律法学者たちが屋敷の門を叩きます。出てきたピラトが見たのはギラついた目の宗教者連中と、縄に縛られ、静かにこちらを見る一人の男。

祭司長と律法学者たちは訴えます。「このイエスを死刑にしてください！ この男は自分がメシアだと言いました。皇帝陛下への反逆です」。ピラトはイエスさまに尋ねます。「お前さんがユダヤ人の王様ってか？」。イエスさまは静かに答えます。「それは、あなたが言っていること」。一瞬たじろぎながら、取り調べを続けるピラトに祭司長たちは気色ばんで訴え続けますが、イエスさまは黙ったまま。一言も口を開きません。

ピラトは屋敷の外におしかけてきた群衆に気づきました。人々の前に出て、ふてぶてしい顔を崩さず言います。「祭りだったな。よかろう、一人だけ囚人を解放しよう。誰にする？ お前たちユダヤ人の王様イエスか？」。祭司長たちは人々にけしかけます。「ユダヤのため立ち上がったバラバを見殺しにするのか？」。人々は叫びます。「バラバを解放してくれ！」。ピラトはふてぶてしく問い返す。「あの革命家気取りの男か。お前さんがたの王様はどうする？」。

人々の心に数日前の光景が浮かびます。ロバの子に乗り都に入城したイエスさまを、皆で「ホサナ！ ホサナ！」とお迎えした。この方こそ憎いローマを打ち倒す勇者だ。なのに期待ハズレもいいとこだ！ 誰かが答えます。「十字架につけろよ」。それはたちまち一つの黒い塊になりました。「十字架につけろ！」

ピラトは威厳たっぷりに宣言します。「バラバを釈放せよ」。イエスさまは十字架刑に決められ、兵士たちに引き渡されました。兵士たちはイエスさまに王様の冠を被せます。茨で編んだ冠を。紫の服を着せます。王様の色を。兵士たちは笑いながら敬礼し、叫びます。「ユダヤ人の王様バンザイ」。つばを吐きかけては拝み、ひれ伏しては頭を棒で叩く。それでも黙ったままのイエスさまに、兵士たちはぶつけ続けました。いらだちを、不満を、そして絶望を。

黙ってお尋ねなさるイエスさまが、ここにいます。「君はわたしのことを何者だと言うかい？」。祭司長と律法学者たち、押しかけてきた人々、ピラト、兵士、この人たちには、黙ってお尋ねなさるイエスさまの声が届かなかったのでしょうか。いいえ、届いていました。だから全員がイエスさまに答えたのです。これでもかと自分の返事を投げつけたのです。

ユダヤ人の王

聖書 マルコによる福音書15章6〜20節（参照15：1〜5、21〜32）

暗唱聖句 それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。
マルコ８：29

聖書から…

バラバは暴動を起こし、人を殺すような過激な人物でした。一方、イエスさまは過激さとは程遠く、周辺に置かれた人々と共に生きる方でした。

イエスさまに従う人々が増え、自分たちに反旗を翻すのではないかとの不安がローマにはあったので、両者を亡き者にしたいと思っていました。しかし、ローマ総督ピラトは祭司長に扇動された群衆の圧力により、バラバだけを釈放します。群衆たちは、どうしてバラバを釈放することを選びとったのでしょうか。

群衆たちはイエスさまのような生き方では、自分たちには利益がないと考えたのでしょう。そして、暴動や力によって物事を変えていくバラバのやり方を魅力的に感じ、自分たちの利益になると考えたのかもしれません。

ここでは幾つかの暴力が繰り返されます。まず、言葉の暴力が行われます。イエスさまに対してローマの兵士たちが発する「ユダヤ人の王」という言葉には、属国ユダヤを馬鹿にすると同時に、イエスさまへの侮蔑が込められていました。

「王」には勇ましいイメージが付きまといます。しかし、私たちが「王」と呼ぶ方は、傷つき、罵声を浴びながらも、この世界で弱くされている人々と共に生きられる方です。

言葉の暴力は、身体的な暴力へと繋がります。そして、幾つもの暴力が積み重なっていき、イエスさまは十字架にかけられていきます。暴力のあるところにはいのちの搾取が起こります。イエスさまは暴力に対して「沈黙」しています。これは暴力に対して暴力で対抗しないことと同時に、暴力に屈することなく、立ち向かっていくことの必要性を示しているのです。

分かち合おう

- 昨年、ミャンマー国軍が暴力によって政権を掌握しました。多くの人々がこの暴力に対して抗議活動をしています。いのちが奪われ傷つく暴力に対して、同じように暴力で返したい、返すべきという思いが人間の中に生まれることもあります。そのような思いになる時こそ、聖書に聞きたいと思います。み言葉に示され、暴力にどのような態度を取るべきなのかを共に考えてみましょう。

- ヘイトスピーチを知っていますか？ ヘイトスピーチは憎悪に基づき、特定の民族や集団などに対して攻撃、脅迫、侮辱をすることです。イエスさまは憎むことでなく、愛することを教えておられます。他者を傷つける言葉でなく、他者を励まし、共に生きる言葉が必要とされています。あなたはどんな聖書の言葉に励まされてきましたか？

幼小科

ユダヤ人の王

聖書　マルコによる福音書15章6〜20節（参照15：1〜5、21〜32）

暗唱聖句　それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。
マルコ８：29

1課

4月3日

聖書から…

聖書は「イエスさまは神の子キリストである」と証しするものです。でも今日のお話では、イエスさまは何もなさいませんでした。ひどいことを言われても言い返さないし、ひどいことをされても、やられっぱなし。私たちは「神の子だったら、もっと強くて、かっこよくて、何か素晴らしい話をしてみんなを説得したり、みんなが驚くようなすごいことを起こしてくれたりするはず」と勝手に思い込んでいるのかもしれません。今日のお話に出てくるたくさんの人たちも同じような気持ちだったのでしょう。でも聖書は、このイエスさまを神の子キリストとして証しています。私たちの「きっとこうだ」という先入観を脇に置いて、聖書の物語を味わいましょう。私たちはイエスさまをどんなお方だと思っているでしょう。

活動①

「寸劇　沈黙のイエスさま」

以下の通り配役を決めます。イエス役を真ん中に丸く囲んで立ちます。

●イエス・ピラト・訴える人たち１、２、３

訴える人１「ピラト様、この男はたくさんの人をたぶらかして、暴動を起こそうとしました」

訴える人２「ピラト様、この男は自分のことをユダヤ人の王だと言っています」

訴える人３「ピラト様、こんな男を生かしておくべきではありません」

ピラト「お前はユダヤ人の王なのか？」

イエス「…」

ピラト「暴動を起こそうとしたのか？」

イエス「…」

ピラト「何も答えないのか。彼らがお前を訴えているのに」

イエス「…」

ピラト「はー。どうしたらいいんだ。そうだ、お祭りの時に一人の囚人を許してやることになっているが、この男を許してほしいか」

訴える人たち「いや、十字架につけろ」

ピラト「この男は何も悪いことをしていない」

訴える人たち「十字架につけろ、十字架につけろ」

ピラト「はー、仕方がない。では、そうしなさい」

※演じた後、どんな気持ちになったでしょうか。イエスさまはなぜ黙っていたと思いますか。感想を分かち合ってみましょう。

活動②　ワークシート

「イエスさまへの手紙…きみはわたしのことをなにものだというかい？」

今日のお話を聞いて、どんなことを感じましたか？ 私にとってイエスさまってどんな方なのでしょう。イエスさまに手紙を書いて伝えましょう。文字で表すのが難しい場合は、絵で表してもいいですね。今日のお話を振り返って、心に残るイエスさまの姿を絵に描いてみてもいいでしょう。

ワークシート

イエスさまへの手紙
…きみはわたしのことを なにものだというかい?

イエスさまへ

より

聖書の学び

あらわになった神

聖書 マルコによる福音書15章21〜41節

暗唱聖句 イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。マルコ 15：39

2課

4月10日

苦難の義人

イエスの十字架は、「夜が明ける」（15:1）時、「午前九時」、「昼の十二時」、そして、「三時」と、3 時間ごとに区切った時の流れの中で描写されます。イエスが十字架に付けられた時、兵士たちはイエスの服を奪い、分け合いました。祭司長、律法学者たちはイエスを侮辱しました。そして、一緒に十字架に付けられた二人の強盗もイエスをののしったのです。

これらの描写には、旧約聖書で語られる「苦難の義人」が意識されています。旧約の預言の成就として、イエスの受難を捉えているのです。イエスの叫び、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」、この言葉も詩編 22 編 1 節の言葉です。正しく生きているのに不条理にも迫害を受ける「苦難の義人」、その極みの存在として十字架のイエスがいます。しかし、イエスが受けた苦難は、神がそれを顧みてくださるに終わらず、更に積極的に救済的意味を持つのです。

この場面には、いくつかの称号が出て来ます。十字架の罪状書きには「ユダヤ人の王」とあり、また、祭司長、律法学者たちは、イエスを「メシア、イスラエルの王」と呼びます。いずれも、皮肉、嘲笑の言葉として語られます。しかし、マルコ福音書は、読み手に問うています。このイエスこそ、王、メシアではないのか？ と。「十字架から降りる」ことができず、「自分を救え」ない、また、人々に見捨てられ、神にまで「なぜお見捨てになったのですか！」と叫ぶ、この人こそが、真の王、救い主であると語っているのです。

この人は神の子

イエスは、凄惨な叫び声をあげて、息絶えました。その時、「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け」ました。神殿の奥で起きたことを、目撃した者はいないでしょう。この記述は、イエスの十字架の死の意味を語っています。それは、人々を抑圧してきた神殿体制への裁きです。そして、垂れ幕が裂けたことによって、至聖所という神が臨在する場所に、すべての人が自由に直接に近づくことができるという救済が語られているのです。

イエスが息を引き取った時、一人の百人隊長が、「本当に、この人は神の子だった」と言いました。彼は、はっきりとは分からなくても、イエスの死に何か新しいことが始まった気配を感じたのでしょう。「神の子」という称号は、異邦人の百人隊長にとっては、「ローマの平和」をもたらす皇帝に使われる称号でした。しかし、彼は真の平和はこの方にあると感じ、そして、思わず「この人は神の子」という告白となったのです。

マルコ福音書における中心テーマは、1：1 に「神の子イエス・キリストの福音の初め」とある通り、「神の子」イエスです。マルコ福音書は、まさに十字架に架けられ、凄惨に死んでいったイエスにこそ「神の子」、そして、神の真の姿を見るのです。

十字架のイエスに従う

イエスの十字架の周辺にいた人々にも注目したいと思います。シモンは、通りがかりに

イエスの十字架を無理に担がされました。彼にとっては、災難でした。しかし、この体験は彼の人生を変えました。彼の息子たち、「アレクサンドロとルフォス」は、マルコの教会のメンバーとして、キリスト者になったようです。「婦人たち」は、イエスの十字架を遠くから見ていただけです。しかし、彼女たちはエルサレムに留まり続け、葬りを見守り（15：47）、そして、イエスの墓に向かいました（16:1 ～ 2）。その彼女たちこそが、イエスの復活の最初の目撃者となったのです。

シモンも「婦人たち」も、それぞれ思いは異なりますが、十字架のイエスに静かに従った人々です。「十字架を背負って、わたしに従いなさい」（8：34）この言葉に、真の命に生きる希望があります。

準備のための聖書日課			
4日	㊊	主が即位させる王	詩編2:1～6
5日	㊋	王の王、主の主	テモテ一6:11～16
6日	㊌	十字架の死に至るまで従順に	フィリピ2:6～11
7日	㊍	自分の十字架を背負って	マルコ8:31～38
8日	㊎	なぜわたしをお見捨てになるのか	詩編22:1～19
9日	㊏	神の子イエス	マルコ1:1

成人科

●「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた」。「裂けた」という言葉を巡って黙想しましょう。垂れ幕が裂けたことは、隔ての壁が壊され、排除され隅に押しやられた者たちが自由を得たことのしるしです。イエスによる救いは、私たちを縛（しば）り、抑圧する外部のものから解放します。しかし、それはまた自分自身が「裂かれる」ことでもあります。私たちの内にある欲望や傲慢（ごうまん）、また不信や諦（あきら）めの心が裂かれるのです。あの百人隊長による、イエスへの神の子告白も、彼の心が裂かれたゆえの言葉でありましょう。

●「Nachfolge（ナッハフォルゲ）」。教会でもよく耳にするドイツ語です。「後ろに従う」という意味です。それは他ならずイエスの後ろに従うのです。それゆえ、「信従」とも訳されますが、そうできない現実の難しさ、弱さをも覚えます。でも、堂々と確信をもって後ろについて行くことできなくても良いのです。シモンは、強いられて十字架を負わされました。女性たちは、遠くから見守っただけです。彼らの姿を想いつつ、では私はイエスにどう従うのか？ 考えてみましょう。

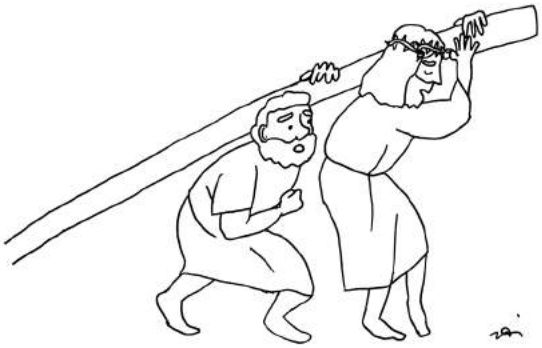
あらわになった神

聖書 マルコによる福音書15章21～41節

暗唱聖句 イエスがこのように息を引き取られたのを見て、
「本当に、この人は神の子だった」と言った。マルコ 15：39

2課

4月10日



ヨロヨロ、ズサッ。処刑場までの坂道、十字架を担がされ、ヨロヨロ歩くイエスさま。一晩中取り調べを受け、殴られ、鞭打たれたのです。いつもより遅い死刑囚の行進にイラつく兵士たちの目にとまったのはキレネ人シモン。「おいお前！ 十字架を担げ！」。ローマ軍に口答えは許されない。黙って十字架を担ぐシモンの目に、前をノロノロ歩くイエスさまが映ります。「何で関係ない俺が」。シモンはイライラして目を伏せましたが、なぜかまた見てしまう。

処刑場に到着すると、イエスさまは両手両足を釘で打ち抜かれ、十字架にかけられました。十字架には「ユダヤ人の王」と書いた札。その真下、兵士たちは「王様、ご褒美を賜り感謝です」と笑い、イエスさまの着ていた服をくじで分け合う。

近くから遠くから、どす黒い言葉が響きます。「おやおや、どうしたことかねぇ」「神殿を壊し、三日で立て直すとほざくなら自分を立て直してみろ！」「他人は救ったのに自分は救えない」「十字架から降りてみろ。そしたらメシアと信じるぜ」。十字架から降りることができず、苦しみから抜け出せないイエスさま。

罵る群衆の中、一人黙って見つめているのはキレネ人シモン。立ち去れず、目をそらせずにいます。十字架の上で何もできずに苦しむイエスさまに、なぜだか重なる友の顔。家族の顔。そして自分の顔。

太陽が照りつける昼 12 時、突然、全地は暗闇に覆われました。暗闇が続く 3 時、イエスさまは大きな声で叫びます。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ！ 神よ！ わが神よ！ どうして私を見捨てになったのか！」。その様子は、遠くで見つめるしかない女性たちの心を串刺しにします。女性たちは泣きながら呟きました。「神さま、なんで見捨てたの！」。イエスさまは何事か叫ぶと、首をガクッと垂れました。その時、神殿の奥の幕が真っ二つに裂けたことなど、女性たちは知るよしもない。

朝からイエスさまの一番近くに立ち続けた百人隊長は、イエスさまが死んだことが分かりました。後は次の段取りに取りかかるだけ。しかし百人隊長は一歩も動けず、絶叫して死んだイエスさまを見つめます。何万と見てきた戦場、奪われ尽くされる者、強大な力になすすべなく捻り潰される人の顔、「なぜだ！ 見捨てないでくれ！」くさるほど聞いた哀れな叫び。イエスさまの死を見続けた百人隊長の唇から、一つの言葉がほとばしり出る。「本当に、この人は神の子だった」。

あらわになった神

聖書 マルコによる福音書15章21～41節

暗唱聖句 イエスがこのように息を引き取られたのを見て、
「本当に、この人は神の子だった」と言った。マルコ 15：39

聖書から…

キレネ人シモンは無理やり十字架を背負わされ、強制労働をさせられます。このような目にあっているシモンを助ける人は誰もいません。むしろ、「自分」でなくて、良かったと思った人の方が多かったかもしれません。

十字架の重荷を人々は他人事と捉えています。この当時は誰もが他人事としか思えなかった十字架が、この世界においてすべての人の「救い」という決定的な出来事となっていきます。イエスさまは十字架につけられ、身体的な痛みは極地に達しています。それに追い打ちをかけるようにある人々はイエスさまを罵り、侮辱します。痛んでいる人間に対して、更に痛みを負わせることが行われています。「他人は救ったのに、自分は救えない」という言葉は罵りの言葉として発せられたものですが、だからこそイエスさまは人間として生きられたと言うことができます。

人間は誰も自分を救うことはできません。故に、他者と共に生き、お互いに助け合い、支え合うことが必要です。イエスさまの十字架での死は悲惨そのものです。イエスさまは十字架の死を迎えるまで人として生きられたからこそ、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と言われたのです。イエスさまは人間として苦しみながら死なれました。だからこそ、私たちが抱える痛みや弱さを知っておられるのです。

この悲惨な出来事を目の当たりにして何故かローマの百人隊長は「まことに、この人は神の子だった」と述べ、イエスが、人間かつ、神の子であったということに気が付きます。百人隊長にとって神さまの姿は、神々しいものであったのかもしれません。しかし、人間が想定しない思いがけないかたちで本当の神さまの姿があらわになったのです。

分かち合おう

- 強制的に十字架を背負わされたシモンに対して人々は無関心です。現代においても強制労働をさせられている人々が多くいます。私たちが使っている衣服や物品は強制労働によって成り立っているかもしれません。私たちはそんな現実に無関心でよいのでしょうか。考えてみましょう。

- イエスさまの十字架の出来事は悲惨です。しかし、「救い」や「私たちのため」という言葉を使い、時にその「悲惨さ」に目を留めることを忘れてしまってはいないでしょうか。悲惨さから目を背け「死」を美化する時に、「死」が価値付されてしまいます。本当に、イエスさまは悲惨な目に遭わなければならなかったのでしょうか。そのことを皆さんはどう考えますか？

幼小科

あらわになった神

聖書　マルコによる福音書15章21〜41節

暗唱聖句　イエスがこのように息を引き取られたのを見て、
「本当に、この人は神の子だった」と言った。マルコ 15：39

2課

4月10日

聖書から…

たくさんの人たちの中に、十字架で死んでいくイエスさまを見ながら、「この人は神の子だ」と気づいた人がいました。すごい奇跡を見たからではなく、すばらしいメッセージを聞いたからでもなく、いっしょにご飯を食べて交わったからでもなく、苦しみながら死んでいくイエスさまが「神の子」だと、どうしてわかったのでしょうか。不思議なことですが。

それは 2000 年も後に生まれ、ずっと遠く離れた国に暮らす私たちが、建物の屋根に十字架を掲げて教会に集うことにも関係がありそうですね。

受難週に入りました。イエスさまが十字架にかかった時のおはなしは、何度聞いても重たくて、悲しい気持ちになりますね。それでも私たちは、このおはなしを繰り返し繰り返し聞くことを大切にしているのです。そこからしかイースターの喜びが始まらないからです。イエスさまの十字架を見上げて、イエスさまの死と命が、自分とどうつながっているのかに気が付くように私たちは導かれています。静かに十字架を見上げていると、そこからイエスさまの声が聞こえてきませんか？ イエスさまは苦しみの中で、神さまの大きな愛を教えてくださっています。

活動①

「ミッション：十字架を探せ！」

①画用紙などを切ってカードを 13 枚作ります。片面には十字架を描き、もう片面には「本当にこの人は神の子だった」を一文字ずつ書き入れます。

②そのカードをあちこちに隠しておきます。

③指令「13 枚の十字架カードを探して、そこに記されている暗号を解け」を伝えます。

④みんなで手分けして探します。13 枚すべて見つけたら、みんなで集まって暗号を解きましょう。解けたら、みんなで一緒に声を出して読み上げましょう。（メンバーが小さい場合は、並べる順番をあらかじめ記してあげてもよいでしょう）。

活動②　ワークシート

「ミニ絵本：あらわになった神」

●準備●ワークシートをコピーしたもの人数分、鉛筆、色鉛筆、ハサミ

①外枠線に沿って切り、折線で折って、写真のようにミニ絵本を作ります。

②まず一度読んでみましょう。

③ワークシート④にマルコ 15：39 の言葉を書き入れましょう。

④色を塗りましょう

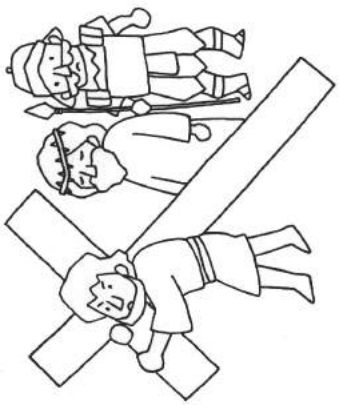
⑤できあがったものをもう一度読みましょう。

⑥「あらわになった神」の絵本を読んで、どんなことを感じたでしょうか？ クラスで分かち合ってみましょう。

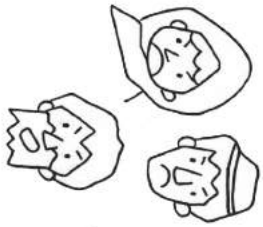
ワークシート

ミニ絵本：あらわになった神

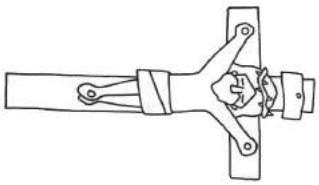
①一晩中とりしらべをうけ、なぐられ、
むちでうたれたイエスさまのかわりに、
キレネ人シモンは十字架を
かつがされました。



②たくさんの人たちは、きたない
言葉でイエスさまをののしりました。



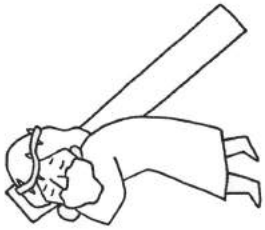
③イエスさまは十字架にかけられました。
「神よ、わが神よ、どうして私を
お見捨てになったのか！」
と、大声で叫ばれました。そして、もう
一度さけんで、息をひきとられました。



④朝からずっとイエスさまを見ていた
百人隊長は言いました。

（マルコ15：39の言葉を
かきいれましょう）

あらわになった神



ヤマオリ
タニオリ

聖書の学び

約束のことば

聖書 マルコによる福音書16章1〜8節

暗唱聖句 あの方は復活なさって、ここにはおられない。
マルコ 16：6

3課

4月17日

大きな石は転がされていた

イエスが十字架で死なれた三日後、「マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメ」の３人の女性たちは、イエスの遺体に油を塗るために墓に向かいました。この女性たちは、イエスの死、埋葬、そして、復活の証人となります。聖書で最も古い復活伝承は、コリントー 15 章３〜８におけるキリスト顕現の言葉です。そこには、「ケファ…十二人…ヤコブ」と男性たちの名ばかりが挙げられます。しかし、マルコ福音書は女性たちの名を記します。それは、社会で蔑まれている周縁の者たちこそが神の恵みに先ず与るのだという福音を示しているのです。

墓に向かう彼女らには、大きな問題がありました。それは、墓をふさぐ石です。しかし、彼女らが到着した時には、すでに石は転がしてあったのです。マタイ福音書では、彼女らが着いた後に、地震が起こり、石が転がるという、驚くような出来事が起きます。しかし、マルコ福音書では超自然現象は起きません。けれども、静かに神の出来事は進行していきます。

よみがえらされた

彼女たちは墓の中に入り、イエスを捜します。しかし、墓の中にはイエスでなく、「白い長い衣を着た若者」がいました。天使でしょうか。その若者は言います。「あの方は復活なさって、ここにはおられない」。

イエスは、人々の妬み、裏切りによって十字架に付けられ、惨たらしく死なれました。しかし、そのイエスは、「復活なさった」…神によって「よみがえらされた」（受動態）のです。マルコ福音書は、イエスの復活の意味を直接語っていません。けれども、「（人によって）十字架につけられた（者）が、（神によって）復活なさった（よみがえらされた）」という言葉に、復活のメッセージを聞くことができるのではないでしょうか。それは、人間の妬みや裏切り、そのような悪が、決してこの世界で最後のものとはならない！ イエスがその生において貫かれた愛こそが勝利する！ そのことを神が証明されたのです。

再起の励まし

彼女たちには、使命が与えられました。それは、「弟子たちとペトロ」にイエスの復活を伝えることでした。「ペトロ」の名が出てきます。これは、ペトロの優越性を語っているのではありません。ここにペトロの名があるのは、彼がイエスを三度も否認したこと（14：66 〜 72）と関連していると思われます。そのような弱く、躓いてしまう者を、イエスは赦し、再び歩み出すことへと励ましてくださるのです。

この使命を伝えた「若者」は、イエスが逮捕された時に逃げた「一人の若者」（14：51 〜 52）と何か関係があるのでしょうか。もし同一人物だとしたら、イエスを見捨てて裸で逃げたあの若者が、ここで復活を伝える者として用いられたのです。そして、その彼がまた、ペトロの再起を願うのです。

若者は伝えます。「あの方は、あなたがたよりも先にガリラヤへ行かれる。…そこでお目にかかれる」と。ガリラヤは、イエスと弟子たちが出会い、宣教が始まった場所です。イエスが、抑圧され、差別されている者たちと一緒に生きられた場所です。今、私たちが向かうべき「ガリラヤ」とは、どこなのでしょう？ 決意をもって行くべき遠い場所なのでしょうか？ あるいは、私たちが労苦している日常の場所なのでしょうか？

準備のための聖書日課			
11日	㊊	イエスの葬り	マルコ15:42～47
12日	㊋	十字架のイエスを神は主とされた	使徒言行録 2:22～36
13日	㊌	死に渡された救い主	ペトロ一3:18
14日	㊍	十字架のキリストを示されて	ガラテヤ3:1～14
15日	㊎	十字架の言葉は神の力	コリント一1:18～21
16日	㊏	十字架につけられたキリストを宣べ伝える	コリント一1:22～25

イエスの約束

女性たちは、若者からイエスの復活を聞いた時、震え、恐れるばかりでした。マルコ福音書には、他の福音書にあるような喜びの描写がありません。そして、復活のイエスの顕現についても、何も書いていません。ただ、イエスの約束…ガリラヤで会うことができるという約束…だけがあるのです。女性たちの恐れの沈黙（ちんもく）、そして、それにもかかわらず確かに為されたイエスの約束を受けて、ただ「読者だけが、（この福音書の）終わりをもたらすことができる」（L・ウィリアムソン『現代聖書注解』日本キリスト教出版局）のです。

成人科

● イエスの復活とは何か？ 私にとってどんな意味があるのでしょうか？ その答え方はいろいろとあると思いますが、復活は、終わりと思っていたことが、実は終わりではない！ という希望を告げているのではないでしょうか。裏切られて惨（みじ）めに死ぬことが終わりではない、閉じられた暗い墓に葬られることが終わりではない、その先には…。そこには、何があるのでしょう？

● マルコ福音書は、女性たちの恐れと沈黙で終わっています。しかし、この「恐れと沈黙」だけであったら、キリスト教の福音は世界に広がっていなかったことでしょう。この恐れと沈黙は、「さあ行って、告げなさい！」（16：7）という宣教の使命への跳躍台（ちょうやくだい）に他なりません。逆に言えば、恐れと沈黙がなければ、真の宣教は進まないのです。恐れるべきものを恐れ、沈黙する時に沈黙する。…恐れるべきもの、沈黙する時、それは、私たちにとって、何であり、どんな時でしょう？

約束のことば

聖書 マルコによる福音書16章1〜8節

暗唱聖句 あの方は復活なさって、ここにはおられない。
マルコ 16：6

3課

4月17日

土曜日の夕暮れ、マグダラのマリア、ヤコブの母のマリア、サロメの三人は待ち合わせの場所でおちあいました。安息日が終わったら市場で香料を買おうと決めていたのです。三人の耳には、十字架にはりつけにされたイエスさまの叫び声がへばりついています。「神よ！ わが神よ！ どうして私を見捨てになったのか！」。

誰からとなく言い出します。「せめて、イエスさまのご遺体に香料を塗ってさしあげたい」。何でもいいからしてあげたい。イエスさまの最後の言葉があまりにつらい。市場へ向かって歩く時、どの香料にするか話し合う時、お金を払う時、最後の言葉が耳にへばりついたままでした。

三人はイエスさまのお墓へ無言で歩き続けます。誰からとなく言い出しました。「お墓をふさぐあの大きな石、どうしよう」「誰に転がしてもらうかな」。段取りを相談しようというのではありません。無言がつらい。イエスさまの最後の言葉が繰り返し聞こえてくるから。足元に目を落としながら歩き続けます。

もう間もなくイエスさまの墓。ふと目を上げる。石が脇に転がしてある！ あの葬り完了を宣言した大きな石が！「一体、誰が？」なんて言葉すら出てきません。終わりが終わりでなくなることの恐ろしさ！

三人は無言のまま、同じものを探し始めていました。もう一つの最後の宣言。口が開けられてしまった墓の中へ歩み入ります。

彼女たちが目にしたのは、確かめたかったご遺体がないこと。いるはずのない若者がいること。腰を抜かす三人に、白い衣を着た若者が語りかけます。「恐れるのはよせよ。人間が十字架につけたイエスさまを捜しているんだろ？ でもね、イエスさまは神さまによって甦（よみがえ）らされたよ。ご覧の通りさ。さあ立って、行くんだ、弟子たちの元、ペトロの元へ。君たちが伝えるのさ、イエスさまの約束を。〝わたしは復活して、君たちより先にガリラヤへ行く。そこで待ってる〟。約束の通りなのさ」。

女の人たちは、ぱっくり口を開かれてしまった墓から飛び出します。逃げなきゃ、逃げたい、一歩でも遠くへ。墓が墓でなくなったなんて！ 誰にも何も言わない、絶対に。最後のものがなくなってるなんて！

彼女たちは気づいていません。イエスさまの約束が耳に残っていること。約束の言葉を心に種蒔いてもらってること。気づくでしょうか。約束をその手にちゃんと受け取っていること。気づかせてもらえるのはいつでしょう。神の約束が最後のものであること。

約束のことば

聖書 マルコによる福音書16章1〜8節

暗唱聖句 あの方は復活なさって、ここにはおられない。
マルコ 16：6

聖書から…

マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメの３人の女性たちはイエスさまの亡骸（なきがら）を整えるために香料を持って墓に向かいます。彼女たちは「墓の入り口を塞いでいる大きな石」をどうやってどけたらよいだろうかと心配しています。「墓」や「石」は人間の力ではどうすることもできない「死」を象徴しています。人間は「死」を自力で乗り越えることはできません。故に、人間は「死」を恐れます。しかし、イエスさまの十字架を知る時に「死」の「恐怖」は、「復活」の「希望」へ変えられていきます。

石がどかされた墓の中に女性たちが入っていくと、イエスさまの亡骸はなく、白い長い衣を着た若者から「あの方は復活された」と聞かされます。死にとらわれている者にとっては、墓は空虚（くうきょ）なものでしかありませんが、復活を証しする者の言葉が語られる時、空虚な墓は、復活の希望を知る場所となります。

若者は女性たちにイエスさまが「復活」されたとペトロに告げるように言いますが、彼女たちは墓から逃げ去り、震え上がり、復活を告げることができません。若者は復活を女性たちに「語ります」が、女性たちは復活について「何も言いません」。両者の対極的な姿から、復活は語られるべき希望であると同時に、たとえ、人間が黙しても、イエスさまの復活の出来事は決して終わらず、続いていくことであると思わされます。

マルコによる福音書は復活後のイエスさまの姿は何も記しませんが、復活はあったのです。イエスさまは弟子に先立って「ガリラヤ」に行かれます。そこにはイエスさまが出会うべき人たちがいたからです。復活の主は、今も人間と共に生きておられ、私たちに希望を与え続けているのです。

分かち合おう

- イエスさまが十字架にかかられる時に、男性の弟子たちは逃げていきました。今日の箇所ではイエスさまの復活を聞いた女性の弟子たちもまた墓から逃げていきました。性別に関係なく、人間は誰もが失敗をします。イエスさまはそのような弟子たちをも用いられます。私たちは自分の弱さを分かち合うことができているでしょうか。自分の力、強さにより頼むのでなく、自分の弱さを認め、主により頼もうとしているでしょうか。

- マルコによる福音書は復活後のイエスさまの姿を記しませんが、それは復活の主がいなくなったわけではなく、「ガリラヤ」に行かれると記されている通り、再び「出会える」という約束があります。復活の主はどこに先立たれておられると思いますか？

幼小科

約束のことば

聖書　マルコによる福音書16章1～8節

暗唱聖句　あの方は復活なさって、ここにはおられない。
マルコ 16：6

3課

4月17日

聖書から…

もうおしまいだ。どうにもならない…。そんな風に思ったことがありますか？ ここに出てくる３人の女の人たちも、そんな絶望を胸に抱えていました。救い主、神の子だって信じて従ってきたイエスさまが、十字架でむごたらしく殺されてしまったんですから。心に大きな石がのっかっているような感じで、のどにも何かつっかえているような感じで、体も重たくなっています。でもそんな３人の心には、イエスさまの約束のことばが残っていました。花の種が蒔かれた時のように、動くこともなくじっとしていましたが、そこにはいのちがありました。まだ芽が出ていないかもしれないけれど、まだ花が咲くまでには時間がかかるかもしれないけれど、おしまいじゃなかったのです、イエスさまは復活なさった！

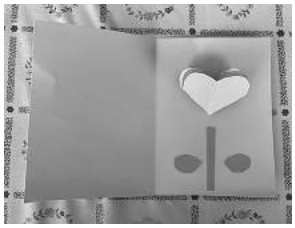
３人はその事実を目の当たりにして、心にあった大きな石が転がされるのを感じたのではないでしょうか。そのことを事実として受け取るにはもう少し時間が必要でした。復活の出来事は、私たちの想像をはるかに超える出来事ですから、恐ろしいけどうれしい日になりますように。

活動①　ワークシート

「ハートの花」

●準備●花になる 10 センチ角の色画用紙、台紙にする色画用紙、折り紙、サインペンやクレヨンなど、のり、ハサミ

カードを作って、大切な人に送りましょう。なかなか会うことができなくて寂しい思いをしている人はいませんか？ 最近悲しいことがあった人はいませんか？ 心を込めてカードを送りましょう。作り方は「開くハート」「カード」で検索できます。



活動②　ワークシート

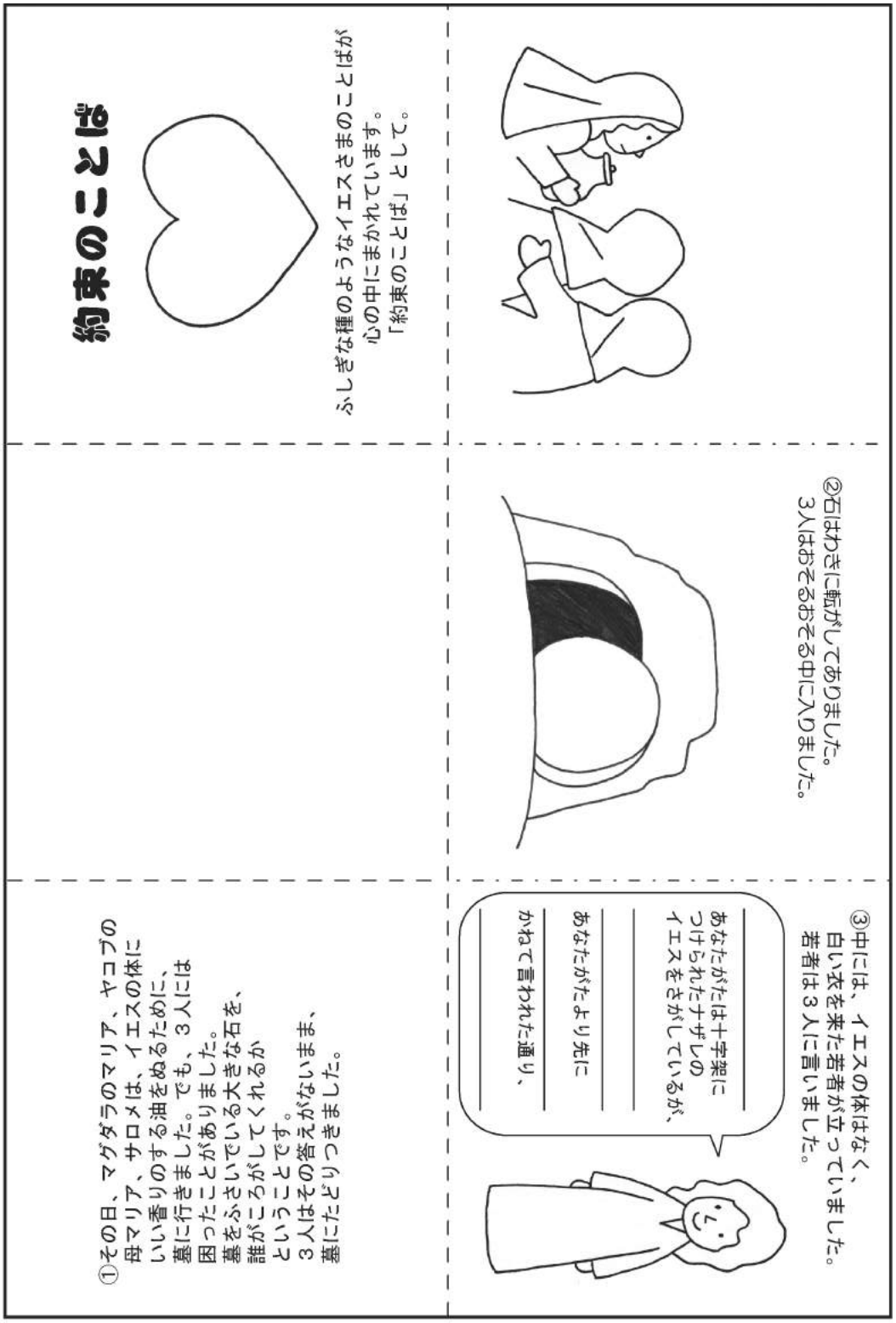
「ミニ絵本：約束のことば」

●準備●ワークシートをコピーしたもの人数分、鉛筆、色鉛筆、ハサミ

①外枠線にそって切り、折線で折ってミニ絵本を作ります。
②まず一度読んでみましょう。
③ワークシート④にマルコ 16：6 ～ 7 の言葉を参考にして言葉を書き入れましょう。
④色を塗りましょう
⑤できあがったものをもう一度読みます。
⑥「約束のことば」の絵本を読んで、どんなことを感じたでしょうか？クラスで分かち合ってみましょう。

ワークシート

ミニ絵本：約束のことば



ヤマオリ
タニオリ

聖書の学び

アテネでのパウロ

聖書　使徒言行録17章16〜34節

暗唱聖句　神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。
使徒 17：27

4課

4月24日

連れて行かれ、立つパウロ

アテネの町は、ローマ帝国下においても文化哲学の重要都市でした。アテネに到着したパウロは憤(いきどお)ります。なぜなら、神々の偶像が溢(あふ)れていたからです。パウロは、ユダヤ人や「神をあがめる人々」と呼ばれる異邦人たち、また、哲学者たちとも議論をしました。しかし、この議論は哲学的な議論ではなく、「イエスと復活について福音を告げ知らせる」ものでした。

アテネの人々は、詳しい話を聞こうと、パウロをアレオパゴス（評議所）に連れて行きました。19 節の「連れて行く」、22 節の「立つ」は、裁判の意味合いのある言葉だそうです。また、18 節では、パウロは、「外国の神々の宣伝をする者」と呼ばれています。「外国の神々（ダイモニオン）」は、告訴、処刑されたソクラテスのことを思い出させる言葉だそうです。パウロは、好奇心旺盛なアテネの人々に、ただ最新の教えを紹介したのではなく、そこでは、拒絶され、死の危険もあったことが含意(がんい)されています。

相手に合わせつつも

パウロは演説を始めます。いきなり福音の核心を語るのではなく、アテネの人々の哲学的素養や宗教心に訴えるかたちで話し始めます。「あなたがたは信仰のあつい方である」と。

パウロは、町に「知られざる神に」と刻まれている祭壇があることに触れます。名前が分からない神々の罰を免れるために作られたのでしょう。そこには、多神教の信仰があります。しかし、パウロは、ここで「知られざる神」と単数に言い直し、それによって、聖書における唯一の神の証しへと繋げていくのです。

パウロは、アテネの人々が「知らずに拝んでいる」のは、「世界とその中の万物を造られた神」であると言います。これは、旧約聖書で証しされる創造主である神に他なりません。そして、この神は、「人の手によって仕えてもらう必要はない」と言います。祭儀批判です。祭儀は、人間が神の渇望(かつぼう)を満たすことです。しかし、ことは逆です。すべてに満ちた神が、人間に恵みを与え、喜びを満たしてくださるのです。神こそ、「すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくだ」さっているのです。私たちの礼拝は祭儀ではなく、神の恵みへの感謝の応答です。

28 節では、ギリシアの詩人の「我らは神の中に生き、動き、存在する。我らもその子孫である」という言葉が引用され、神と人間の近さが語られます。これは、汎神論(はんしんろん)や神人同一(しんじんどういつ)ではありません。パウロが、「神の子孫」という言葉を使うのは、創造の時、神が「御自分にかたどって人を創造され」（創世記 1：27）、塵(ちり)でできた人の「鼻に命の息を吹きいれ」（創世記 2：7）てくださったことが覚えられているのです。この恵みによる近さのゆえに、人間が作った偶像は必要ないのです。

知恵の言葉を越えた復活の証言

パウロは、長い前置きの後、福音の核心を語ります。この演説全体からすると、とても

短い言葉です。神は、「先にお選びになった一人の方（＝イエス・キリスト）」によって、「この世を正しく裁かれる」ということです。その「確証」が、イエス・キリストの復活です。裁きの日は迫っている。今こそ悔い改めて、真の神に立ち返らなければならない、とパウロは呼びかけます。

「死者の復活」ということに、アテネの人々は関心持たず、あざ笑いました。人間の身体性には積極的な意味を認めていなかったからです。

パウロは、立ち去ります。拒絶された空しさを感じます。しかし、パウロのアテネ伝道は、全くの失敗だったのではありません。「彼について行って信仰に入った者も、何人かいた」のです。相手の素養や宗教心に対し、知恵をもって訴え、伝えることは、無意味ではありません。しかし、パウロがアテネで語った言葉は、人の知恵の言葉なのではなく、やはり聖書に基づいた福音の宣教に他ならなかったのです。

準備のための聖書日課			
18日	㊊	最も大切なこと	コリントー15:3〜8
19日	㊋	異邦人のための使徒	ローマ1:1〜6
20日	㊌	テサロニケでのパウロ	使徒言行録17:1〜9
21日	㊍	ベレアでのパウロ	使徒言行録17:10〜15
22日	㊎	まことの礼拝	ヨハネ4:22〜23
23日	㊏	キリストが復活しなかったのなら	コリントー15:12〜19

成人科

● アテネでのパウロは、町の人々に福音を伝えようと、彼らの既得（きとく）の信仰や宗教性に訴えかけます。コリントー9：19〜23、「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のように…。律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。何とかして何人かでも救うためです」というパウロの気構えを感じます。私たちは、この日本という宗教性や神概念が異なる地で宣教をするために、どのような努力をしているでしょうか？ 日本教（神道・仏教・自然崇拝・天皇制…）に呑まれず毅然（きぜん）としつつも、どんな工夫ができるでしょう？

● アテネの人々が死者の復活を拒否したのは、それが非合理であったからではありません。エピクロス派にしてもストア派（17：18）にしても、人間の身体を消極的に見なしていたからです。聖書は、人間の身体は神の創造であり、恵みの賜物です。病や老い、痛みや弱さを抱える私たちの身体ですが、恵みの賜物として受けとめ、喜んでいるでしょうか？ また、その復活をどのように期待し、待っているでしょうか？

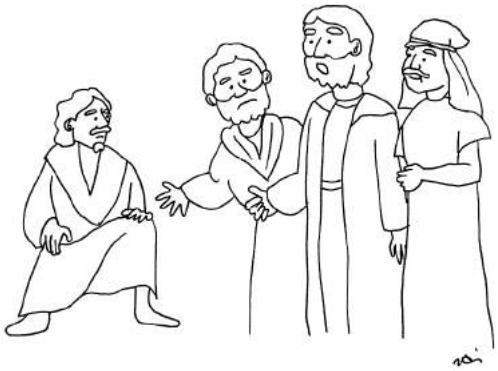
アテネでのパウロ

聖書 使徒言行録17章16〜34節

暗唱聖句 神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。
使徒 17：27

4課

4月24日



ここはアテネ。アチラコチラに金や石や木で造ったカミサマの像と祭壇が並びます。その前にはお供(そな)えをするのに大忙しの人たち。他人のことより自分の心配、神の願いより私の願い、小さくなるなんてまっぴらごめん、もっと大きくもっと強く！ 見ていたパウロの体は、怒りに震えます。私たちを愛し、自分は小さく、十字架につけられるまでに小さくなったイエスさまを思うと、叫びたい気持ちです。

パウロは会堂に入っては聖書を語り、広場に立ってはイエスさまを伝えました。アテネの人たちは新しいことを聞くのが大好き。パウロの行く先々で人だかりができます。中には監視人もいました。「かき乱す奴は許さない」。彼らはパウロを疑いのある人間を審査する場へと連れて行きました。

良き知らせを伝えたい。まず心に橋を架けたい。パウロはそう考えて呼びかけます。「あなたがたは神を信じ、神を求める心をお持ちです」。天と地とそこに生きるすべてのものをお創りになった神さまは、すべてにおいて満ち溢(あふ)れ、恵みを人間に与えるお方。住むところや仕える人間を求めるなんて大間違い。何より伝えたいのは、人に命の息をフーっと吹き込んで「生きよ」と語る神の愛。十字架ですべての人を引き受け、ご自分を与え尽くし、復活の命に招いてくれたイエスさまのひたむきな想い。

パウロは深く息を吸い込み、みんなを見渡しながら語ります。「神さまは遠くにおられるのではなく、あなたの近くにおられます。イエスさまが十字架で、私たちの裁きを成し遂げてくださった。このイエスさまを神さまが復活させた。神は近くに！ イエスさまがあなたと共に！ だから本当の神に向き直ろう！」。

すると静かな議場に失笑が広がりました。「死んだ人間が復活？」「復活とやらは、また別の機会に教えてくれや」。議場をゾロゾロ出ていく人々の後ろ姿を、パウロはただ見つめるだけです。

宿に帰り、黙ってランプの灯りを見つめるパウロ。今、パウロを訪ねに向かって来る人がいるとは知りません。神はすべてを創られた主と信じた議員ディオニシモ。十字架につけられるまでに小さくなった救い主イエスを信じた女性ダマリス。そして復活したイエスさまが、一緒に生きてくださると信じた何人か。わずか数人が今、パウロを訪ねようとしています。

パウロはランプの灯りを見つめ続けています。言葉を失ったまま見つめる小さな灯りには、十字架につけられているイエスさまの姿以外、何も映っておりません。

アテネでのパウロ

聖書 使徒言行録17章16〜34節

暗唱聖句 神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。
使徒 17：27

聖書から…

アテネでは偶像礼拝が行なわれていました。パウロはこの状況をみて「憤りを覚えて」います。現実に起こっている搾取（さくしゅ）や貧困、戦争、差別などに憤りを覚え、状況を変えていきたいと思うことは、福音を生きるということに繋がると私は思います。なぜなら、聖書の伝える神さまは貧しいものの味方であり、和解をもたらす方であり、公平を重んじられるお方だからです。

人間は、偶像を作り始めると、この神にはあれが足りない、これが足りないと考え、とめどなく、様々なものを付け足そうとします。偶像は人間の欲望の象徴なのです。パウロは偶像でなく、何一つ不足することのない主なる神を信じるようにアテネの人々に対話を通して勧めています。気をつけたいことは、パウロは決してアテネの文化や学問などに敵対しながら、福音宣教をしたわけではないということです。彼は、敵対的な言葉でなく、聖書に一貫して示されているすべての創り主である神さまを語ったのです。

敵対的な言葉では、福音の本質は伝わりません。パウロは福音を語った後、あっさりとアテネから去っていますが、これは宣教に失敗し、途方にくれて去ったということではなく、後のことを主に委ねているのです。人間が神さまを信じるようになるということは、人の業でなく、神さまの業です。パウロの言葉を通して、働かれた神さまにより、アテネでも神さまを信じる人が生まれました。多くはなかったかもしれません。しかし、そこには着実に福音が伝わったのです。

分かち合おう

- 私たちが生きている現状の中において、憤りを覚えることがどのくらいあるでしょうか。憤るとするならば、何に憤っているでしょうか。もし、何事にも憤りを覚えていないなら、他者に対して無関心なのかもしれません。「神は私たち一人一人から遠くはなれてはおられません」とあるように、神さまがいつも私たちの傍（かたわ）らにいて、私たちを見つめてくださっています。神さまはいつも私たちと共にいてくだっている。では、私たちは一体誰と共に生きようとしているでしょうか。他者のいのちが蔑（ないがし）ろにされる事件や出来事に対して、私たちは憤りを覚えているでしょうか？ 今、憤りを覚えていることがあれば分かち合ってみましょう。

- パウロのアテネでの福音伝道はあまりよい結果ではなかったようです。しかし、数は少なくても信仰者が生まれたことを喜びたいと思います。私たちは結果にこだわり過ぎていないでしょうか？

幼小科

アテネでのパウロ

聖書 使徒言行録17章16〜34節

暗唱聖句 神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。
使徒 17：27

4課

4月24日

聖書から…

パウロは初めてやってきたアテネの町で、初めて出会う人たちに向かって、心を開いて自分の信じる福音を語りました。全世界を創造し、支配しておられる神さまのことや、イエスさまが私たちの身代わりに十字架にかかり、そして復活してくださったことを一生懸命話しました。でも全然理解してもらえず、馬鹿にされてしまいました。パウロはがっかりして落ち込んでいます。「自分の力不足だったかもしれない」。「そもそもこの計画が間違っていたんだろうか」。でもね、たくさんの聴衆の中には、パウロの話を一生懸命聞いて心を動かされた人もいたのです。そして、「もっとイエスさまの話を聞きたい。自分の話も聞いていっしょに祈ってほしい」と思う人もいました。パウロがその人たちと出会う日はすぐそこまで近づいています。「パウロ、勇気を出して！」聖霊のささやきがパウロを優しく包んでいます。頑張ったことがうまくいかなかった時にも、思わぬところで、よい結果が起こっているのかもしれませんね。私たちにもそんな経験があるのではないでしょうか？

活動①　ワークシート

「心を開いて話してみたいこと」

心を開いて誰かに話してみたいことがありますか？ 相談したいことや打ち明けたいこと、謝りたいことなどを考えて書き出してみましょう。最後に、書き出したことや、まだ書き出すことができなかったことのためにも、リーダーが祈りしましょう。心を開くことは強要されることではなく、自分のタイミングですることです。祈り合うことには、勇気を出してやってみようとする気持ちを応援する思いが詰まっていて、イエスさまもそこにいてくださいます。

活動②

「直撃！インタビュー」

外国から日本に来ている人が礼拝に集っていたら、インタビューしてみましょう。どんなことをきいてみたいでしょうか？みんなで相談して考えてみましょう。

活動③

「いろんな言葉で賛美しよう。主はすばらしい！」

いろんな国の言葉で神さまを賛美しましょう。

日本語「主はすばらしい（×３回）、わたしの主」（『新生讃美歌』54番 日本バプテスト連盟）

英語「God is so good(×３)、He is so good to me」

タイ語「プラチャオ（神さま）センディー（すばらしい／×３回）ソン センディーチャン」

韓国語「チョーウシン ハーナニム（×２回）チャーム チョーウシン ナーエー ハーナーニーム」

ルワンダ語「イマーナ ニンジーザ（×３回）ニンジーザ チャーネ」

ワークシート

心を開いて話してみたいこと

心を開いて話してみたいこと

だれに？

_____

なにを？

_____

_____

_____

ハートドキドキ度はいくつ？（色をぬってネ）

聖書の学び

恐れるな、語り続けよ

聖書　使徒言行録18章1〜11節

暗唱聖句　わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ。
使徒 18：10

5課

5月1日

天幕づくりのパウロ

パウロは、アテネからコリントに向かいました。この時パウロはアテネでの伝道が上手く行かず、意気消沈し体調も悪かったようです（コリントー2：3）。そのような状態で、コリント伝道は始まりました。

コリントの町は、交通の要所、大商業都市として繁栄していましたが、その裏では貧富の差が生まれ、倫理的頽廃も見られたようです。パウロはその町で、アキラとプリスキラというユダヤ人夫妻に出会います。彼らは、ローマからのユダヤ人追放によって、コリントに移住して来たキリスト者であったとも思われます。この時、ローマにも教会があったのです。

パウロは二人の家に住み、一緒に生活を始めました。「職業が同じであった」からです。「テント造り」、天幕作りです。天幕は、山羊の毛の布や皮で作られていました。当時、見下げられていた仕事であった皮革業です。パウロは彼らと生活しながら、安息日にはユダヤの会堂で教えました。パウロの伝道は、ユダヤの会堂を拠点にしながら為されましたが、コリントでも同じでした。

そんな中、パウロの同労者であるシラスとテモテがやって来ました。彼らは献金を持参し、仕事も手伝ったので、パウロは困窮生活から少し解放され、「御言葉を語ることに専念」できるようになりました。しかしこの後、パウロが天幕作りをしなくなったということではなく、「自分の手で稼ぐ」（コリントー4：12）ことを大事にしたようです。この「専念」とは、仕事を辞めることではなく、「メシアはイエスであると力強く証し」することに他なりません。

「異邦人の方へ行く」とは?

パウロの宣教に対し、ユダヤ人たちは反抗しました。パウロは「服の塵を振り払」い、ユダヤ人たちに厳しい裁きを語ります。そして、「わたしは異邦人の方へ行く」と、明確に自分の使命を宣言しました。パウロは、異邦人伝道のための器なのです。しかし、パウロはこの後、エフェソの町でも、再び「会堂に入って、三カ月間、神の国のことを大胆に論じ、人々を説得しようとした」（19：8）のです。彼は、ユダヤ人を見捨てたのではありません。

7節の「パウロはそこを去り、…ユストという人の家に移った」とは、アキラとプリスキラの家から引越をしたということではありません。宣教の場所をユダヤ教の会堂から、異邦人ユストの家に移したのです。「彼の家は会堂の隣にあった」ようです。パウロの強い覚悟を感じます。その伝道は、大きな実りをもたらしました。会堂長であるクリスポが、一家をあげてイエス・キリストを信じるようになったのです。パウロは、ユダヤ人に伝道しなくなったのではなく、むしろ、社会的に影響力の強いユダヤ人まで回心に導いたのです。

この町には私の民が大勢いる

ある夜、主イエスが幻の中でパウロに語りかけました。パウロは以前にも、幻によって

マケドニア伝道が示されたことがありました（16：9）。ここでも、天からの啓示によって、パウロの伝道が確かなものとされ、進められていくのです。

「恐れるな。語り続けよ。黙っているな」。この主イエスの言葉を、パウロは、いつ聞いたのでしょうか？ コリントの町で、信じる人々が多く与えられたという実りの後に聞いたのでしょうか？

この幻の夜を、時間を遡（さかのぼ）って「アテネを去ってコリントへ行った」、あの失望と憔悴（しょうすい）の時であったと読んでも良いかもしれません。アテネ伝道が上手く行かず、意気消沈しているパウロに、主イエスは現われ「あなたと共にいる」と励ましてくださったのではないでしょうか。そして、「この町には、わたしの民が大勢にいる」と。そうです。すでに主イエスが招き、選んでくださった人々がいて、必ずコリントでの伝道が実ることを約束してくださったのです。そして、その約束は実現したのです。

準備のための聖書日課			
25日	㊊	恐れと不安の中で	コリントー2:1〜5
26日	㊋	協力者と共に	ローマ16:3〜4
27日	㊌	キリストを証しするために	コリントー4:10〜13
28日	㊍	キリストに結ばれた生き方を思い起こす	コリントー4:14〜17
29日	㊎	異邦人の光	使徒言行録13:44〜47
30日	㊏	だから、恐れるな	マタイ10:26〜31

成人科

● 精神的にも肉体的も疲れ果ててコリントの町に着いたパウロには、アキラとプリスキラという支援者が与えられました。彼らの支援があったからこそ、パウロの生活は守られ、伝道も進展したのです。福音が伝わるのは、一人の人の力によるのではなく、互いの支援と協力によるのです。私たちが信仰の歩みにおいて体験した、そのような支援と協力の出来事を思い出し、感謝しつつ分かち合いましょう。

● R・F・ホックという学者は、「テント造り」（18：3）という職業が、パウロの身体、また、彼の信仰と伝道に強い影響を与えたことを語っています（『天幕づくりパウロ』、日本基督教団出版局）。その仕事の過酷（かこく）さのゆえに、パウロは目や手を不自由にした（ガラテヤ 6：11）のかも知れません。また、彼の「キリスト・イエスの僕（しもべ）（奴隷）」（ローマ 1：1）という神学的自己認識は、社会的に卑下（ひげ）される職業から生まれた実存的告白と思われます。そして、町に生きる底辺の人々とのネットワークが、伝道の進展に繋がっていったのです。弱さや低みが用いられていく不思議さがあります。

恐れるな、語り続けよ

聖書 使徒言行録18章1〜11節

暗唱聖句 わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ。
使徒 18：10

大きな針を手に、ヤギの皮を縫うアキラとプリスキラ夫妻。パウロは初めて二人に会った日のことを思い出していました。アテネでの伝道が思うようにいかずに疲れ果てて、コリントの船着き場で座り込むパウロに、声をかけたのがこの二人。同じユダヤ人で、仕事も同じテントづくり職人。夕食では二人がパンを裂き、主の祈りを祈ってくれました。イエスさまを救い主と信じる神の家族がここに！ 不安で震える心に温かい毛布をかけられた気がしました。その夜、パウロの夢でイエスさまが語りました。「恐れるな、黙っているな、語り続けよ。この町にはわたしの民が大勢いる」。

パウロは、二人の家に住みながら一緒に働きました。あきらめないでいい気持ちが雫（しずく）となってポトリポトリと心に溜まります。シラスとテモテもやって来た。パウロは毎日テントづくりに汗を流しては、会堂でイエスさまを伝えます。

会堂では激しく罵（ののし）られることが増えました。ユダヤの仲間が聖書の言葉をふりかざし言います。「十字架で殺された者は呪われた者と書いてある。お前は神に敵対している！ 会堂から出ていけ」。憤り、悲しみつつパウロも宣言。「私は異邦人のもとへ行く！ もはや君たちの救いに私は責任もてない」。家に帰っても仲間の顔が頭から離れず浮かない顔のパウロを、アキラとプリスキラが励ます。「それでもみんな神の家族なんだよね。黙らなかったんだからそれでいい」。

翌朝、パウロは思い切ってユストの家を訪ねました。「君の家を礼拝のために開放してくれないか」。ユストは神を信じる外国人。家は会堂の隣です。ユストはパウロに言いました。「誰かさんが言ったっけ？ もはや私は責任もてないってな」。アキラとプリスキラも笑います。「語り続けよ、お隣で！」。

それからは驚くことの連続です。ユストの家での礼拝に会堂長のクリスポが顔を出しはじめ、家族そろってバプテスマを受けました。いろんな国のいろんな生活をしている人たちが、互いの匂いを引っさげて礼拝に集い、神の家族が生まれ続けました。

パウロはテントを縫いながら口ずさみます。「恐れるな、語り続けよ」。針を持つ手にグッと力がこもります。パウロを見ながらアキラとプリスキラも思い起こしました。初めて会った日、自分たちも疲れ果てていたことを。同じように疲れ果てたパウロから主の約束をもらいました。「恐れるな、わたしがあなたと共にいる。この町には、わたしの民が大勢いる」。

恐れるな、語り続けよ

聖書 使徒言行録18章1〜11節

暗唱聖句 わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ。
使徒 18：10

聖書から…

アテネからコリントへ移動したパウロは複雑な気持ちを抱えていました。アテネでは思っていたような宣教ができなかったからです。そんなパウロに神さまはアキラとプリスキラというユダヤ人との「出会い」を与えています。

二人はローマ皇帝の横暴（おうぼう）によりローマから追い出され、傷ついていました。しかし、三人は神さまによって「出会わされる」ことで、互いに励まし合う関係になっていきました。共通の職業であったので、親近感があったのでしょうが、それ以上に互いにイエスさまを信じていたことが三人の励ましとなったのです。自分の思い通りにならず、目の前には困難しかないように思える時があります。しかし、神さまはそのような時に人との「出会い」、困難を乗り越える「励まし」を備えられておられるのです。

パウロはコリントで自分の信じている事柄をユダヤ人に冒涜（ぼうとく）されるという経験をしました。パウロはこれに対して「衣の塵を振り払い」という毅然（きぜん）とした態度を取っています。パウロは自分の信じているイエスさまの言葉を軽んじるユダヤ人に対して憤りを感じています。そして、パウロは「異邦人の方へいく」と語っていますが、これはユダヤ人を福音宣教の対象から外すということではなく、宣教の「視座」を広げるという宣言です。

この後、実際にみ言葉を軽んじず、信じるユダヤ人が与えられています。私たちが歩む道はすべてが順調なものではありません。時に躓（つまず）きがあります。しかし、それは「終わり」ではありません。パウロに「異邦人伝道」という新しい道を備えられたように、私たちにも新しい「出来事」が起こっていくのです。

分かち合おう

- 一つの失敗が人生の大きな「枷（かせ）」のように感じることがあります。失敗をしない人間はいません。失敗に留まり続けるのでなく、その経験から示されることが必ずあるはずです。そのような経験を分かち合ってみましょう。

- 傷ついた時は励ましを誰もが必要とします。しかし、励ましとは傷ついた人が、一方的にされることではなく、「ただ共にいる」ことから始まります。私たちは決して一人ではありません。イエスさまのもう一つの名前は「インマヌエル」といい、「神は我々と共におられる」という意味です。私たちの傍（かたわ）らには、いつも主なる神が共におられます。イエスさまがなされているように、私たちもまた誰かに共にいてもらったり、誰かと共にいたりすることが大切です。今、一体誰と共にいようとしているでしょうか。

幼小科

恐れるな、語り続けよ

聖書　使徒言行録18章1〜11節

暗唱聖句　わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ。
使徒 18：10

5課　5月1日

聖書から…

３回も伝道旅行をして福音を伝えたパウロも、たくさんの苦労や挫折を経験しました。でもパウロはひとりぼっちではありませんでした。「わたしがあなたと共にいる」と言ってくださるイエスさまと、イエスさまが与えてくださる仲間が一緒です。テント作りに手を動かしながら、一緒にいろんな話をしたことでしょう。一緒に祈り合ったことでしょう。落ち込んでいた心も身体も少しずつ元気になりました。

コリントの町でも相変わらず困った事は起こります。意地悪なことも言われます。それでも神さまは不思議な道を開いてくださり、コリントの町に教会が生まれました。

活動①

「仲間集め・どんどこジャンケン」

●準備●トランプ

①『こどもさんびか改訂版』106 番「どんどこどんどこ」（日本キリスト教出版局）を歩き回りながら歌います。

②最後の「歩いてゆけば〜」のあとに「ジャンケンポン」と言って、全員とリーダーがじゃんけんをします。

③勝った人は裏返したトランプから２枚もらえます。負けた人は不要のカードを１枚返します。（手持ちカードがなければそのまま）あいこはそのままです。

④４種類のマークをそろえたらあがりです。

活動②　ワークシート

「紙ししゅうのオーナメント」

●準備●ワークシートを画用紙にコピーしたもの、色画用紙、目打ち、毛糸用のとじ針（百均などにもあります）、または刺しゅう針、カラフルな毛糸や刺しゅう糸など、段ボールなど机を保護するもの、セロテープ、リボン

カラフルな毛糸などを使って、紙にししゅうをしてオーナメントを作りましょう。完成したらペンテコステのお祝いに向けて教会に飾ったり、それぞれ持ち帰ってもよいでしょう。年齢等に配慮し、ケガをしないように注意してください。

①外枠線に沿って切り離します。

②点線に目打ちを使って（ボールペンでも可能です）穴を開けます。段ボールなどを下に敷きましょう（ここまでをリーダーが事前に準備してもよいでしょう）。

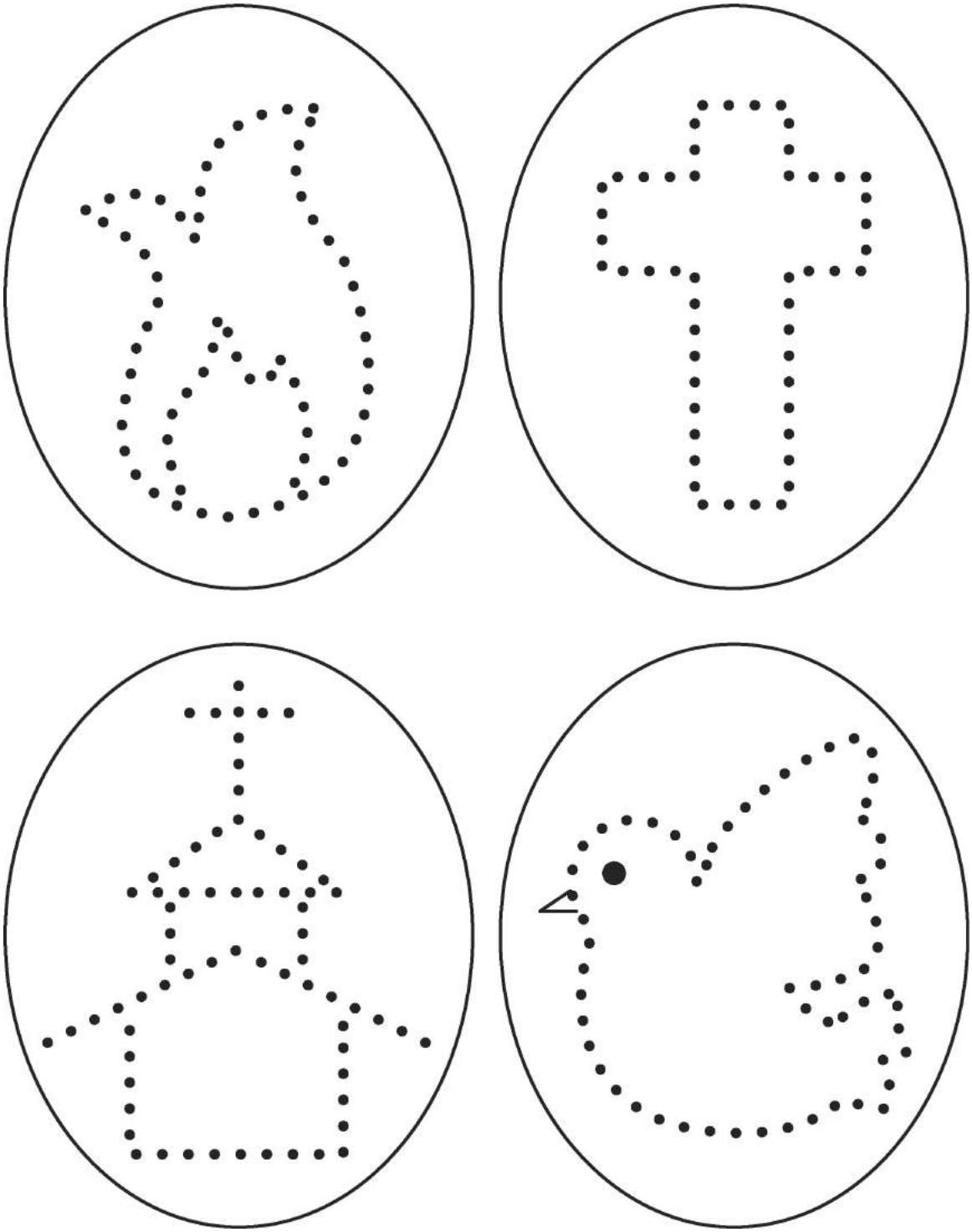
③毛糸は作業しやすい長さに適当に切り、とじ針に通します。玉止めはせず、裏側にセロテープで止めます。

④穴から穴へ、なみ縫いの要領で糸を通します。紙が破れないように、糸を優しくひきましょう。

⑤台紙となる色画用紙などに貼り、ぶら下げるためのリボンをつけて仕上げます。

ワークシート

紙ししゅうのオーナメント



聖書の学び

それでもエルサレムへ

聖書 使徒言行録20章17〜38節

暗唱聖句 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。
使徒 20：32

6課

5月8日

エフェソの教会の長老たちへ

パウロがアジア州のエフェソを訪ねたのは、第二伝道旅行の終わりに於いてでした（18：19）。更に第三伝道旅行においては、パウロはエフェソに「二年」以上も滞在し、「アジア州に住む者は、…だれもが主の言葉を聞くことになった」（19：10）のです。しかし、エフェソでは、伝道の進展だけでなく、人々による大暴動が起きるという困難もありました。パウロは、第三伝道旅行の終わりの時、そのような関わりが深いエフェソの教会の長老たちをミレトスに呼び寄せ、別れの説教を行ないます。この説教の意義は、「使徒言行録」におけるパウロの説教、演説の中で唯一、キリスト者へ向けて語られたものであることです。それは、特に教会の指導者のあるべき姿を語るものでした。

パウロの進む道

パウロは、この説教を、エフェソでの回顧（かいこ）から始めます。「涙を流しながら」、「神に対する悔い改めと…主イエスに対する信仰とを…力強く証ししてきた」と言います。19節の「ユダヤ人の数々の陰謀（いんぼう）」とは、あの暴動のことでしょう。

「そして、今」、パウロは、エルサレムに行く決意を語ります。エルサレムに行く目的はパウロ自身が書いたローマ15：25以下に、エルサレム教会に献金を届けるという具体的な目的が書かれています。しかし、ここではただ「霊に促されて」、「投獄と苦難が待ち受ける」その場所へと向かっていく、ということだけが語られます。それは、苦難の道を進まれ、エルサレムへ入城された主イエスの姿と重なります。パウロは、その時々の精一杯を尽くして、「自分の決められた道を走」って行くのです。

教会の監督者として

パウロは自分のことを語った後に、28節以下でエフェソの教会の長老たちに、教会の「監督者」としてのあり方について語ります。

先ず語られるのは、「教会とは何か？」です。教会とは「神の！ 教会」であり、それは「御子の血によってご自分のものとなさった」ものなのです。主イエスの十字架によって、私たちの教会は神のものとされ、真の教会とされるのです。

そして、「監督者」して「気を配る」ことととして、異端と金銀の問題が挙げられます。異端については、教会の外からの「狼ども」だけでなく、教会の中からも「邪説（じゃせつ）を唱える」者が出てくる困難が語られています。「目を覚まして」いなければなりません。金銀については、「むさぼる」ことが諌（いさ）められています。パウロは、他者からむさぼるではなく、「この手で…働いた」人でした。天幕作りのパウロです。それは、「自身の生活」だけでなく、「共にいた人々のために」、特に「弱い者を助ける」ためであったのです。「受けるよりは与える方が幸いである」という主イエスの言葉が引用されます。福音書には無い言葉ですが、パウロ自身が伝え聞いた言葉として心に残って

いたのでしょう。

そして、今

パウロは、この説教において自分自身を模範として語っています。「わたしはいつも身をもって示して来ました」。イエス・キリストに倣(なら)う自分を見なさいと言うのです。その姿は、「そして、今」「そして、今」と時を刻みながら、道を進むパウロの姿です。「そして、今」、パウロがエルサレムに向かうのは、主イエスの十字架の道に倣うからです。「そして、今」、パウロは、「神とその恵みの言葉とに」エフェソ教会の長老たちを委ねるのです。神の言葉が人に委ねられるのではなく、人が神の言葉に委ねられるという意味深い表現です。そして、神の言葉は、長老たちを「造り上げ」、模範とし、恵みの器(うつわ)とするのです。模範の原型は、主イエスです。主イエスからパウロへ、パウロから長老たちへと「恵みが受け継がれていきます。「そして、今！」、その恵みは私たちへ、そして、私たちから…。

準備のための聖書日課			
2日	㊊	コリントでパウロを支えた人たち	コリント一16:15～18
3日	㊋	エフェソでのパウロ	使徒言行録19:1～10
4日	㊌	行いではなく恵みによって	エフェソ2:1～10
5日	㊍	キリストにおいて一つ	エフェソ2:14～22
6日	㊎	エルサレムへ行く目的	ローマ15:22～29
7日	㊏	主の御心を求めて	使徒言行録21:1～16

6課

5月8日

成人科

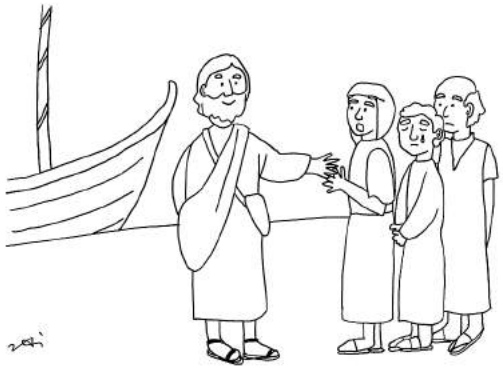
● この個所は、パウロがエフェソの長老たちに語った告別説教で、教会の群れを牧する「監督者」としての働きを語ったものです。それは、現代の教会ならば、牧師や執事への言葉かも知れません。しかし、指導者だけが聞く言葉でしょうか？教会の「群れが荒らされる」ことから守ること、むさぼりでなく「弱い者を助ける」ことは、教会に連なる一人ひとりの責務です。自分自身の信仰生活だけでなく、教会の運営全般に気を配り、「神の教会」を管理するという意識を持っているでしょうか？（伊藤隆夫『教会管理ハンドブック』ヨルダン社も参照）

● 教会を守ることを長老たちに勧めるパウロですが、パウロ自身は、エルサレムに向かって進んで行きます。「そして今」の時を刻み、重ねながら、「自分の決められた道を走りとおす」生き方です。それは、教会も同じです。教会は、ただ同じことを繰り返し、現状に留まり続けるのではありません。自己保身のための教会管理ではありません。教会は、揺れながら躓(つまず)きながらも、定められた道を前に進んで行くのです。教会が進む道は、どこに向かっているのでしょうか？

それでもエルサレムへ

聖書 使徒言行録20章17〜38節

暗唱聖句 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。
使徒 20：32



ここはミレトスの船着き場、パウロとエフェソの教会の仲間が向かい合っています。エフェソの町で一緒に教会をたてあげ、何をするにも〝主にならって〟と励ましあったお互いです。教会のみんなは分かっています。今から聞くことばは、パウロの告別のことばであると。

パウロは一人ひとりを見つめて語りだします。「君たちと私、エフェソの町でどう生きてきたか、隅々まで思い起こせるね」。静かにうなずく一人ひとり。涙を流しながらパウロがイエスさまを伝えてくれたこと、イエスさまの体である教会に招き入れられたうれしさ、「君が必要だ」と言ってくださるイエスさまに仕える喜び。隅々まで思い起こせます。

パウロは言いました。「そして今、私はエルサレムに行きます」。みんなの息が止まります。今エルサレムに行ったなら、十字架につけられたイエスさまを拒む者たちから捕らえられ、命の危険にさらされるのは目に見えています。でも、パウロは語るのです。「神さまの息吹が、わたしをぐるぐる包んで押し出すんだ、エルサレムへ、エルサレムへ。この道を走り通せるうれしさ、君たちと分かち合ってきたよね」。みんな思い起こします。十字架へ歩み通すイエスさまの姿を。

パウロは言います。「そして今、君たちとはもう二度と会うことができなくなると、私には分かってるよ」。教会の仲間たちは心が張り裂けそうです。パウロはそっと言葉を添えます。「君たちに足りないものは、もう何一つない。自分を気遣うように、教会のみんなを気遣ってよ。外からも中からも辛いことあるけれど、慌てふためかなくていいからね」。

パウロは、一人ひとりを見つめて厳(おごそ)かに宣言します。「そして今、君たちを神さまと、神さまの恵みのことばにゆだねます」。それはもうまるっきり祝福の祈りでした。パウロの心に、そして教会のみんなの心に、十字架につけられているイエスさまの姿がはっきりと映ります。神さまが大きく温かい手で、優しく包んでくれるのを感じます。約束のことばが自分たちを持ち運んでくれることに、心安らかです。パウロとのお別れは悲しくて、目からは涙がこぼれ落ちます。でも口からは、心からの返事がほとばしり出るのです。「アーメン、その通り」。

そして今、パウロはエルサレムへ行きます。神の息吹に包まれ、押し出されて。そして今、みんなは自分の教会へと戻って行きます。やはり、神の息吹に包まれ、そっと背中を押されて。

それでもエルサレムへ

聖書 使徒言行録20章17〜38節

暗唱聖句 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。
使徒 20：32

聖書から…

パウロは回想しています。「謙遜」に主に仕えながらも、順調ではなく「涙」を流すような出来事、数々の陰謀（いんぼう）による「試練」もありました。しかし、折が良くても悪くても、神の言葉を語ることに専心して、彼は霊に促されエルサレムに行くことを決めています。

パウロは苦難の歩みを想定しつつ、「命すら決して惜しいとは思わない」と語っています。ここで気をつけたいことはパウロの「命を賭（と）して」までの「苦難」への歩みを「強制」と受け取らないことです。「命を賭した」決意こそが素晴らしいと一般論化するのではなく、あくまでも、パウロが、神さまから与えられた使命に誠実に応えようとしていることが大切です。

また、パウロは神さまから与えられた働きがあることを信じていたから、苦難の道を選ぶことができたとも言えます。彼は「命を賭した」決意の中で、神さまの働きに仕えましたが、他者に「強要」することはありません。

彼はエフェソの長老たちに「命を賭す」ことを求めず、果たすべき働きとして「群れ全体に世話すること」「邪説（じゃせつ）から弟子たちを守ること」を託しています。

私たちは神さまに創造され、それぞれに神さまから働きを託されていることを覚えたいと思います。長老、パウロのような伝道者たちだけが特別な働きを担っているのではなく、誰しも神さまの働きを担っているのです。そして、多様な賜物が活かされ合ってこそ、主の福音は多くの人々に広がり、受け継がれていくのです。

分かち合おう

- パウロが「迫害」という困難を受けたように、人生には種々の困難があります。人間関係、学業などの失敗といった自己のことだけでなく、他者が傷つき、痛んでいることも困難といえるでしょう。時に、どうして自分だけがこんな目に遭うのか希望が見えないような時もあるかもしれません。しかし、神さまは人を見捨てることは決してありません。だからこそ、困難から目を背けるのでなく、そのような中でこそ、神さまと自分の関係性について考える機会としてとらえてみてはどうでしょうか。

- 信仰とは「強制」されるものではなく、また、他者に強制してもいけません。私たちは多様な存在であり、信仰のあり方も一人ひとり違います。しかし、それぞれは違っていても、イエスさまはすべての信仰者の「模範」であることを覚えたいと思います。互いの信仰を強要し合うのでなく、違っていながらも同じ主を見上げることができる喜びに共に気がついていきましょう。

幼小科

それでもエルサレムへ

聖書 使徒言行録20章17〜38節

暗唱聖句 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。
使徒 20：32

6課 5月8日

聖書から…

悲しいお別れを経験したことがありますか？ 大切な人と会えなくなってしまうのは、これ以上ないほどに辛いことでしょう。避けて通りたいことですが、そうはできないことにぶちあたってしまうこともあるのです。

パウロは、厳しい道を進む覚悟を決めていました。パウロを心配するエフェソの教会の人たちに、最後のメッセージを祈りを込めて伝えます。パウロは祈りの中で大切な人たちのことを神さまと神さまの恵みの言葉にお任せするように導かれました。ちょっと不思議な表現ですが、パウロは信じるべきは人ではなくて、神さまであり、教会のみんなを導き守ってくださるのは神さまの恵みの言葉だということに気づきました。パウロ自身も心穏やかに、これからのことを伝え、神さまに信頼して祈り合うことへと導かれました。そしてこの時のことは、いつまでも教会の人たちの心に温かい光をともしていくことになりました。私たちも、どんなときにも神さまを信じて祈り合いたいですね。

活動①

「ゲーム：ピンチをチャンスに！」

●準備●洗濯用のピンチをたくさん、うちわ（人数分）

うちわの上にピンチを乗せて運びます。スタートからゴールまで時間内にどれだけたくさん運べるでしょうか。一度にいくつ乗せてもいいですが、途中で１個でも落としたら、もとのところまで戻ってやり直しになります。一度にたくさん乗せて運ぶとリスクもありますが、早く進むかもしれません。徐々に障害物を増やしたり、うしろ向きに歩いたりして難易度をあげましょう。

活動②　ワークシート

「なぞときオオカミさんじょう！」

パウロが船で出発した後に、なんと意地悪な謎解き狼たちが現れて、パウロやエフェソの教会の人たちをまどわせようとしています。エフェソの教会の人たちといっしょに力を合わせて、狼たちをやっつけましょう。

問題１：謎解き狼たちのしわざで、パウロの乗った船は向かうべき町が分からなくなってしまいました。パウロが向かった町はどこ？

答：エルサレム（漢字の中にカタカナが隠れています）

問題２：謎解き狼たちは、パウロが最後に伝えた大切なメッセージを迷路の中に隠してしまいました。パウロが伝えた大切なことはなに？

答：カミノコトバ／神の言葉（ヒント：迷路をスタートからゴールまでたどると「みぎからかたかなをよめ」という暗号が見つかります。カタカナを右から読むと…。）

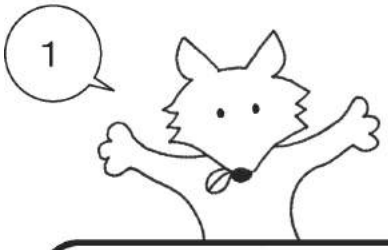
問題３：謎解き狼たちには弱点があるらしい。見つけてやっつけよう！

答：「いのり」（あいうえおの語順にあてはめる）

ワークシート

なぞときオオカミさんじょう!

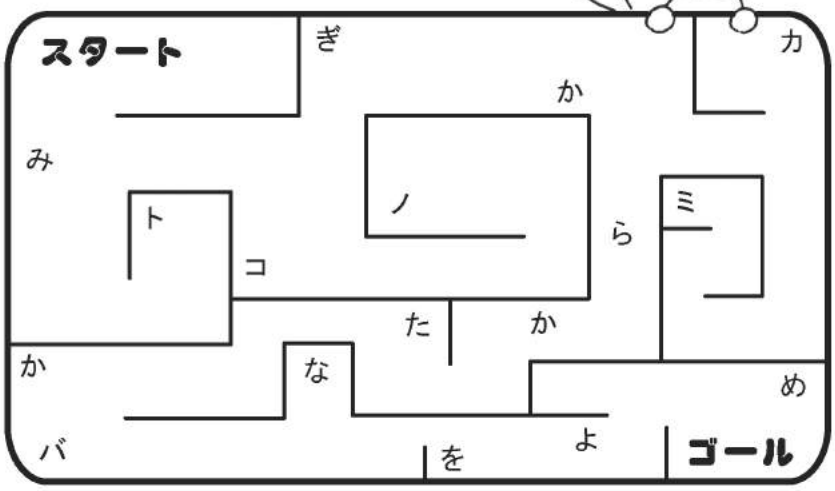
1



パウロがむかった町はどこ？

江 元 花 礼 公
→ ↓ ↑ → ↓

2



3

あ	ね	ら
○	○	○
う		る

聖書の学び

神の前で、人々の間で

聖書　使徒言行録22章30節〜23章11節

暗唱聖句　その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ」
使徒 23：11

7課　5月15日

逮捕されたパウロ

エルサレムに到着したパウロは、教会の人々に挨拶をし、異邦人伝道の実りを共に喜びました。しかし、パウロが神殿にいた時、群集による暴動が起こりました。その混乱を聞いたローマの千人隊長は暴動を鎮め、パウロは逮捕されてしまいました。

この千人隊長は、ローマの市民権を持つパウロを慎重に扱わねばならないと判断し、「なぜ、パウロがユダヤ人から訴えられているのか」詳しく知ろうと、ユダヤの最高法院を召集します。最高法院は、ユダヤ人の自治機関で、行政と司法に大きな権限を持つ会議でした。

大祭司アナニアとの対峙

最高法院に立たされたパウロは、語り始めます。「私は、良心に従って神の前に生きてきた」と。しかし、大祭司アナニアはパウロを生意気だと思ったのか、「口を打つように命じ」ます。大祭司による審問において打たれることは、主イエスの場合も同じでした（ヨハネ 18：22）。大祭司アナニアはサドカイ派に属しており、66 年頃、ローマにへつらう者として、ゼーロータイ（熱心党）・シカリ派によって殺害されたようです。「神があなたを打つ」という宣告は、その殺害のことが、著者ルカによって事後預言として語られているのでしょう。

パウロは、大祭司アナニアを「白く塗った壁」と呼んでいます。エゼキエル書 13：10〜16 における偽りの預言者を批判する言葉が反映されているのかも知れません。そこでは、漆喰で塗られた壁が、神からの暴風によって崩れ落ちることが記されています。パウロの大祭司への言葉が無礼であったので、近くにいた者たちが注意しますが、パウロは「その人が大祭司だとは知りませんでした」と答えました。知った上で、「彼は大祭司にふさわしくない」と批判を込めて、皮肉を言ったのでしょう。

最高法院の分裂

最高法院は、サドカイ派とファリサイ派という神学的にも政治的にも異なる 2 つのグループによって構成されていました。パウロはそれを利用して、窮地の打開をはかり、声を高めて言います。「私は、生まれながらのファリサイ派である。私は、死者の復活の望みを抱いていることで、裁判にかけられている」と、自らファリサイ派を名乗ったのです。

ファリサイ派は、死者の復活、天使や霊の存在を認めていました。それに対し、サドカイ派は、そのようなものは伝統的信仰からの逸脱として認めませんでした。サドカイ派は、モーセ五書のみを重んじ、神学的には保守的でした。しかし当時、彼らの関心は祭司職の特権的地位を保つことにあり、そのためにはローマとの妥協もいとわなかったのです。

最高法院の議論は、分裂しました。「ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって」、パウロの無実を訴えました。「この人には何の悪い点も見出せない」。論争は激しくなり、

心配した千人隊長は、パウロを兵営に連れて行きました。

主イエスの呼びかけ

その兵営で、夜パウロは、主イエスの呼びかけを聞きました。今回は、「そばに立って」語りかけてくださいました。「勇気を出せ。エルサレムで、私のことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」。「証しする」とは、原典のギリシア語で「マルチュレオー」で、「殉教(じゅんきょう)する」という意味もあります。死をも覚悟し、命がけで主イエスを宣べ伝えるのです。パウロは、すでにエフェソで「私は…ローマも見なくてならない」（19：21）と決意しています。そのパウロの決意が、ここでは、主イエスの言葉によって「神的必然」（荒井献『使徒行伝』新教出版社）とされているのです。パウロのローマ行きは、パウロ個人の思いではなく、聖霊によって福音が広く伝えられていく、神のご計画のうちにあるのです。

準備のための聖書日課			
9日	㊊	エルサレムでのパウロ	使徒言行録21:17〜26
10日	㊋	パウロ逮捕される	使徒言行録21:27〜36
11日	㊌	偽りの預言者	エゼキエル13:8〜12
12日	㊍	律法に関してはファリサイ派の一員	フィリピ3:5〜6
13日	㊎	イエスの証人とされて	使徒言行録1:8
14日	㊏	パウロと千人隊長	使徒言行録22:22〜29

成人科

- 「証し」は「殉教」でもあり、命がけの証言です。自分の喜びの体験を披露するのではなく、自分を投げ出して、主イエスの愛を示すのです。1981年、長崎を訪れたヨハネ・パウロ2世は、「日本の教会は、たくさんの『まるちれす』（ポルトガル語で「殉教者」）の血の上に建てられた教会です」と言いました。強いられた犠牲ではない、自由で真剣な献身によって、教会の歩みは支えられて来ました。私たちも、今、「まるちれす」となるべく招かれています。「まるちれす」は、狂信、自己満足、無意味な犠牲でしょうか？
- 最高法院で証しするパウロの姿には、何か余裕を感じます。大祭司アナニアに皮肉交じりの言葉をかけたり、また、サドカイ派とファリサイ派の対立を煽(あお)ったり、審問を受けている悲壮感はありません。イエスの言葉を思い出します。「権力者のところに連れて行かれたときは…何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる」（ルカ12：11〜12）。聖なる風が吹いていることを感じる時、窮地に追い込まれても、大らかにユーモアを持って生きることができます。そこが最後の場所ではないと知っているから。

神の前で、人々の間で

聖書 使徒言行録22章30節〜23章11節

暗唱聖句 その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ」
使徒 23：11

ついにパウロは、エルサレムに到着し教会を訪ねると、こんなアドバイスを受けました。「あなたを敵だと思い込んでいる仲間たちがいます。誤解を解くため神殿で清めの式を受けて律法を大切にしている姿を見せてください」。パウロがその通りにし、七日間の式が終わる日のこと。パウロが神殿の境内にいるのを見かけたユダヤの人たちは、パウロを捕らえ叫びました。「こいつは神の律法を捨てさせる男だ！ 聖なる神殿から引きずり出せ！」。パウロは呼びかけます。「兄弟たちよ、話を聞いてくれ！」。

この大騒動からパウロを保護したローマ軍の千人隊長は、なぜこれほど憎まれているのか調べるために、ユダヤの議会を開かせました。パウロは一人ひとりを見つめ、語ります。「わたしの兄弟たち、わたしは心を高く上げ、神の前で生きてきました」。千人隊長は初めて見ました。殺されかけ、訴えられながら、その相手に家族の眼差しで語りかける人間を。議員の一人はハッと思い出しました。同じように、かつて裁判の被告席に立たされ、訴えられ、罵(ののし)られ、処刑され、しかし家族を見つめる眼差しを最後まで失わなかった一人の男を。

大祭司はパウロを打てと命じます。パウロはひるまず大祭司を見据え、「あなたはまるで白く塗った壁だ」と対峙(たいじ)する。議員の一人はまたハッと思い出します。かつて自分をまっすぐに見つめ返し「あなたは白い墓だ。神の前にそんな生き方でよいのか」

と問うてきた一人の男を。

パウロは、確信している希望を伝えるのは今この時と、語りかけます。「兄弟たち、わたしはファリサイ派です。わたしたちの抱いている希望は死者の復活です。これこそ拠(よ)り所、帰っていける望みの港ですよね」。この語りかけは議員たちの心に刺さりました。死者の復活なんて受け入れるわけにはいかないサドカイ派は、目をつり上げて叫びます。「この者を死刑に！」。しかし、死者の復活を信じ、そこにこそ望みをかけているファリサイ派は、心動かされ言います。「この者に何一つ悪いところはない。神の息吹がこの者に希望を語らせている！」。議会は激しく対立し、これ以上続けるのは危険だと判断した千人隊長は、パウロを兵営に連れ出しました。

その夜、イエスさまがパウロの傍(かたわ)らに立って、語りかけます。「兄弟よ、君はここエルサレムで、はっきりとわたしを映し出してくれたね。兄弟よ、君はローマでもわたしを映し出すことになっているよ。わたしの兄弟よ」。

神の前で、人々の間で

聖書 使徒言行録22章30節〜23章11節

暗唱聖句 その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ」
使徒 23：11

聖書から…

パウロは最高法院で大祭司アナニアよって尋問（じんもん）されています。エルサレムは混乱していました。なぜならユダヤ人はパウロを殺そうしていたからです。この混乱を収めよう千人隊長はパウロを逮捕しています。最高法院で、パウロは多くの最高法院の議員たちから取り調べをうけることになりますが、パウロは大勢の人々が集まるこの状況を逆手に取って、自分の無罪について語るのでなく、多くの人々に福音を伝えようとしました。そして、皇帝に上訴してでも、福音を伝えるためにローマに行こうとしています。

最高法院にはファリサイ派とサドカイ派という派閥（はばつ）があり、ファリサイ派は、復活を信じており、サドカイ派は復活を信じていませんでした。パウロは片方に「すり寄る」のでなく、自分が信じている「復活」について語ることにより、最高法院での尋問を終わらせようとし、それは成功しました。結果として、最高法院では結論を出すことができず、パウロは兵営に連れていかれます。その夜、イエスさまがパウロの前に姿を現し、「勇気を出せ。エルサレムで、私のことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と語られます。この言葉により、鎖に繋がれたままでも、福音を伝えるためにローマに行こうとするパウロの行動が、彼自身の思いだけでなく、イエスさまの導きによってなされているものであるということが分かります。

人間的な視点では、囚われの身のパウロがローマに行くことは無理のように思えます。しかし、主なる神さまは「無理」な状況を切り拓かれ、「勇気を出せ」と私たちを励まし、道を備えるお方なのです。

分かち合おう

- パウロは、周りがどれだけ彼を否定しても、ぶれずに、自分が信じていることを、自らの言葉で語っています。さて、私たちは自分の意見を誰にも気にせずに語ることができる、本音で話せる「場」があるでしょうか。例えば、「教会」は、本音で語り合える場になっていますか？ 本音で語り合える人が教会にいますか？

- 聖書の言葉に勇気づけられたことがどれくらいあるでしょうか。私は自分が困難の中にある時にいつも「詩編」を読むようにしています。また、自分の困難を正直に分かち合い、誰かと一緒に聖書を読むことも大事にしています。自分だけの力だけで困難に立ち向かっていませんか？ 困難な時こそ、主の言葉に頼ってみてはどうでしょうか？ 励ましの言葉が聖書から与えられるはずです。

幼小科

神の前で、人々の間で

聖書　使徒言行録22章30節〜23章11節

暗唱聖句　その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ」
使徒 23：11

7課

5月15日

聖書から…

大勢の敵対する人の真ん中で、自分の考えをしっかりと話すことなど、なかなかできることではありません。パウロは少しもひるまないばかりか、おだやかな優しい表情で、周りにいる人たちを見つめていました。どうしてそんなことができたのでしょうか。

パウロが立たされている場所は、以前イエスさまが立たされた場所でした。そしてたくさんの人の前でひどい裁判を受け、鞭うたれ、十字架にかけられたのでした。パウロは心の中でそのイエスさまを見上げていました。同時にパウロは自分にひどい言葉を投げつける人たちの気持ちも理解できました。それはイエスさまに出会う前の自分の姿そのものだったからです。パウロ自身がイエスさまに出会って全く変えられたように、「ひとりでも多くの人にイエスさまに出会ってほしい」との願いから、パウロはそのために、自分にできることをするだけと思っていたのです。

活動①

「思い切ってチャレンジしよう！」

教会や教会学校の礼拝で、奉仕をしてみませんか？ みんなの前に立つのは勇気がいるけれど、チャレンジするために、リーダーは声を掛け合い、まず話し合いましょう。どんな奉仕があるでしょうか。（司会、お祈り、聖書朗読、証し、メッセージ、奏楽、献金当番など）やってみたいことはありますか？ まずは講壇に立って練習してみましょう。いろんな奉仕を交代して練習してみてもいいでしょう。そして本番に向けてお祈りしましょう。きっとイエスさまの「勇気を出せ」という言葉が響いてきますよ。奉仕を捧げた後で、感じたことを分かち合ってみてもいいですね。

活動②　ワークシート

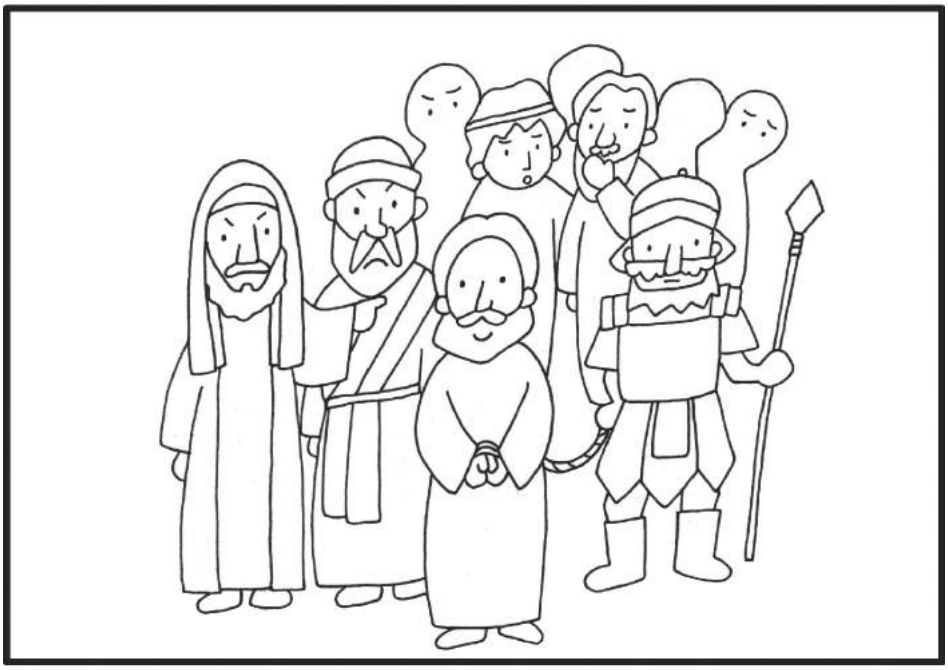
「どう変わったかな？」

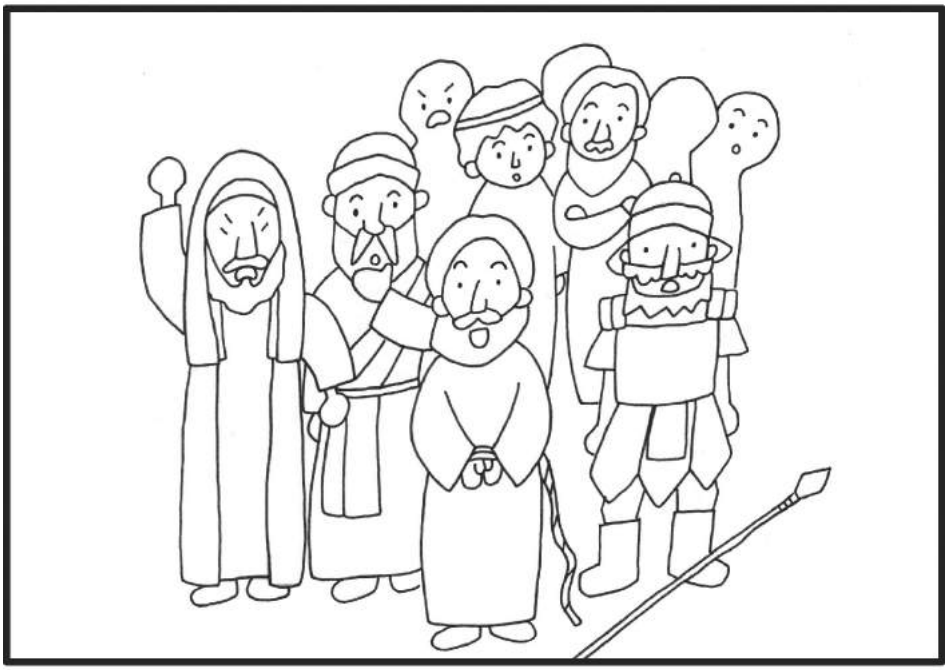
●準備●ワークシートを人数分、色鉛筆

ワークシートを人数分コピーして、パウロの証しを聞いた人たちがどのように変化しているか、絵の中から見つけましょう。どうしてそんな風に表情が変わっているのか、考えて話し合うこともよいでしょう。拡大コピーして色を塗り、今日のお話に用いることもできます。

ワークシート

どう変わったかな?





聖書の学び

鎖につながれながら

聖書 使徒言行録26章19〜32節

暗唱聖句 しかし、神の言葉はつながれていません。
2テモテ2：9

8課 5月22日

ローマ行きが動き始める

エルサレムに向かったパウロは、到着後、逮捕されます。最高法院で取調べを受け（7課参照）、そして総督（そうとく）フェリクスのもとへ送られます。その後、カイサリアで軟禁（なんきん）され約2年の時が過ぎます。事が再び動き出したのは、総督が新しくフェストゥスに代わった時でした。パウロの暗殺も企てられる中、彼はローマの「皇帝に上訴」（25：11）します。パウロのローマ行きが動き始める中、フェストゥスを表敬訪問したアグリッパ王とベルニケの前で、パウロは弁明することとなったのです。

アグリッパ王への弁明

「アグリッパ王とベルニケが盛装して到着し」（25：23）ます。彼らは、華麗（かれい）な装いをこらしていました。他方、向き合うのは、質素な身なりで「鎖につながれ」ているパウロです。主イエスは、「人々はあなたがた（を）、…王や総督の前に引っ張って行く。それはあなたがたにとって証しをする機会となる」（ルカ21：12〜13）と言われました。その言葉が、実現したのです。

パウロの弁明は、26：2から始まります。この弁明からは、パウロが同胞のユダヤ人の救いを切に願っていたことが伺われます。「民にも異邦人にも光を語り告げる」、「この民」とは、ユダヤの民のことです。20節には、彼は「ユダヤの全土の人々」に神に立ち帰ることを呼びかけたとあります。実は、パウロ自身の手紙や使徒言行録でも、パウロが「ユダヤ全土の人々」に伝道したという記録はありません。しかし、この言葉には、すべてのユダヤ人がキリストの光のうちに歩む願いが込められているのです。

彼の弁明の最後は、「メシアが苦しみを受け、また、死人の中から復活して…光を語り告げる」ということでした。これは、原典のギリシア語では、「…受けるだろうか…復活するだろうか…語り告げるだろうか」と、問いかけのニュアンスを含んでいます（田川建三『新約聖書 訳と註』作品社）。パウロ自身の答えは、「その通り」に他なりません。しかし、福音の核心を断言するのではなく、アグリッパ王の心を揺さぶる呼びかけとして語っているのです。

フェストゥスとアグリッパとの対話

パウロの弁明の最中に、総督フェストゥスは遮（さえぎ）ってパウロをなじります。「お前は、頭がおかしい」と。しかし、パウロは、遮られても語り続けます。フェストゥスに、これは「真実で理にかなったこと」であると言い返します。そして、パウロは、アグリッパ王に語りかけます。「王は、これらのこと（イエス・キリストの出来事）について、よくご存じです。一つとしてご存じないものはない」。これは、王に対する機嫌取り、あるいは皮肉でしょうか。そうでなく王の良心に対して、あのイエス・キリストを知るべきであり、信じるべきだと真剣に回心を呼びかけているのです。

パウロは、「このことは、どこかの片隅で起こったのではない」と言います。確かに、

イエス・キリストの出来事は、世界的にはエルサレムという町で起きた小さな出来事に過ぎません。しかし、この出来事こそ、すべての人々の救いであり、全世界に転換をもたらしたのです。

つながれながらローマへ

結局、総督フェストゥスもアグリッパ王も、パウロの呼びかけを聞かず立ち去ります。彼らは、パウロが無罪であることを確認します。「あの男は、死刑や投獄に当たるようなことは何もしていない」と。それでも、パウロは釈放されず、「鎖につながれ」監禁され続けます。それは、皇帝に上訴している裁判中の身であったからです。けれども、パウロがこの時「鎖につながれ」ることは、ローマに行くために必須のことでした。パウロが鎖につながれることによって、福音宣教が停滞するのではなく、むしろ前進するのです。神の不思議な導き、ご計画です。

準備のための聖書日課			
16日	㊊	皇帝への上訴	使徒言行録 24:27〜25:12
17日	㊋	パウロの主張	使徒言行録 25:13〜22
18日	㊌	アグリッパ王の 前での弁明	使徒言行録 26:1〜11
19日	㊍	あなたを証人にする ために	使徒言行録 26:12〜18
20日	㊎	証しする機会	ルカ21:12〜13
21日	㊏	神の言葉は つながれない	テモテ二2:8〜10

成人科

● この２年間、私たちは、コロナ感染によって教会の礼拝や諸活動の制約を受けて来ました。動きたくても動くことができない、まさに「鎖につながれて」いるような期間でした。しかし、その制約・束縛・不自由を、自らの無力や怠慢の言い訳に使うことはなかったでしょうか？「コロナだから、できなくて仕方がない」と。鎖につながれながらも、なお「説き伏せる」くらいの情熱をもって福音を伝えたパウロの姿に倣う者でありたいと願います。

● パウロの熱い証しに、総督フェストゥスもアグリッパ王も、心を揺さぶられたようです。だからこそ、フェストゥスはパウロをなじり、アグリッパは抵抗します。しかし、結局、彼らはパウロに少しの同情を示しつつ、パウロの前から消えていきます。揺さぶられつつも、なお福音を受けとめきれない彼らの心にある妨げとは、何であったのでしょうか？ 地位、富、常識、伝統？ 私たちがキリストを受け入れたとき、最後の一押しになったことはどんなことだったでしょう。

鎖につながれながら

聖書 使徒言行録26章19〜32節

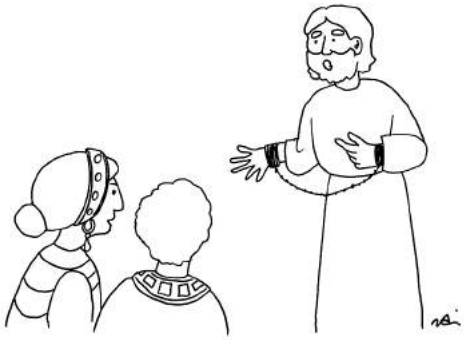
暗唱聖句 しかし、神の言葉はつながれていません。
2テモテ2：9

総督フェストゥスの官邸に、好きなだけ着飾った人たちが到着しました。アグリッパ王とその妹で、かねてから興味をもつパウロに会うためです。パウロは二年も囚人として捕らわれていました。飾り一つないみすぼらしい服、鎖につながれたパウロが連れてこられます。もったいぶったフェストゥスの開会宣言を合図に、アグリッパ王がパウロに言いました。「お前は何であれ、自分のことを話すがよい」。

王の目をまっすぐに見つめながらパウロが語り出したのは、自分を闇から光に立ち帰らせてくださったイエスさまのこと。「神さまのもとに帰ろう」ということ。遥か昔から聖書が告げてきた約束とその成就を伝えます。「メシアは苦しみを受け、三日の後に死者の中から復活し、その名によってあらゆる国の人々が、罪の赦しの光を受ける！」。復活のイエスが弟子たちに語った通りの言葉を。

フェストゥスは大声でさえぎりました。「パウロ、お前はまったく非常識だ！ 勉強しすぎで愚か者になったのだ！」。パウロは答えます。「わたしは非常識ではありません。まっすぐ通った神の筋道を話しています」。

そしてアグリッパ王に向き直って語ります。「神の筋道はどこか遠くの片隅に通ったのではありません。わたしたちの真ん中に通りました。王よ、聖書の約束は必ず実現すると信じていますね」。王は、心のうろたえを隠すため、大声で言いました。「お前はわたしをこんな短い時間でキリストを信じる生き方に変える気か！」。目をそらす王を捕らえるようにパウロは続けます。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王であろうと貧しい人であろうと問題ではない。今日わたしの話を聞くすべての人を、わたしのように解き放ってくださいと神に祈ります」。にらみ返す二人に、パウロはフッと微笑んで言いました。「このように鎖につながれることは別ですが」。



アグリッパ王が立ち上がり、列席した皆も立ち上がり退場します。見送るパウロの目には、見えない鎖でつながれた一人ひとりが映っていました。パウロは祈ります。「神よ、皆をわたしのように解き放ってください」。

退場した人々はこっそり言い合います。「あの男は何も悪いことしていないんだがなぁ」。薄暗い廊下を歩きながら、アグリッパ王はフェストゥスに言います。「あの男、皇帝に訴えたりしなければ、鎖から解かれ自由の身になれたものを」。好きなだけ着飾った人間が、薄暗い闇の奥へと消えていきます。

鎖につながれながら

聖書 使徒言行録26章19〜32節

暗唱聖句 しかし、神の言葉はつながれていません。
2テモテ2：9

聖書から…

最高法院でのやり取りから2年が過ぎました。パウロはカイサリアで軟禁状態でしたが、ローマ行きを諦めていません。パウロは総督がフェストゥスに変わった時に、弁明する機会を得て、この時にローマ皇帝に上訴すること認められています。

ある時、フェストゥスの総督着任を表敬するためにユダヤのアグリッパ王と皇女ベルニケがやってきます。アグリッパ王はパウロに会ってみたいと言い出し、パウロは王の前に引き出されました。パウロは自分にかかっている容疑への「弁明」を始めますが、それは、アグリッパ王への「宣教」へと変わっていきます。パウロは王を前にしても怯まず「小さな者にも大きな者にも証しをしてきた」と述べているように、王であったとしても、聞くべき福音があるのだと語ります。無罪の主張でなく、イエスさまの受難と復活を伝えようとするパウロにアグリッパ王は「お前は頭がおかしい」と叫んでいます。それに対してパウロは受難と復活はこの世界の「片隅の出来事」として目に留める必要のないことでなく、人々が目を留めるべき「救いの中心的出来事」であり、それを知ることは「理にかなったこと」だと応答します。

パウロの中心には福音を伝えることがあります。出会わされている人に、福音を伝えようとするのです。このパウロの宣教を聞き、アグリッパ王もフェストゥスも退席しています。アグリッパ王は「上訴」さえしなければ、無罪が確定したであろうと言っています。しかし、無罪の方がいいという人間の考えを超えて、神さまは鎖に繋がれたままのパウロをそのご計画の中で、ローマへとたどり着かせるのです。

分かち合おう

- パウロはどんな状況であっても、相手がどんな立場であっても、すべての人に必要な福音を伝えようとしました。一方で、自分は教会に行っていることをなかなか言えないということもあるかもしれません。どうして隠しておきたいのでしょうか。誰になら安心して、教会のことを話すことができるでしょうか。

- メリットのある選択をしたいと多くの人が考えます。パウロにとって無罪になることこそメリットでした。しかし、彼はそれを選ばずに自分が信じた神さまの計画である「ローマ行」を選び取りました。この選択には神さまの計画を求めるパウロの祈りがありました。祈りは神さまとの「対話」です。何かを選択する時に祈り、神さまと対話する中で、選びとることは大事なことではないでしょうか。

幼小科

鎖につながれながら

聖書　使徒言行録26章19〜32節

暗唱聖句　しかし、神の言葉はつながれていません。
2テモテ2：9

8課

5月22日

聖書から…

「神の言葉はつながれていません」と言ってみましょう。今度は、牢屋に閉じ込められていたパウロの気持ちを想像して言ってみましょう。…どんな違いを感じましたか？

パウロ自身、どんな時も「神の言葉」に力づけられていたのでしょう。だから権力をもつ人たちを前にしても、全く恐れることなく、与えられた「神の言葉」を堂々と伝えました。反対にアグリッパ王もフェストゥス総督もそんなパウロの語る「神の言葉」の力に、圧倒されて、たじたじになってしまいました。「なんだかパウロの方が自分たちよりも、よっぽど自由なんじゃないのか」と感じたのではないでしょうか。

活動①

「鎖につながれながら」

●準備●風船３個以上、うちわ、
段ボール箱、座布団

私たちはパウロと一緒に牢屋に入れられています。でも、『神の言葉』（風船）は捕まっていないことに気がつきました。そして『神の言葉』を伝え励まし合うことにしました。

ミッション１：『神の言葉』を伝え、勇気を取り戻そう。私たちは座布団の牢屋から出られません。座布団に乗ったまま「神の言葉風船」をバレーパスしましょう。10回続けられたら、全員で合言葉「神の言葉はつながれていません！」と言ってクリアします。

ミッション２：相手が誰だって、しっかりと『神の言葉』を伝えよう。『神の言葉』は聖霊の風に吹かれて人の心に伝わります。うちわで聖霊の風を吹かせて、アグリッパ王とベルニケ姫と、フェストゥス総督の心に『神の言葉風船』をシュートしましょう。

座布団から、３人の心に見立てた段ボールに向けてうちわで風を送り風船をシュートします。一人ずつでも、何人かでもいいでしょう。一つでもシュートが決まったら、合言葉を言います。全部の箱にシュートが決まったら、全員で合言葉を言いましょう。

活動②　ワークシート

「本当に自由なのはだれでしょう!?」

●準備●ワークシート、画用紙、はさみ、
色鉛筆

①ワークシートを画用紙にコピーします。
②パーツ１とパーツ２の外枠をそれぞれ切り取ります。パーツ２の四角に暗唱聖句を書き込み、色を塗りましょう。
③パーツ１は、やまおり線を２か所折り、文字下の線を折ったままきりとり線をハサミで切り取り、牢屋の格子部分を作ります。
④③を広げ、中央のやまおり線で二つ折りにして牢屋を作り、パーツ２を挟み込みます。
⑤パーツ２をスライドさせてみましょう。「神の言葉」は、本当に自由なのはだれかを明らかにします。

ワークシート

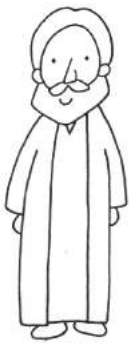
本当に自由なのはだれでしょう!?

やまおり

パーツ１

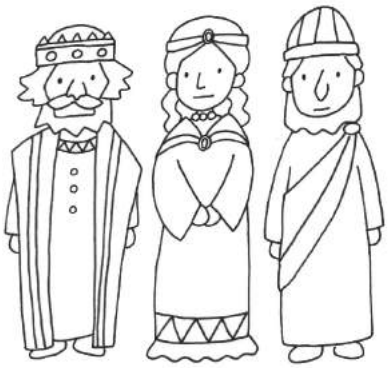
本当に
自由なのは
だれでしょう？！

パーツ２



パウロ

2テモテ2:9



アグリッパ　ベルニケ　フェストゥス

聖書の学び

ともに元気に

聖書 使徒言行録27章13〜38節

暗唱聖句 元気を出しなさい。…皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。
使徒 27：22

9課

5月29日

ローマへ出発

パウロはローマへと護送されます。カイサリアの港から出航し、クレタ島の「良い港」に着きました。パウロは、冬の航海は危険だと忠告をしました、しかし、人々は聞かず、クレタ島のフェニクス港に向かいました。案の定、「エウラキオン」と呼ばれる北東の暴風が、クレタ島の山々から吹き下ろしてきました。船は、暴風によって進むことができません。船員たちは、様々な手を尽くしましたがどうにもなりませんでした。太陽も星も見えず、「助かる望みは全く消えうせようとして」いました。しかし、この絶望的な状況でも、パウロは諦めず希望を持ち、乗船するすべての人を励まし続けます。

パウロの第一の言葉、元気を出しなさい

パウロは「私が言った通りに、船出していなければ」と、過去の判断を叱責します。けれども、叱責を長々とはせずパウロは励まします。「しかし、今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。…だれ一人として命を失う者はない」と希望を与えるのです。

その希望の根拠は、神のパウロに対する命令と約束です。パウロは、前夜、神の使いを通して、「あなたは皇帝の前に出頭しなければならない」と言われていました。神がパウロのローマ行きを定められたのです。そして、「一緒に航海しているすべての者を、あなた（パウロ）に任せてくださった」のです。この「任せる」とは、神から「贈られた」（荒井献『使徒行伝』新教出版社、岩波訳）、「恵みとして与えられた」（田川建三『新約聖書』作品社）ということです。船上で一緒にいる人々は、神からパウロへの恵みのプレゼントです。だから、ローマ行きを定められたパウロの命も、そして、そのパウロに贈られた人々の命も失われることはないのです。

パウロの第二の言葉、とどまっていなければ

船は漂流し続けました。しかし、水深が浅くなり、陸地に近づいていることが分かりました。希望が見えてきたところで、抜け駆けをする人々が現われます。船員たちが、夜中、小船を海に降ろして逃げようとしました。自分だけは助かりたいという人間の醜い思いです。

ここで、パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と厳しく言いました。確かに、今後の航海のためにも、船員たちの存在は不可欠です。しかし、技術上の問題ではありません。自分だけは助かりたいというエゴイズムが広がることは、衝突と混乱をもたらし、結局、すべての人が滅びることになるという警告なのです。

パウロの第三の言葉、どうぞ食べてください

夜が明ける頃、パウロは、人々に食事を勧めました。「一緒に食べましょう！」と呼び

かけました。そこで、「あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」というルカ 21：18 の主イエスの言葉と同じ言葉が語りかけられています。厳しい迫害の中で、神の守りを約束する言葉です。

パウロはパンを取って、感謝の祈りをささげ、それを裂いて食べ始めました。この表現は、ルカ 9：10 以下の「五千人の給食」や 22：14 以下の「最後の晩餐」における主イエスの所作が意識されています。船上は、エゴイズムという醜い心、そして、怒りや不安に覆われていました。しかし、この食事によって、人々は、共に生かされている不思議な恵みを覚えたのです。

「船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった」。「私たち」、つまり、著者のルカも、そこにいたということです。ルカはパンを食べながら、船上にいた人々の数を数えたのでしょう。そこには、船員、百人隊長、兵士、奴隷、そして、囚人たち、様々な人々がいました。「みんな」として括られるのではありません。立場も境遇も異なる人々が、一人ひとり数えられています。一緒に食事をする仲間として…。それは、神の国が現われた瞬間でもありました。

準備のための聖書日課			
23日	㊊	ローマへ向かって	使徒言行録 27:1～8
24日	㊋	パウロの忠告	使徒言行録 27:9～12
25日	㊌	苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を	ローマ5:1～5
26日	㊍	髪の毛一本も	ルカ21:7～19
27日	㊎	賛美と祈りを唱えて	ルカ9:10～17
28日	㊏	共に生かされている恵みを覚える	ルカ22:14～23

成人科

●「元気印」と呼ばれる人がいます。明るく前向きで、でも、それしか取り柄がないと揶揄するニュアンスも含む呼称です。キリスト者は、まさに社会の「元気印」でありたいと思います。不安や諦めが広がる中でも、身をもって希望を表していくのです。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」（コリント二 4：8 ～ 9）。過ぐる 1 週間、私たちは、周りに希望を示す「元気印」であったでしょうか？

●パウロという「元気印」によって、船上の人々は力づけられ、それだけでなく、一人ひとりが繋がれていきました。私たちも、一人ひとりに目が留められ、数えられ、大切にされる共同体（教会と社会）を作っていきたいと願います。教会では一緒の食事（主の晩餐、昼食、愛餐会など）によっても繋がりが形成されていきます。しかし、今、飲食をするのが難しい状況の中で、私たちは、どのように繋がっていくことができるでしょうか？

みんなで聴く聖書のおはなし

ともに元気に

聖書 使徒言行録27章13〜38節

暗唱聖句 元気を出しなさい。…皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。
使徒 27：22

9課

5月29日

パウロはローマ皇帝のもとで裁判を受けることになり、百人隊長が船を手配しました。「冬の航海は危険です。この港町で冬を越した方がいい」と忠告するパウロ、船長は「囚人に海の何がわかる」と出港させます。

順調なのははじめの内。すぐに暴風が吹き始め、誰もが「あの囚人の言葉を聞いておけば」と悔やみました。沈没を避けようと、船乗りたちは大切な積み荷を海に捨てました。船乗りの魂（たましい）である船具さえも捨てました。パウロが立ち上がって「わたしの忠告に従っていれば、こんなことにはならなかった」と迫るので、船長も百人隊長も目を伏せます。

パウロはすぐに言葉を継ぎました。「元気をだしなさい！ わたしは神に仕えている者です」。人々の顔が一人また一人とあがります。パウロは昨夜、神のみ使いが告げたことを伝えます。「恐れるな。あなたはローマ皇帝の前でイエスさまを映し出すことになっている。神さまは船に乗っているすべての人をあなたに任せた」。更に語ります。「みなさんは、神さまからの贈り物です。神さまの約束はその通りになる。誰一人命を失う者はない！」。暴風吹きすさび、太陽も星も見えず、次々に大切な物を失う中、パウロの語る神の約束は、まるで真っ暗闇の嵐の海に瞬（まばた）く灯台の光のよう。

漂流 14 日目の真夜中。船員たちがこっそり小舟で逃げ出そうとしました。海の怖さを知るからこそ追い詰められていたので

す。パウロは百人隊長に告げます。「あの人たちが船に留まっていなければ、あなたがたは助からない」。それはパウロが常に語ってきたこと。「いなくていい人など一人もいない！」。

兵士たちがロープを切ったので小舟は海へ流れ、逃げようとした船員たちは囚人のようにうなだれました。重苦しい船の中にパウロのカラカラと朗らかな声が響きます。「みなさん！ 朝のごはんを食べましょう！ 一人も失われることはない！ あなたがたの髪の毛一本さえも！ 今わたしたちがなすべきは一緒に朝ごはんを食べること！」。そしてパンをとり、感謝の祈りをささげ、むしゃむしゃと頬張（ほおば）ってみせたのです。人々の暗い心に一筋の朝陽が差し込みます。

誰からとなくパンを配り、水をコップに注いでまわします。囚人、兵士、ユダヤ人、ローマ軍の隊長、船乗り、一緒に食卓を囲むことなど絶対になかった人たちが、朝の食卓を囲みます。一人も失われることなく！ うれしくて人数を数えた人がいました。パンを片手に 1、2、3、4、ああ、全部で 276 人だ！

ともに元気に

聖書 使徒言行録27章13〜38節

暗唱聖句 元気を出しなさい。…皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。
使徒 27：22

聖書から…

パウロがローマへと護送されていきます。パウロは途中でこの航海の危険性を忠告しますが、誰も囚人パウロの言葉を聞いてくれません。船乗りからすれば、素人の言葉など聞く必要のないものでした。案の定、船は暴風に襲(おそ)われ、流されていきます。当初、遭難(そうなん)の中にあっても助かろうと人々は荷物や船具を捨てましたが、次第に望みを失い、自己中心的になっていきます。

そんな中、同船者を励まそうとパウロは「元気を出しなさい」と言葉をかけていきます。彼が言葉を発することができたのは、「強い」人間だからではありません、前夜、パウロは「神さま」からの励ましを受けていました。彼は、その励ましを独り占めせずに、同船者と分かち合ったのです。

励ましの言葉はスグに同船者全員へ届いたわけではありません。船員は、働きを放棄して逃げようとしています。パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言い、船員たちの逃亡を防ぎます。船出した時、パウロの言葉は無視されましたが、今、パウロの言葉は百人隊長、兵士などの人々に届き始め、人々の心を動かしています。パウロは同船者たちの心身を整えようと「食事」を共にします。食事は同船者二百七十六名全員にいき渡りました。囚人だから、逃亡したからといって、もらえない人はいません。全員が食事を共にしています。

いのちとはこのように線引きされず、守られなければなりません。荷物、船具、身分や立場などが失われ、「裸のいのち」だけとなった時、人々は共に生きることの喜びを痛感しています。今、この船にいる全員が、それぞれを慈(いつく)しんでいます。荷を軽くして、走る船。その船路は希望に満ち溢れているのです。

分かち合おう

- 二百七十六名という数字は人間を一括にするものではありません。そこには一人ひとりのいのちがあります。私たちは誰も何か一括で数えられる存在ではありません。各々が、個性を活かし合いながら、生きていける世界を作るにはどのようなことが必要でしょうか？

- 聖書には多様な人々がでてきます。最近、多様性を大事にしましょうという言葉をよく耳にするようになりました。実際、異なった人々同士が言葉を交わすことは簡単なことではありません。それでもなお、聖書は多様性の大事さを示しています。具体的に多様性とはどういうことなのか。互いに意見を述べ、分かち合ってみましょう。

幼小科

ともに元気に

聖書 使徒言行録27章13〜38節

暗唱聖句 元気を出しなさい。…皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。
使徒 27：22

9課 5月29日

聖書から…

276 人もの人が乗っている大きな船には、どんな人が乗っていたでしょうか。船長、船乗り、兵隊長、兵隊、囚人、船で旅をする人たちもいました。その中で、リーダーはだれでしょうか。なんと神さまはこの船のリーダーをパウロにしたのです。囚人のパウロの言うことを最初はだれも聞きませんでした。でもパウロの言う通りになっていくことで、みんなパウロとパウロが信じる神さまが導いていることを認めるようになったのです。神さまは私たちが当たり前と考えることとは違うことをされたり、示されたりします。「リーダーらしい人とは」と決めつけるのでなく一人ひとりが自分のこととして考えたり、みんなで意見を聞き合ったりすることも大切です。囚人パウロをリーダーとして、立場の違う人たちが心を一つにして力を合わせることに導かれ、大嵐の海を一人の命も失わずに乗り越えることができました。

活動① ワークシート

「わたしたちのリーダーはだれ？」

●準備●おやつ

コピーしたワークシートの指令３におやつの隠し場所を書き、指令番号別に切り取ります。３人のリーダー役に渡します。３人のリーダーは、教会学校分級の時間帯に、教会内にいて分級に参加していない人にお願いしましょう。メンバーが質問をしたら、その紙を渡してもらうように頼みます。

①私たちは客船「〇〇教会号」に乗っています。遠い国への長い航海の途中です。大変です。大嵐で船長や船乗りたちはどうすることもできずに困っています。神さまがこの客船「〇〇教会号」の中に３人のリーダーを立て神さまの言葉を託しました。しかし、それがだれなのかわかりません。この３人のリーダーを探し出し、「あなたは神さまが立てたリーダーですか？」と聞いてみましょう。

②３人のリーダーを見つけ出し、３枚の神さまの言葉を受け取り、そこに書いてあることをみんなでやりましょう。

活動②

「あなたが大事」

276 名もの人が数えられたように、私たちは神さまから一人ひとり数えられる、一人として欠けてはならない大事な存在です。各自今日の暗唱聖句カードを１枚ずつ持って、円になって内側を向いて座りましょう。一人ずつ自分の右隣のメンバーについて「あなたがいてくれて、うれしい」と思うことを順番に話してみましょう。そして、自分が持っているカードをその人に「あなたが大事」と伝えて渡しましょう。

ワークシート
わたしたちのリーダーはだれ?

神さまからの指令 ①

『新生讃美歌』54番（日本バプテスト連盟）「主はすばらしい」を歌いながら下のように踊りましょう。

主はすばらしい　…　手拍子をしながら、回ります
主はすばらしい　…　手拍子をしながら、反対回り
主はすばらしい　…　手拍子をしながら、足踏み
わたしの　…　手をぐるぐるしてしゃがむ
主　…　大きく飛び上がる

神さまからの指令 ②

みんないっしょに言ってみましょう。

元気を出しなさい。
…皆さんのうちだれ一人として命を失うものはないのです。
使徒言行録27章22節

神さまからの指令 ③

みんなで食べて元気を出しなさい。

を見なさい。

聖書の学び

聖霊は語り続ける

聖書　使徒言行録28章17〜31節

暗唱聖句　何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、
主イエス・キリストについて教え続けた。使徒 28：31

ローマに到着、軟禁（なんきん）

パウロはマルタ島に漂着し、その後、イタリア半島の諸都市を移動します。それらの都市で、「兄弟たち」（28：14、15）、つまり、キリスト者たちと交わりを持つことができました。その中には、「ローマから」（28：15）来た兄弟たちもいました。ローマにも教会があり、キリスト者が活動していたのです。しかし、28：17 以下、「使徒言行録」の最後には、彼らは登場しません。むしろ、ローマにいたユダヤ人指導者たちが、パウロと出会って対話するのです。パウロは、ローマでは牢獄に入れられたのではなく、番兵を付けられましたが、自分で住むことを許されたようです（28：16）。

ユダヤ人指導者たちとの対話

パウロはユダヤ人指導者たちを家に招き、弁明しました。自分はユダヤの慣習（かんしゅう）に背くことはしていないのに、ローマ人に「引き渡され」てしまった、と。しかし、過去を振り返ると、パウロはむしろ暴動の中で保護されたのです。この「引き渡された」という言葉は、「ルカ福音書」で、主イエスの受難予告と結び付いています（ルカ 9：44、18：32）。著者ルカは、主イエスとパウロの姿を重ねて描こうとしています。

ユダヤ人指導者たちは、パウロのことを知らなかったようです。しかし、「この分派」であるキリスト教については、「至るところで反対があることを耳にして」いました。彼らは、この分派をすぐに断罪するのではなく、パウロを通して知ろうとしました。

別の日に再び来たユダヤ人たちに、パウロは朝から晩まで熱心に、神の国とイエス・キリストを証ししました。しかし、彼らの見解は一致せず、立ち去ろうとしました。そのような彼らに、パウロは、イザヤ書 6：9〜10 の言葉を引用して語りかけます。このイザヤ書の言葉は、主イエスも、教えを理解しないユダヤの人々に対して語っています（ルカ 8：10）。パウロは最後に言います。「神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです」。「使徒言行録」は、基本的には神の救済が「ユダヤ人から異邦人へ」と向けられたことを語ります。けれども、この時も、ユダヤ人の「ある者は、パウロの言うことを受け入れた」のです。そして、パウロは、これまで何度も「わたしは異邦人の方に行く」（13：46、18：6）と言ってユダヤ人に見切りをつけているようで、しかし、このローマでの最後の時も、ユダヤ人に伝道をしているのです。

大胆に、妨げもなく

パウロは軟禁状態でしたが、彼の家に「訪問する者はだれかれとなく歓迎し」ました。28 節の言葉からだと、この歓迎した人たちとは異邦人だけのように読めますが、他の写本には「ユダヤ人も異邦人も」と付加されているものもある（荒井献『使徒行伝』新教出版社）ことは慰（なぐさ）めです。

パウロは、「全く自由に何の妨げもなく」、

神の国とイエス・キリストを宣べ伝え、教え続けました。「全く自由に」は、「実に大胆に」（荒井献『使徒行伝』新教出版社、岩波訳）、「正々堂々と」（田川建三『新約聖書』作品社）という意味です。この言葉は、「使徒言行録」4：29で、脅（おど）された後に釈放されたペトロの祈りの中に出て来ます。「主よ、今こそ、思い切って大胆に御言葉を語ることができるようにしてください」。

そして、原典で最後の言葉となるのが、「妨げもなく」です。パウロは軟禁され、外に出ることができません。それでも、聖霊による福音宣教は、妨げられずに広がっていきます。「使徒言行録」は、パウロがその家に「丸二年間」住んだことを伝えますが、それ以後のことは記していません。おそらくその直後、パウロは処刑されたと思われますが、その死については報告されません。パウロの人生に関心があるのではありません。福音が聖霊によって、これからも運ばれ、広がっていくことが主題なのです。「聖霊は語り続ける」、今も！

準備のための聖書日課			
30日	㊊	全員無事に	使徒言行録 27:39～44
31日	㊋	ローマ到着	使徒言行録 28:11～16
1日	㊌	主イエスの姿に 重ねて	ルカ18:31～34
2日	㊍	預言者イザヤを 通して	イザヤ6:8～10
3日	㊎	キリストの福音を 妨げず	コリントー9:1～12
4日	㊏	聖霊によらなければ	コリントー12:1～3

成人科

●聞いても理解せず、見ても認めず、心が鈍くなっている姿は、この時のユダヤ人だけの姿でしょうか？ 他人事ではなく、我が身を省みます。自分たちは神の言葉に聞き従い、神の近くにいると思っている時にこそ、心が頑なで、鈍くなっているのかも知れません。私たちキリスト者こそ、心を柔軟（じゅうなん）にし、そして、真剣に真理を求め、聞き取っていかねばならないと思わされます。

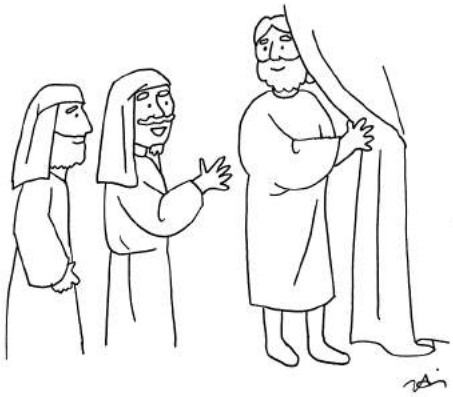
●「訪問する者はだれかれとなく歓迎し」。2020年3月発行の性差別問題特別委員会の冊子には、『ようこそ教会へ…わたしたち大丈夫？』という表題が付いています。私たちの教会は、性別や職業や国籍…そのような違いで、「ようこそ」の対応を変えてはいないでしょうか？ セクシュアル・マイノリティの人を拒否したり、あるいは、憐（あわ）れむべき人として上から目線で受けとめたりしていませんか？ また、牧師の連れ合いや子どもを、勝手な理想や過剰な期待をもって迎えてはいませんか？ その人のアイデンティティを尊重する真の受容こそ、福音宣教の第一歩です。

みんなで聴く聖書のおはなし

聖霊は語り続ける

聖書 使徒言行録28章17〜31節

暗唱聖句 何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、
主イエス・キリストについて教え続けた。使徒 28：31



10課

6月5日

パウロはついにローマに到着しました。望みであったローマ！ 裁判が決着していない囚人として訪れるとは思ってもなかったこと。番兵こそ付けられましたが、パウロはローマの町に家を借りて住むことを許されます。

これまでの通り、パウロはまずこの地に住むユダヤの仲間たちにイエスさまのことを語らねばと思いました。会堂に出向くことは許されないので、自分の家に招きます。招待されたユダヤ教の指導者たちがやってくると、パウロは扉を開き、喜んで迎え入れ、招待した理由を説明します。自分はユダヤの仲間たちを愛していること、伝えたいのは聖書が告げる希望であること、それを拒む仲間たちに訴えられ、ローマ皇帝の裁判を受けざるを得なかったこと、争うつもりは決してないこと。ユダヤの指導者たちはパウロに言いました。「あなたのことで直接悪い噂は聞いてはいないが、あなたも一員であるイエス派についてはいろいろ耳にしています。あちこちで面倒（めんどう）を起こしているようだ。あなたの考えを直接聞きたい」。改めてパウロの話を聞く日を決めます。

さて、たくさんのユダヤの仲間たちがパウロのもとへやって来ました。パウロは扉を開き、心から喜んで迎え入れ、聖書が告げる希望はイエスさまによって実現したと大胆に語ります。ある者は、パウロが伝える希望に心を開きました。しかし多くの者はしかめっ面、鈍い音で心の扉を自ら閉めると、好き勝手におしゃべりし、もう気が済んだと立ち去ろうとする。そんな仲間たちにパウロは悲しみを刻んだ聖書の言葉を手渡さなければなりません。「君たちの目は閉じてしまった。君たちの耳は遠くなってしまった。ああ、心の扉を閉める鈍い音。君たちは立ち帰らない」。

パウロは今朝も扉を開き、心から喜んで迎え入れます。そこに何の妨げもありません。旅の人、外国船の船乗り、世界を行き交う商い人、パウロは大胆にイエスさまを伝え、聖書の告げる希望が実現した喜びを手渡し、扉から送り出します。時々、人目を避けて訪れるユダヤの仲間もいます。パウロは何の妨げもなく扉を開き、喜んで迎え入れます。心の扉を閉ざす鈍い音を聞いた時には、悲しみを刻みながら祈りで送り出します。「あなたを神と恵みのことばにゆだねます」。

今も、良き知らせは大胆に語り続けられています。扉は開かれ続けます。心から喜びつつ、悲しみを刻みつつ、ことばが手渡され、人を送り出し続けます。そこに何の妨げもありません。

聖霊は語り続ける

聖書 使徒言行録28章17〜31節

暗唱聖句 何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、
主イエス・キリストについて教え続けた。使徒 28：31

聖書から…

遭難を乗り越えてローマにたどり着いたパウロ。囚人の身ではありましたが、家を借りられるほどの自由な生活が与えられました。

パウロはローマに住む「主だったユダヤ人」たちを自宅に招いています。彼は異邦人伝道を主の働きと思っていましたが、ユダヤ人への宣教を諦めていないのです。パウロは自分にかけられている様々な容疑を晴らそうと、経緯を丁寧に説明しています。ローマのユダヤ人たちは、パウロが何を信じ、何を宣教しているのかを自分たちで知りたい思いがあったようです。

この後、多くのユダヤ人、異邦人がパウロのところを訪れるようになりますが、彼は分け隔てることなく、イエスさまについて語りました。この時、パウロは「モーセの律法」「預言の書」を引用したとあります。ユダヤ人にとってもこの二つのことは大切なことでした。パウロは相手を否定するのでなく、配慮に満ちたやり方で福音を伝えようとしています。

しかし、パウロのやり方も完璧ではありません。福音を信じる者もいれば、信じない者もいます。大事なのは少数でもイエスさまを信じる人が与えられたことです。また、パウロは信じない人々を諦めたわけではありません。その人々に対して、イザヤ書を用いて、福音を知って欲しいと語り続けています。

パウロはこの後二年間、出会う人々を歓迎し、神の国、イエス・キリストについて語り続けました。その後、パウロがどうなったかは聖書には記されていません。しかし、どんな時、どんな場所、どのような人に対してもパウロは福音を伝えようとし続けたことでしょう。

分かち合おう

- パウロは信じなかった人々に対して、諦めず、語り続けています。パウロにとって福音とはそれほどまでに「伝えたい」ものであったのです。私たちはどうでしょうか？もしかすると最初から、自分がイエスさまのことを伝えても分かってもらえないと諦めていませんか？ 人にはその人にしか紡ぐことのできない「言葉」があります。自らの言葉で誰かにイエスさまを伝えてみませんか？

- パウロは自分に先立って、聖霊が宣教の業をしていることを知っていました。故に、自分の家を訪問する人々は聖霊の導きによって集められた人々であると理解し、彼は集まった人々を「だれかれとなく歓迎」したのです。さて、教会はどうでしょうか。教会を訪れるすべての人が神さまや聖霊の導きによって集められた人々であると理解し、本当に歓迎しているでしょうか。

幼小科

聖霊は語り続ける

聖書 使徒言行録28章17〜31節

暗唱聖句 何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、
主イエス・キリストについて教え続けた。使徒 28：31

聖書から…

今日はペンテコステ（聖霊降臨日）。この日、イエスさまが十字架につけられ殺されてから、隠れて閉じこもることしかできなかった弟子たちに、約束されていた聖霊が注がれました。弟子たちの中に不思議な勇気が沸き上がり、扉を開けて外に出て、イエスさまの十字架と復活によって示された福音を宣べ伝えるようになりました。そして、たくさんの人が導かれて、教会が生まれました（使徒言行録２章）。

ローマに連れて行かれたパウロも、行動の自由は制限されていましたが、そのことは反対にパウロが全く自由に、イキイキと語る福音のメッセージを際立たせました。たくさんの人がパウロの家にやってきて、イエスさまの話を聞きました。パウロはだれがやってきても、喜んで扉を開けて、その人を迎え入れ、福音を語りました。

聖霊は、人の心の中や、人と人の間にできてしまう妨げを取り除かれます。それは聖書の時代だけでなく、今も同じです。目に見えない聖霊が、私たちの中にある妨げを取り除き、私たちを新しい命へ導き、教会に結んでくださいます。

活動①

「わたしたちの教会の始まり」

それぞれの教会の始まりの物語を聞きましょう。いつ、だれが、どんな風に、教会を立てる働きに集められ、用いられ、どんな風に教会が生まれて、育っていったのでしょうか。普段は教会学校幼小科とは接点のない方々からお話を聞けるといいかもしれません。目に見えない聖霊が、どんなふうに働かれて、具体的な教会ができるのか、身近に感じる機会にしましょう。

活動②　ワークシート

「パウロの旅すごろく」

４課から 10 課で学んできた「パウロの旅」をすごろくで楽しく振り返ってみましょう。

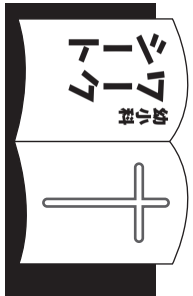
●**準備**●ワークシートの拡大コピー、下の聖霊の助けカードのコピー

①聖霊のお助けカードはひとり２枚ずつ持ち、ミッションにちょうど止まって、問題の答えが分からない時などに指示に従って使用できます。使っても使わなくても OK、必要ならば１枚おまけしてあげてもよいでしょう。

②ミッションクリアできなかったら、そのままそのマスに留まります。
「ミッション・コリント」の答え（例：プリスキラ、アキラ、ルカ、マルコ、シラス、リディア、テモテ、フィレモン、オネシモなどなど）ヒントに聖書の箇所を伝えて、開いて答えるように導いてもいいと思います。

ワークシート

パウロの旅すごろく



スタート

「ちびっこパウロの旅」

☆は聖霊の助けカードを使ってクリアする方法だよ。

ミッション・アテネ

アテネの町には、あっちにもこっちにも神々の像がまつられています。パウロはイエスさまを証しします。＊を歌いましょう。☆日本語以外の言葉で歌えたら３マス進む。

ミッション・コリント

落ち込んでいるパウロに、神さまは素敵な出会いを用意していました。その人の名前は？言えたら3マス進む。

☆メンバーのひとりに助けてもらえます。助けてもらいたい人を指名しましょう。名前を言えたら３マス進む。

ミッション・嵐の海

経験豊富な船長や船乗りもどうしようもない大嵐。さいころを振って、

１・３・５が出たら１回休み

２・４が出たら１０マスもどる

６ならゴール

☆もう一度さいころを振れる。

ゴール・ローマ

パウロのローマの家にはいつもお客さんがたくさんやってきました。パウロは喜んで迎え、イエスさまの話を語り続けました。

ミッション・カイサリア

２年間も牢屋に入れられているパウロ。次の順番までタオルで両手を縛りましょう。次の番が回ってきたら、「神の言葉はつながれていません」と言って、タオルをほどいてもらいましょう。

☆何も見ないで言えたら３マス進む。

ミッション・エルサレム

パウロを捕まえて殺そうと迫る大騒動の中で、パウロは心穏やか。堂々とキリストを証しします。今日の暗唱聖句を言いましょう。☆何も見ないで言えたら３マス進む。

ミッション・エフェソ

エフェソの教会の人たちとのお別れの時。悲しみの中で祈りをかわします。さいころを振って、

１・３・５が出たら１回休み

２・４・６が出たら３マス進む

☆もう一度さいころを振れる。

聖霊の助けカード

＊『新生讃美歌』54番（日本バプテスト連盟）

聖書の学び

今や、明らかにされた！

聖書 コロサイの信徒への手紙1章24節～2章5節

暗唱聖句 知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。
コロサイ２：３

11課 6月12日

パウロとコロサイの教会

コロサイの町はアジア州フリギア地方にあり、その教会は、パウロが第三伝道旅行でエフェソに滞在中、彼の仲間によって伝道が始まりました（使徒 19：10）。パウロ自身は、コロサイの教会の人々と直接の面識はなかったと思われます。

パウロは、コロサイの教会を訪ねたいと願っていましたが、捕えられてしまいます。この手紙は、パウロが獄中から出した「獄中書簡」の１つです（4：3、18）。パウロは、コロサイの教会の人々と「体では離れている」ことを痛感しています。しかし、その距離を越えて心配し、牧会しようとするパウロの熱い想いが伝わってきます。

負うべき苦難

パウロは、自分の務めは、「御言葉を余すところなく伝え」、「キリストの体である教会に仕える」と言います。そして、その務めには、「苦しむこと、労苦」が伴うのです。しかし、パウロは、その苦難について、更に踏み込んで言います。今や私は、「キリストの苦しみの欠けたところ」を身をもって満たすと。どういうことでしょう。キリストによる十字架の贖（あがな）いは不十分であり、人間が補わなければならないのでしょうか。いいえ、ここでの「キリストの苦しみ」とは、キリスト自身の苦しみではなく、「キリストとの交わりのために経験する苦しみ」（ヴィトカンプ『コンパクト聖書注解』教文館）と考えたいと思います。キリスト者が負わねばならない苦難は、神の国が完成する時まで、まだ残されているのです。

秘められた計画・キリスト

パウロが伝えるみ言葉は、ここでは「秘められた計画」と呼ばれています。「秘められた計画」は、「奥義」（口語訳、新改訳2017）、「秘儀（ひぎ）」（協会共同訳）と訳されます。この言葉は、パウロが積極的に用いたのではなく、2：4の「巧みな議論」によって信者を惑わし、教会を混乱させている誤った教えにおいて用いられた言葉だと思われます。

この誤った教えについては、「人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事」（2：8）だと厳しく批判されています。グノーシス主義的密儀宗教だと思われます。この宗教においては、「秘められた計画・奥義」は、秘密の儀式や呪文によって徐々に開示されると考えられていました。開示される奥義を、個々人が悟り、取得し、ステージを上がっていくのです。そこでは優劣（ゆうれつ）が生まれ、更には裁きや分裂が起きます。コロサイの教会にも、この誤った教えによる混乱があったのでしょう。

パウロは、敢えて「秘められた計画」という言葉を使い、それはイエス・キリストのことであると明確に語ります。「その計画とは、あなたがたの内におられるイエス・キリスト！」「あなたがたの内」とは、個人に内在する神秘的キリストではなく、教会の交わりにおいて礼拝されるキリストということです。

そして、このキリストは、徐々に開示されるのではなく、「今や！」、全く「明らかにされた」のです。今や、「異邦人」も含め「すべての人」が、イエス・キリストを知り、結ばれることへと招かれているのです。「知恵と知識の宝」（2：3）を持つ「完全な者」になりたいと言うのなら、それは、ただイエス・キリストを知り、信じることによると断言するのです。

離れていても

パウロは、獄中にいますから、コロサイの教会の人々と「体では離れて」いて、教会のすべてを知っているわけではありません。実際には、教会の中になお混乱もあったことでしょう。それでも、パウロはコロサイの教会の人々と「霊では共に」いるゆえに、その「正しい秩序と固い信仰を見て喜ぶ」と言うのです。見ていなくても見たかのように喜ぶのです。1：24～2：5のこの箇所は、「喜び」で始まり、「喜び」で終わります。

準備のための聖書日課			
6日	㊊	御子は教会の頭	コロサイ1:9～20
7日	㊋	福音に仕える者として	コロサイ1:21～23
8日	㊌	福音の前進	フィリピ1:12～14
9日	㊍	同じキリストの体の一人一人	コリントー12:26～27
10日	㊎	キリストのために苦しむことも	フィリピ1:27～30
11日	㊏	すべての人を憐れむため	ローマ11:25～36

成人科

●修行を重ねたり、秘儀に与ったりしながら、救済へのステージを上っていく宗教があります（かつてサリンを用いて無差別大量殺人事件を起こした団体はその典型）。それは、競い合いながらステージをクリアしていくゲームと重なります。私たちの信仰が、そのようなステージを上昇するゲームの１つのようになってはいないでしょうか？ イエス・キリストは世に降って、「異邦人」を含め「すべての人」の救いとなってくださいました。救いが私たちに近づき、到来し、明らかにされたのです。だから、それは恵みなのです。

●キリストは、私たちを競わせ、争わせ、分裂させるのではなく、「結び合わせて」くださいます。獄中にいるパウロとコロサイの教会の人々は、「体では離れていても」、「共にいて」「喜ぶ」ことができたのです。今、私たちは、教会の交わりおいて、施設にいる高齢者や遠方に住む教会員の方たちと、どのように共にいるでしょうか？ 何を一緒に喜んでいるでしょうか？

みんなで聴く聖書のおはなし

今や、明らかにされた！

聖書 コロサイの信徒への手紙1章24節～2章5節

暗唱聖句 知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。
コロサイ２：３

11課

6月12日

パウロは今、喜んでいます。イエスさまを伝えたこの町で投獄されましたが、心は空へ羽ばたく鳥のよう。遠く離れた小さな町コロサイに、イエスさまを救い主と信じる人たちの教会が生まれ、福音が宣べ伝えられていると知ったからです。まだ会ったことのない人々の信仰を、もうすっかり見届けたようなうれしさで手紙を書くのです。

パウロに、一人気がかりな人がいました。数日前に投獄（とうごく）された男の人です。一言もしゃべらずうつむいたまま。パウロは放っておけずに声をかけました。男の人は力なく顔を上げ、ポツポツと語り始めます。家族からも友人からも引き離され、もう二度と会えないかもしれないと思うと、悲しくてやりきれないと。

パウロは言葉を添えました。「私は今、遠く離れた町の会ったこともない教会の人たちへ手紙を書いているんだ。離れていてもイエスさまが結びあわせてくださる希望を伝えたくてね。私たちはイエスさまから愛されている。この希望は決して私たちを裏切らないよ」。男の人は力なく笑います。「どうやったらあなたみたいに考えられるのかな。神さまの思いやご計画を悟る秘儀（ひぎ）があれば教えてほしいよ」。その顔が愛おしく、パウロの中で、まだ見ぬコロサイ教会の仲間たちと重なりました。パウロは教会への手紙を綴（つづ）ります。この男の人にも届けたくて。離れていても近くにいても、勇気に満ちていても臆病に閉じこもっていても、喜んでいても悲しんでいても、すべての人にイエスさまは愛を注いでくださっていること。今日を精一杯生きるすべての人に届けられたのは、「一緒に生きていこう、ついておいで」というイエスさまの招きであること。パウロは励ます。背負わされた苦しみも、イエスさまの軛（くびき）につながっての苦しみ。イエスさまが開いてくれた神の国への道を共に歩もう。たとえ離れていても、イエスさまに結ばれて私たちは共にある。

男の人は別の牢屋へ移されることが決まりました。最後の日、男の人はパウロに「あなたが書いた手紙を読ませてくれ」と頼みます。手紙に目を落とし、幾度も読み返すと、すっくと顔を上げ、パウロをまっすぐに見つめました。「今、イエスさまはこの俺を愛してくださっている。今、イエスさまはこの俺を招いておられる。今、あなたとこの俺は離れ離れになるが、どこへ行こうとイエスさまによって結ばれている。そう信じていいかな」。「もちろんだとも、私の兄弟」、パウロは今、喜んでいます。

今や、明らかにされた!

聖書 コロサイの信徒への手紙1章24節〜2章5節

暗唱聖句 知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。
コロサイ 2：3

聖書から…

パウロは会ったこともないコロサイの教会の人々へ手紙を送っています。その動機は「異なった教え」がコロサイの教会で広がり、それを正すためです。

パウロは手紙の導入部で、自己紹介を行っています。自分の働きが、あなたがたのため、教会のため、神の計画のため、すべての人のためであると語り、すべてが福音宣教に結びついていることを明確にします。そして、パウロはこれらの働きのために「喜んで苦しみを受けている」と言っています。どうして苦難を喜べるのでしょうか。「キリストの苦しみの欠けたところを、身をもって満たしています」とあるように、パウロは使徒として生きるために、イエスさまが受けた苦難に自分自身を連帯させようとしています。信仰に生きることは、時に苦難の道だけれども、それ以上に喜びのある道であるとコロサイの人々に伝えるのです。こうして、パウロは自分の働き、覚悟を明確に示します。

そのうえで、伝えようとしていることを「秘められた計画」と表現しています。この言葉は「異なった教え」の人々が使っている言葉でした。パウロはあえて、論争相手の言葉を用いて、本当の「秘められた計画」とは、人間的な行為によって知るのでなく、「キリストの内に隠れています」とあるようにイエス・キリストを知ることによって、知るようになると言うのです。パウロは会うことのできない人々でも「霊では共に」いるとし、友として覚えようとしています。彼にとって離れていても、そこで生きているキリスト者は無関係な人々ではありませんでした。どんな小さな教会であっても、たった一人のキリスト者であっても、そこでなされている主の働きは一つの福音宣教として繋がっているのです。

分かち合おう

- 福音宣教は力強い言葉が語れる人だけによってなされるものではありません。小さなことであったとしても、イエスさまを信じる人の行いは福音宣教に繋がっています。大きなことでなくてもいいので、自分ができる福音宣教とは何かを考えてみましょう。

- パウロは出会ったことのない人々のことを覚えています。どうして知らない人々を覚え祈ったのでしょうか。私たちは自分の知らない教会や人々のことを覚え、祈っているでしょうか。遠く離れている教会が、人々が、実は自分と繋がっていると考えたことがあるでしょうか。他の教会のことを覚え、祈る時間をとってはどうでしょう。福音の繋がりを感じる良い機会になるはずです。

幼小科

今や、明らかにされた！

聖書 **コロサイの信徒への手紙1章24節～2章5節**

暗唱聖句 **知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。**
コロサイ２：３

聖書から…

会いたいけれど、なかなか会えない人から手紙やハガキ、メールをもらったことがありますか？ どんな気持ちでしたか？ あったかい気持ちになったり、その人の声や表情が伝わってきたりしますね。感染症の影響で教会でも会えない、集まれない中で、今まで以上に手紙や文書、メールや電話などで、思いを伝え合うことが大切にされているのではないでしょうか。

コロサイの教会に届いたパウロの手紙には、イエスさまにつながって歩む喜びが溢れていました。手紙を読んだ人たちはびっくりしました。イエスさまを伝えたという理由で牢屋に入れられて、気を落としているのではないかと考えていたからです。「イエスさまがいてくださる。自分たちと一緒にいてくださる。だから大丈夫」。会ったことのないパウロの声が胸に響いて来ます。そして自分たちがイエスさまを信じて従っていることが、パウロを強く励ましていることがわかりました。イエスさまにつながる喜びがあふれてきます。「イエスさま、ありがとう。パウロと一緒にいてくださってありがとう。私たちと一緒にいてくださってありがとう。私たちをつないでくださってありがとう」。コロサイの教会の人たちは涙でぐちゃぐちゃになりながら笑い、「よし！ みんなでパウロに返事を書こう！」と相談しています。

11課 6月12日

活動①

「あなたが見つけた喜びを教えてください」

感染症が広がって、なかなか会えない、集まれない中で、いろんな工夫をしながら活動している教会の人たちに、どんな工夫をして来たか、見つけた喜びや感謝があるか、インタビューしてみましょう。またそれを聞いて、どんな風に感じたか、話し合ってみましょう。

活動②　ワークシート

「わたしの喜びを伝えよう」

なかなか会えない大切な人に、「あなたのことを大切に思っているよ」という思いを込めて手紙を書きましょう。今、大切に感じていることやその中で見つけた喜びがあれば伝えましょう。そして自分のためにも祈ってほしい、応援してほしいことを伝えましょう。

活動③

「あなたの喜び、なんですか？」

①メンバー同士丸くなって座ります。最初にリーダーを決めて、その人は円の外側に立ちます。
②みんなで手を叩きながら、「あなたの喜びなんですか？」と言います。
③リーダーは円の外側を回りながら、メンバーの一人の肩を「ハイ！」と指名します。
④指名された人はすかさず「わたしの喜びは〇〇です」と言います。言えなかったら、リーダー交代です。

ワークシート

わたしの喜びを伝えよう

幼小科ワークシート

さんへ

より

聖書の学び

新しい人を着て

聖書 コロサイの信徒への手紙3章5〜17節

暗唱聖句 愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。
コロサイ 3：14

捨て去りなさい

5 節の「捨て去りなさい」は、「殺してしまいなさい」という過激とも思われる言葉です。それは、1 〜 4 節の言葉を受けています。キリストを信じる者は、バプテスマを受け（2：12）、キリストと共に「死」（3：3）に葬られ、そして、再びキリストと共に復活したのです。もはや、「地上のもの」に心引かれるのではなく、「上にあるもの」（3：1）を求め、心に留めるのです。5 節以下の今日の個所では、上にあるものを求める生き方が具体的に語られます。

5 節に、「捨て去るべき」地上のものが、具体的な 5 つの悪徳として記されています。「みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲」。これらは、人間の内にある悪いものです。8 節では、更なる 5 つの悪徳、「怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい」とあります。これらは、人間の内から外に出る、他者に向けられる悪いものです。

これらの「地上のもの」に、コロサイの教会のキリスト者たちは、「（バプテスマを受ける）以前、従って歩んでいた」と言われています。では、今は、それらから全く解放されているのでしょうか。いいえ、今も尚、それらに呑まれそうになる時があるのです。だからこそ、「捨て去りなさい」と厳しく命じ、呼びかけられているのです。

日々、新たに

「古い人」を脱ぎ捨て、「新しい人」を身に着けるように呼びかけられます。バプテスマは、その厳粛なしるしです。しかし、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着けることは、一度限りのことではなく「日々」のことでもあるのです。「日々、新たに」にされるのです。

「新しい人」は、「造り主の姿に倣」います。これは、創世記 1：26 〜 27 にある、人は神に「かたどって創造された」ことが意識されています。そして、新しい人は、「真の知識に達するのです」「真の知識」は論敵のグノーシス主義者が主張していたことです。それを逆手にとって語っているのでしょう。

古い人が新しくされていく恵みの場所では、もはや、「ギリシア人とユダヤ人」という民族の違い、また、宗教儀式や社会的地位の違いによる差別はありません。更に、「未開人、スキタイ人」という表現をもって、野蛮人として軽蔑されていた人や、東方の果てに住み、「未開人の中の未開人」と言われていた「スキタイ人」も含め、「すべてのもの」がキリストの恵みのうちにあることを語るのです。

一切の上に、愛を

12 節では、5 節や 8 節の悪徳に対応する形で、5 つの善い徳が語られます。「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容」。これらは「新しい人」の行ないであり、これらを「身に着ける」のです。

そして、「忍び合い…赦し合う」ことが語られ、頂点の言葉として「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい」と言われます。実は、14節の原典には「加える」とか「身に着ける」という動詞はありません。「これら一切の上に、愛を」（田川建三『新約聖書』作品社）ということです。様々な徳に更に加えられる一つの徳ではなく、愛はすべてのものを覆い、それらを完成へと至らせるのです（コリントー13：13参照）。

これらの徳や愛は、人間の意志や道徳心からは生まれません。神の恵みの業が先にあります。「あなたがたは神に選ばれ、…愛されているのですから」と言われます。そうです、先立つ神の選び、神の愛があるのです。そして、「主があなたがたを赦してくださったように…」。私たちの罪が赦され、贖われたキリストの十字架があるのです。そこからこそ、私たちの新しい「平和」をつくり、「賛美」の歌を口ずさむ生き方が始まるのです。

準備のための聖書日課			
13日	月	キリストに結ばれて歩む	コロサイ2:6～19
14日	火	一人の新しい人へ	エフェソ2:14～22
15日	水	キリストを着た者は	ガラテヤ3:26～29
16日	木	肉の業と霊の結ぶ実	ガラテヤ5:16～26
17日	金	最も大いなるものは愛	コリントー13:8～13
18日	土	地上のものではなく上にあるものを求めて	コロサイ3:1～4

成人科

●この箇所は、キリスト教用語で言うならば、「義認と聖化」について語っています。先ず一方的な神の恵みとしての救い（義認）があります。「あなたがたは神に選ばれ…愛されている…」、「主があなたがたを赦してくださった」！ その先行する神の恵みに押され、促されて、私たちは変えられ、「上にあるもの」（3：1、2）、慈愛や柔和に生き始めること（聖化）ができるのです。信仰によって変えられること（聖化）を、どのように考えますか？ クリスチャンになって、自分が変わった、あるいは変えられたと感じるところがあるでしょうか？

●悪徳の表と善い徳の表が並べられています。慈愛や柔和よりも、貪欲や怒りのほうが、私たちの日常かも知れません。確かに、善い徳に生き始めることは難しいです。しかし、そのことが、「身に着ける＝着る」という比喩をもって語られていることは慰めです。とにかく先ず上に着てみる、ということです。自分には似合わない、無理だと諦めずに、着てしまうのです。未熟でも良いから、型から入ってみるのです。その上着が、しっくりくる日が来ることでしょう。

新しい人を着て

聖書 コロサイの信徒への手紙3章5〜17節

暗唱聖句 愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。
コロサイ３：14

「あぁ着替えてぇなぁ、こんちくしょう」。薄暗い牢屋の中、一人の囚人の恨み節が響きます。外から帰ったら上着を脱ぐ、朝寒ければ上着を着る。そんな当たり前が牢屋ではできないのです。その言葉を聞き、パウロはしみじみ呟きました。「脱ぐ、そして着るか…」。

そして思い出します。古い自分を脱がせてもらったあの日。イエスさまを救い主と信じる連中を片っ端から捕らえることが、神さまを喜ばせると信じていたあの頃。自分こそ神さまを知る知識に到達したと胸を張っていました。聖書のせの字も知らない連中が「イエスさまから神を教えてもらった」と言う度に、怒りが体中からあふれました。そんなパウロをあの日、上からの光が射抜きました。上からの光！ 上からの声！ それは、あろうことか、どん底の十字架にはりつけにされているイエスさまでした。

あの日が古い自分をイエスさまから脱がせてもらった日。パウロはすべての人が十字架のイエスさまを見上げ、古い自分を脱いでほしいと願います。「自分はもう脱いだ」とは、とても思えません。今日も「古い自分を脱ぎたいです、脱がせてください」と祈らずにいられません。そう祈ることができるのがうれしいのです。

そんなことを考えていたら、牢屋のパウロへ贈り物が届きました。冬用の厚い上着。教会の仲間たちが送ってくれたのです。これから寒くなるので気遣ったのでしょう。友の優しさに心もぬくもります。「神さま、あなたが結んでくれた家族をありがとうございます」、感謝が体中からあふれます。届いた上着はパウロにはイエスさまそのもの。「私たちはみんな、イエスさまを着せてもらったんだ。赦しを、愛を、着せてもらったんだ」。

目をこらすと、牢屋の隅で縮こまる囚人仲間がいます。パウロはその男の肩に、そっと上着をかけました。「えっ？ あんたのだろ、悪いよ」。パウロは応えます。「大丈夫だ。さぁ羽織ってごらん」。尻込みする男にパウロは着せます。「ああ、ぬくもる」、縮こまっていた男の体がやわらかくなっていきます。男はゆっくり顔を上げました。「俺は間もなく裁判だ。どんな刑罰が言い渡されるか。でも不思議だ、怖くなくなった気がする。あんたにこれを着せてもらって、神さまから赦されてるような気持ちなんだ」。

パウロは今日も、新たにイエスさまを着て過ごします。イエスさまを着せてもらった喜びを言い交わしたい、まだ見ぬコロサイ教会の仲間たちに、手紙を書きます。

新しい人を着て

聖書 コロサイの信徒への手紙3章5〜17節

暗唱聖句 愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。
コロサイ 3：14

聖書から…

パウロは私たちに５つの悪徳を捨て去るべきであると強い言葉を用いて勧めています。

悪徳の源泉が「偶像礼拝」であり、それは神さまの望むことではないとも述べます。パウロは、悪徳を捨て去る唯一の道として、「上にあるものを求めさない」（3：1）、真の神さまを礼拝しなさいと語ります。自らの力では悪徳を捨て去ることはできません。誰もが悪徳に従った歩みを知らないうちにしているものです。私たちはそのようなままでいると、自分を傷つけ、他者を傷つけます。「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて」とあります。

この箇所は、「古い」自分が、「罪なき身」になり、「新しい人」になったという意味ではありません。パウロが言う「新しい人」とは、古い自分が犯した過ちを忘れることなく、悔い改め続け、赦（ゆる）されながら生きていく人のことではないでしょうか。過去の過ちを忘れないからこそ、私たちはイエスさまの限りない愛と赦しにより、「憐（あわ）れみの心」「慈愛（じあい）」「謙遜（けんそん）」「柔和（にゅうわ）」「寛容（かんよう）」「赦し合うこと」、この６つの「善い徳」の源となる「愛」を身に着ける歩みに促（うなが）されていくのです。キリストにより「新しい人」とされていく時、人間は、3章11節に示される人種差別、身分差別といった種々の差別を乗り越え、「平和」を創るようになるのです。「悪徳」を捨て去るにも、また「善い徳」を身に着けるにも、「キリストの言葉があなたがたの内に宿るようにしなさい」とあるように、キリストのみ言葉が必要であることを覚えたいと思います。主に聞き従っていきましょう。誰も自らの行いでは、自分を「救う」ことは決してできないのです。

分かち合おう

- 命（ぬち）どぅ宝の日を覚えましょう。「平和」は誰もが求めやまないものです。しかし、それが実現しないのはなぜでしょうか。どうして日本から軍事基地がなくならないのでしょうか。「沖縄の基地問題」ではなく、「日本の基地問題」であることを捉（とら）え、本当の「平和」を創るため、平和を求める人々と共に一体なにができるでしょうか。考えてみましょう。

- 教会で使われる「罪赦された」、「救われた」、「新しくされた」、「愛」、「偶像礼拝」、「悔い改める」といった言葉を私たちはどのように理解しているでしょうか。よく使われる言葉であっても、それぞれに理解が違っているのではないでしょうか。これらの言葉の内実を、相手を否定することなく、分かち合ってみましょう。

幼小科

新しい人を着て

聖書 **コロサイの信徒への手紙3章5〜17節**

暗唱聖句 **愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。**
コロサイ３：14

聖書から…

自分のことを大切に思ってくれる人が贈ってくれたもの、整えてくれたものを身に着けることは、うれしいことですね。それは目に見えない幸せをまとっているようです。悪いことをしたわけでもないのに投獄されて、行きたいところにいくことができない、会いたい人にもなかなか会うことができない日々を送るパウロを支え続けているのは、イエスさまから毎日与えられる愛・温もりでした。

パウロは自分を支えるイエスさまの愛を、今隣にいる人とも、遠く離れている人とも分かちあえることに気付かされました。パウロは心がポカポカしてきました。イエスさまにギュッとハグされているって感じて、笑顔が溢れます。

12課

6月19日

活動①

「JESUS LOVES YOU」
を送り合いましょう。

●準備●色画用紙、厚紙、色紙、シール、マーカー、両面テープなど

「イエスさまはキミのことが大好きなんだよ」って伝える、特別なハートのバッチを作りましょう。いろんな色の画用紙でハートを切り抜き、厚紙で丈夫にし、上に言葉や絵をかいたり、シールなどでデコレーションして、裏に両面テープなどで貼り付けられるようにします。「イエスさまは○○ちゃんが大好きなんだよ」と言ってプレゼントしましょう。それを洋服の胸につけたり、持ち物につけたりしましょう。イエスさまの愛を身に着けさせてもらうとどんな気持ちになるでしょうか。

活動②　　ワークシート

「壁掛けを作ろう！」

●準備●色画用紙、シール、リボン、マーカー、色鉛筆など

聖書のみ言葉を身につけて歩むことができるように、壁掛けを作って、いつも目にする場所に飾りましょう。色画用紙で額を作ったり、シールやリボンなどを使ってデコレーションしましょう。

ワークシート

壁掛けを作ろう!

愛を身につけなさい。

愛は、すべてを完成させる

きずなです。（コロサイ3章14節）

聖書の学び

祈りの輪の中で

聖書 **コロサイの信徒への手紙4章2〜6節**

暗唱聖句 **いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。**
コロサイ４：６

13課 6月26日

祈りの輪

パウロは、結びの挨拶（4：7 〜 18）を語る前に、もう一度、これまで語って来たことをまとめる形で、「勧めの言葉」を語ります。

先ず祈ることの大切さを語ります。「ひたすら祈る」、祈りに専心しなさいと言います。祈りは、神と向き合い、その声に聴き、そして呼びかけることです。この神との対話の関係こそが、すべての始点となるのです。

祈りは、「目を覚まして」いることと繋（つな）がっています。ゲツセマネで、主イエスが弟子たちに語られた言葉を思い出します。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬように、起きて祈っていなさい」（ルカ 22：46）。「目を覚まして」とは、世の誘惑に呑み込まれず、しっかりと神に目を向け、仰ぐことです。

パウロは、自分たちがコロサイの教会の人々のために祈っているように、「わたしたちのためにも祈ってください」と求め、願います。ここに、祈りの輪ができます。祈りは、私と神との一対一の真剣な実存的な交わりです。しかし、また同時に、その交わりは他者へと広がり、祈りの輪となっていくのです。

秘められた計画の宣教が開かれるように

パウロが祈りに覚えて欲しいと願ったことは、「神が御言葉のために門を開いてくださる」ように、そして、「わたしたちがキリストの秘められた計画を語ることができるように」、「この計画を明らかにできるように」ということです。

「門が開かれる」という表現は、コリントー 16:9 やコリントニ 2:12 にも出て来ますが、パウロの宣教の働きが展開され、福音が広く伝えられていくことを意味しています。それは、「キリストの秘められた計画」が「明らかに」されることです。

この宣教の業のために「祈ってください」とパウロは願います。その宣教の業は、パウロ自身の力によってできることではないからです。ただ祈りによって、それもお互いのために祈り合う祈りの輪の中においてこそ、福音の宣教は広がり進むのです。

ここで、パウロは、「わたしは牢につながれています」と語っています。この時、パウロは、獄中にいたようです。どこであったかは諸説ありますが、彼の最期の地となったローマであったかも知れません。「使徒言行録」の最後を思い出します。パウロは軟禁状態（なんきんじょうたい）でしたが、「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」（使徒 28：31）のです。

外の人に

パウロは、コロサイの教会の人々に、宣教の態度を示します。「時をよく用い」は、原語では「時を買い取る、買い戻す」ということです。キリストを信じる以前、かつて怠惰（たいだ）に浪費してしまった時間を取り戻すように、しっかりと意味あるように時間を使いなさいということでしょうか。

「外部の人」、つまり教会の外のキリスト者

でない人々に、「賢くふるまう」ように言われます。具体的には、「塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」ということです。「塩」とは、気転、機知の比喩でしょうか。「快い」という言葉には、「恵み」、「感謝」という意味もあります。「外部の人」から、問いかけられたり、あるいは、非難されたりする現実があったのでしょう。その時、「一人一人にどう答えるべきか」、その対応の言葉は、機知をもって、感じ良く、優しい言葉でありなさいという勧めです。「外部の人」との関係には、軋轢も生じます。その対応の「賢さ」は、決して保身や防御のために引き気味になる「ずる賢さ」ではなく、「体ごと、心ごと、全人格で、相手と付き合い」（青木敬和『説教者のための聖書講解』日本キリスト教団出版局）、自分を投げかけていく、恵みと感謝の業のためのものであることを忘れないでいたいと思います。

準備のための聖書日課			
20日	㊊	祈りの援助	コリントニ1:8〜11
21日	㊋	わたしと一緒に祈ってください	ローマ15:30〜33
22日	㊌	主によって門が開かれる	コリントニ2:12〜13
23日	㊍	何事にも時があり	コヘレトの言葉3:1〜11
24日	㊎	地の塩、世の光	マタイ5:13〜14
25日	㊏	蛇のように賢く、鳩のように素直に	マタイ10:16〜23

成人科

●互いに祈り合う関係が、教会にあるでしょうか？一人ひとりのために、また、教会のために祈り合いましょう。祈りのリクエストカードを配り、1つは個々人の祈りの課題、もう1つは教会のための課題を書き、それを配り直して、分かち合いましょう。神が「門を開いて」くださることを信じて…。

●キリスト者でない「外部の人に賢くふるまう」ことについて考えてみましょう。社会（職場、学校、近隣）の中で、自らがキリスト者であること、また、教会に通っていることを明らかにしていますか？周りの人は、どんな反応をしていますか？否定的な態度をする人に、どのように向き合っていますか？キリスト者の「賢さ」は、曖昧に誤魔化したり、また、饒舌に説得したりすることではなく、そこでキリストが伝えられ、平和が創られていくことにあるのです。妥協か？衝突か？を越えて、どう日本社会に向き合うことができるでしょうか？

みんなで聴く聖書のおはなし

祈りの輪の中で

聖書 コロサイの信徒への手紙4章2〜6節

暗唱聖句 いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。
コロサイ４：６

13課

6月26日

日曜日の夕暮れ、一人また一人と一軒の家へ集まります。小さなコロサイの町にも教会が生まれたのです。その日はパウロさんの手紙を聞くことになっていました。「こんなに小さな集まりの会ったこともない自分たちのことを、パウロさんは大切に思っている」。うれしくて一言も聞き漏らすまいと耳を傾けます。

「目を覚まし、感謝を込めて、ひたすら祈りなさい」、みんな心に刻みつけ頷(うなず)きます。でも、続く言葉に「えっ？」と声が漏れました。「同時にわたしたちのために祈ってください。わたしは牢につながれています」。パウロさんが投獄されているなんて！手紙の朗読が終わり、二人三人で輪になって祈ります。目を覚まし、感謝を込めて。

一人の女性は帰り道、病に伏せ教会に来られない友人の家に寄り、パウロさんが手紙で伝えたこと、今投獄されていることを語りました。友人はパウロさんが助かるように一緒に祈ろうと言いました。女性は応えます。「そうね、私も祈る。でもそれが祈りの一番じゃない。パウロさんは、イエスさまがどんどん広がることを祈ってほしいって。神さまが『さあ、み言葉のお通りだ』って門を開いてくださり、私たちがイエスさまの心を伝えることができるように祈ってほしいって」。友人の瞳が輝きます。「こうして長いこと伏せているとね、神さまが門を開いてくださるうれしさ、人一倍分かるようになった」。二人は手をとりあい、祈ります。

一人の男性は、行商の仕事で礼拝に集えなかった友人にパウロの手紙を話しました。友人はとても喜び、今度はラオディキアに行くからパウロの手紙をその町の教会の仲間に届けようと言います。男性は友人に笑って言いました。「パウロさんが、イエスさまを知らない人たちと語り合う時は、塩で味付けした快(こころよ)い言葉で語りなさいって書いてるだろ？ 僕はすぐに君の顔が浮かんだよ。君は塩の行商人だもんな」。友人も笑います。「ありがとう。イエスさまは君や俺、教会の一人ひとりを地の塩だって言ってくださった。人と向き合うと辛い思いをすることもあるけど、拳(こぶし)を固くしたって語り合えない。スープにササッと塩入れておいしくするように、こっちから拳と心を開いて、目の前の人にまるごと飛び込むよ、地の塩だもんな、俺たち」。二人は道端に肩を並べて祈ります。

あっちでこっちで祈りの輪が生まれます。神さまが門を開き続けてくださるので、イエスさまの良き知らせがどんどん広がっています。

祈りの輪の中で

聖書 コロサイの信徒への手紙4章2〜6節

暗唱聖句 いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。
コロサイ 4：6

聖書から…

パウロは「目を覚まして」「祈る」ことを勧めます。彼は、祈りが曖昧な対象になされるものでなく、主なる神さまに向けてなされること、また、私たちの祈りに神さまが応えるのでなく、「祈れ」と呼びかける神さまの先立ちがあることを示しています。

パウロは祈りとは神さまとの関係性の中で行なわれると同時に、「わたしたちのためにも祈ってください」とある通り、他者との関係性の中でもなされると言います。私からあなた、あなたから私へと双方向に祈ることが大切です。パウロは「わたしたちがキリストの秘められた計画を語ることができるように」「この計画を明らかできるように」と祈りの内容を具体的に述べており、自分も、コロサイの人々も福音宣教に真に仕えることができるように祈っています。

加えて、パウロは福音を「外部の人」に伝えるために「塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」と勧めます。人間は「言葉」で、励まされもすれば、傷つきもします。福音を伝えようとするならば、愛をもった言葉で「相手」に語る必要があります。そのような言葉を私たちが紡ぐには「一人ひとり」に目を向けることが求められます。お決まりの言葉でなく、相手の心、身体、霊に関心を持ち、相手の必要を深く考え、相手が発信していることを受信する思いが必要です。人間は一律な存在ではありませんし、状況も異なります。そのすべてを理解することはできませんが、今、自分が相対している人に必要とされる言葉を求め、考え、語る時、その言葉は「塩で味付けされた」、「愛」のある「快い言葉」になっていくのです。

分かち合おう

- マルティン・ルターは、「主の祈りは教会史上最大の殉教者」といった趣旨のことを述べています。イエスさまが教えてくださった「主の祈り」が軽んじられていることを憂いたのでしょう。主の祈りの特徴は「我ら」という言葉が繰り返され、共に祈ることが求められていることです。祈りが形骸化・個人化していないか見つめ直してみましょう。

- ソーシャルネットワークが発達し、様々なことを「発信」する力が大きくなっています。しかし、私たちは世界の課題を「受信」する力を養っているでしょうか。イエスさまは「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」と語り、自分だけでなく、他者に関心を持つ大切さを教えてくださっています。他者のことを受信するにはどのようなことが必要か語り合ってみましょう。

幼小科

祈りの輪の中で

聖書 **コロサイの信徒への手紙4章2〜6節**

暗唱聖句 **いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。**
コロサイ４：６

13課 6月26日

聖書から…

「塩で味付けされた快い言葉」でイエスさまのことを伝えるって、どういうことでしょうか。

美味しく塩で味付けされた料理を食べるとどんな気持ちになりますか？「もっと（また）食べたい」「どうやって作るんだろう」「自分も作れるようになりたいな」などと思います。イエスさまのことを伝えられた人が「もっと（また）イエスさまのことを聞きたい」「この人はどうしてイエスさまを信じるようになったんだろう」「自分もイエスさまのことを伝えられるようになりたい」と思うような言葉で伝えることができたら素晴らしいですね。

パウロはそのために「一生懸命、祈りなさい」、また「お互いのために祈り合いなさい」と言いました。この祈りの輪によって、イエスさまのよき知らせが広がって行くからです。私たちの祈りの輪にはイエスさまがともにいてくださいます。目には見えないけれど、私たちの祈りの中にいてくださるイエスさまが、私たちが語る言葉を「塩で味付けされた言葉」にしてくださいます。

活動①

イエスさまを賛美しよう
「しお、せっけん、ろうそく」

「しお、せっけん、ろうそく」（詞／曲：川上ゆり子）という賛美歌があります。（さんびかネットワーク 0802）インターネットで検索できます。簡単ですぐに覚えて歌えます。ぜひ取り入れてみましょう。この３つは「いずれもその姿を無にして役に立つ物をキリストの姿に重ねあわせて」（作者より）歌ったものです。

活動②

「イエスさまが広がりますように」

●準備●複数のぬいぐるみ、座布団

①リーダーを一人決めます。リーダーのそばに座布団を置き、そこにぬいぐるみを置きます。他の人はスタートラインに並びます。

②「だるまさんがころんだ」のように、リーダーが「イエスさまが広がりますように」と言っている間だけ動くことができます。リーダーが振り返った時に動いている人は、リーダーに捕まって、ぬいぐるみのゾーンに入れられてしまいます。他の人はリーダーのそばに置いてあるぬいぐるみや捕まっている仲間を助けてスタートラインに戻りましょう。

③全部のぬいぐるみを助けられたら成功、リーダー交代。全員捕まってしまったら、残念、リーダー交代です。

活動③　ワークシート

「ひらがなめいろ」

コロサイの教会の人たちが、ひらがなの迷路に入ってしまいました。パウロが教えてくれた言葉を思い出して。ゴールまでたどり着いたら、スタートから順番に読んでみましょう。

たて、よこ、ななめに進むことができます。

ワークシート
ひらがなめいろ

幼小科ワークシート

コロサイの教会の人たちが、ひらがなの迷路に入ってしまいました。パウロが教えてくれた言葉を思い出して。ゴールまでたどり着いたら、スタートから順に読んでみましょう。たて、よこ、ななめに進むことができます。

スタート
↓

い	つ	で	も	き	も	ご
あ	も	し	さ	ち	こ	ま
さ	き	お	で	も	う	か
み	る	せ	あ	み	ふ	ほ
び	れ	つ	じ	ち	こ	ん
な	こ	け	よ	つ	か	べ
ぎ	れ	さ	み	く	た	り
み	た	と	ば	で	か	な
こ	こ	こ	さ	ま	ず	さ
ろ	よ	い	ゆ	か	こ	い

↑
ゴール

13課
6月26日

暗唱聖句手話

今号の聖句 コロサイの信徒への手紙 3 章 14 節

愛を

「主」
右手親指を左手の平にのせる
（やや右上方に）

「頂く」
両手を右上から

自分に引寄せる

身につけなさい。

「愛」
左手の甲をなでるように
右手を回す

「身にうつす」
指を軽く曲げた両掌前向きを
「愛」の場所から

掌側を体に向けて近づける

愛は、

「身につける」
左手甲に指を半開きにした
右手甲を付け

手前に引寄せながら
指を握る

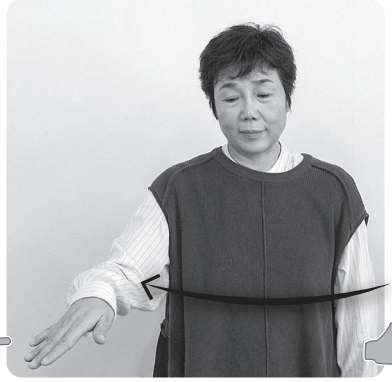
「愛」
左手の甲をなでるように
右手を回す

手話訳 塩山幸子（茂原バプテスト教会員・手話通訳士）

愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。	6月19日　12課暗唱聖句

すべてを

「すべて」(皆)
下に向けた掌で
半円を描くように



前方に水平に動かす

完成させる

「完全に」
両掌下向き
指先前方に伸ばし

きずなです。

下に向かって円を描くように

「結び合わす」
軽く開いた両手を

近づけながら
親指と人差の輪を組み

ぐるりと回す

「できる」
右手指先を左胸に当て

右胸に当てる

手話表現　鄭 鎮英（茂原バプテスト教会員・ろう者）

暗唱聖句カード 新共同訳

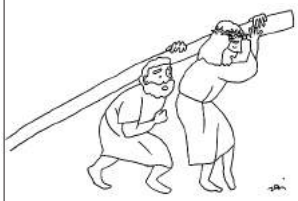
- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- http://www.bapren.com/

1課　4月3日

それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。

マルコ 8：29

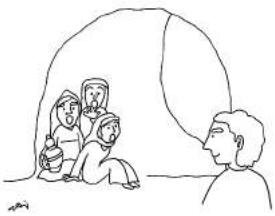
2課　4月10日



イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

マルコ 15：39

3課　4月17日



あの方は復活なさって、ここにはおられない。　マルコ 16：6

4課　4月24日

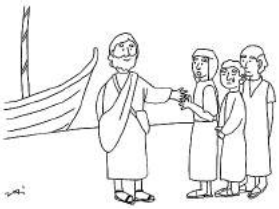
神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。

使徒 17：27

5課　5月1日

わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ。　使徒 18：10

6課　5月8日



そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。

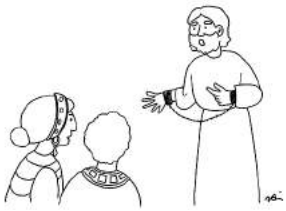
使徒 20：32

7課　5月15日

その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ」

使徒 23：11

8課　5月22日



しかし、神の言葉はつながれていません。　2 テモテ 2：9

9課　5月29日

元気を出しなさい。…皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。使徒 27：22

10課　6月5日

何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。使徒 28：31

11課　6月12日

知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています。

コロサイ 2：3

12課　6月19日

愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

コロサイ 3：14

13課　6月26日

いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。

コロサイ 4：6

暗唱聖句カード口語訳

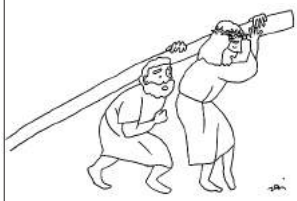
- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- http://www.bapren.com/

1課　4月3日

それでは、あなたがたはわたしをだれと言うのか。

マルコ 8：29

2課　4月10日



このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」

マルコ 15：39

3課　4月17日

イエスはよみがえって、ここにはおられない。　**マルコ 16：6**

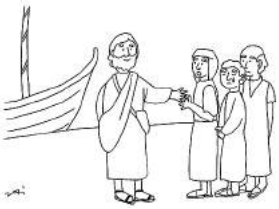
4課　4月24日

神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。　**使徒 17：27**

5課　5月1日

あなたには、わたしがついている。…この町には、わたしの民が大ぜいいる。　**使徒 18：10**

6課　5月8日



今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。

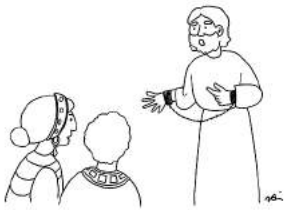
使徒 20：32

7課　5月15日

その夜、主がパウロに臨んで言われた。「しっかりせよ。」

使徒 23：11

8課　5月22日



しかし、神の言はつながれていない。　**2テモテ 2：9**

9課　5月29日

元気を出しなさい。…あなたがたの中で生命を失うものは、ひとりもいないであろう。

使徒 27：22

10課　6月5日

妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた。

使徒 28：31

11課　6月12日

キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。　**コロサイ 2：3**

12課　6月19日

愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。

コロサイ 3：14

13課　6月26日

いつも、塩で味つけされた、やさしい言葉を使いなさい。

コロサイ 4：6

聖書教育奉仕者紹介

神さまが豊かに、豊かに…。

現在の『聖書教育』スタイルは 2022 年度までで、2023 年度から新しくなります。

1 年間連載で、これまでの誌面を支えてくださった方々にスポットをあてたいと思います。まずは子どもたちのクラスを豊かにしてくださった「ワークシート」製作者の方々です。ワークは科の執筆者が内容を提案してくださいますが、それをワークシートに仕上げてくださるのが製作者です。作者お気に入りのワークイラストと共に証しを紹介します。

差し出した働きを、神さまが豊かに豊かに用いてくださいます。

亀山あや子

2011 年 4・5・6 月号
2020 年 1・2・3 月号

「え、『絵』ですか？」奉仕の依頼があったときに思わず出た言葉です。絵を描くことは嫌いではありませんでした。でもそれは自分一人で楽しむものでした。「奉仕とは賜物が用いられるものではないのか。私は絵が上手だと思ったこともない。それなのに、なぜ？」というのが正直な気持ちでした。しかし、不得意だから、自信がないからこそ、何度も聖書を読み返し、主に依り頼み、祈りの中で奉仕を続けることができました。弱い時にこそ、主は働いてくださいます。私には力も能力もないけど、主が成し遂げる力を与えてくださるのです。そうでなければこの奉仕はできませんでした。「できない」を「できる」に変えてくださる主に感謝です。

2012 年 1・2・3 月号 P57
サングラスをかけた羊

岡村円香

2011 年 4・5・6 月号
2017 年 1・2・3 月号

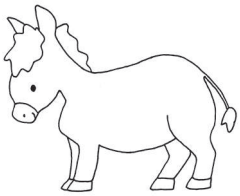
絵を描くことが好きだったので、聖書と結びつけて描けることは喜びでした。本当のイエスさまの姿は？ イナゴを愛らしく描くには？ など、考え試行錯誤していました。エリシャの箇所は特に印象に残っています。エリシャは「はげ頭」と言われる箇所があると聞き、聖書を読み、調べ、衝撃を受けました。知らなかったことを知るのは楽しいです。本当にはげていたかは分かりませんが、絵では頭のてっぺんをツルツルにしました。絵を描くために、それまでは気に留めなかった部分に目を向けて聖書を読むようになりました。また、執筆者の皆さんの聖書解釈や思いに触れ、視野が広がったことも大きな恵みでした。神さまに大感謝です。

2016 年
7・8・9 月号
P103 **エリシャ**

吉﨑 愛

2017 年 4・5・6 月号
現在

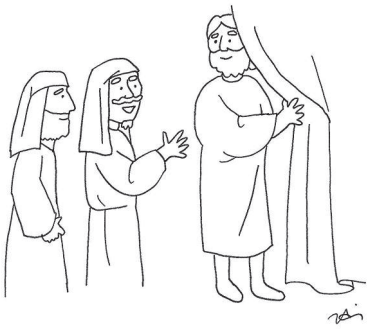
執筆者の方々が聖書の箇所から発案されるワークシートは、子どもたちがみ言葉に親しめるようなアイデアにあふれていて、いつも楽しみにしながら作成にあたらせていただいています。私自身、教会学校の幼稚科で奉仕をしていることもあり、子どもたちがワークシートに取り組む姿を思い浮かべながら、また、自分も実際に試してみながら仕上げる時間は、よき学びの時となっています。我が子が「教会学校でやったよ！」とそのワークシートを持ち帰る時代もありました。執筆者の方々の思いや、イラストから子どもたちが感じとるイメージを大切にしながら、子どもたちがみ言葉にふれるための働きに用いられていること、神さまに感謝します。



2018 年 1・2・3 月号
P79 **子ろば**

次号

聖書教育



特　集

平和メッセージ
柴田良行

SDGs から学ぶこと
堀野浩嗣

連　載

教会学校月間によせて
高橋秀二郎

今、信仰を告白するということ
濱野道雄

ご意見、ご感想をお待ちしております。
FAX●048-883-1092　Eメール●seishokyouiku@bapren.jp（編集担当）

聖書教育

● 2022 年 2 月 20 日発行・発売　●定価 1,200 円（税込）

発行人　中田 義直
発　行　日本バプテスト連盟
〒 336-0017　埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4
TEL : 048-883-1091　FAX : 048-883-1092
日本バプテスト連盟 HP　https://www.bapren.jp/
聖書教育 HP　https://www.bapren.com/
ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp
郵便振替口座 00150-9-192579

印刷　ニューライフミニストリーズ（新生宣教団）

●内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。
●ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。
●聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。
©2022 日本バプテスト連盟
●乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

●表紙　三浦あや
●みんなで聴く聖書のおはなしカット　香月 藍
●レイアウト　JC ユニット
●幼小科ワークシート　吉﨑 愛

表紙「祈りの輪の中で」